

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第112集

本 宮 遺 跡

Motomiya Site

市木川総合二級河川整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、市木川統合二級河川整備事業に伴い、本宮遺跡の発掘調査を行いました。

本宮遺跡の位置する串間市市木は市木古墳群が所在し、近辺には大小様々な遺跡が存在していることが知られています。本遺跡はそのうちの市木4号墳と市木川にはさまれた扇状地に立地しています。この市木川は、時に荒れ狂う川となり大きな水害を付近にもたらしてきました。本書はこの河川改修工事に先立っての調査報告です。

今回の調査では、弥生時代から近代にかけての遺構を検出するとともに、当時の人々が日常使用していた土器や石器などが大量に出土したことから、本遺跡周辺で長い間、先人の生活が営まれていたことが推測されます。その頃、当地域では自然環境や社会環境に適応しながら独自の文化を育てていったものと推察されますが、一方で、土器につけられた文様などから広域にわたる人・もの・情報の交流の跡をうかがい知ることができ、大変興味深いものがあります。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成17年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 宮園 淳一

例 言

- 1 本書は、市木川統合二級河川整備事業に伴い、宮崎県教育委員会が行った本宮遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県土木部申間土木事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成15年11月7日から平成16年1月21日まで行った。
- 4 現地での実測・写真撮影等の記録は、杉田康之・古屋美樹が行った。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影等は、杉田が整理作業員の協力を得て行った。
- 6 本書で使用した第1図「本宮遺跡と周辺の遺跡位置図」は、国土地理院発行の25,000分の1図「本城」、第2図「本宮遺跡周辺地形図」は、国土地理院発行の5,000分の1図「国土基本図」を基に作成した。
- 7 次の業務はそれぞれ業者に委託した。
 - 空中写真撮影 …………… 九州航空株式会社
 - 水準点測量・グリッド杭設置等 …………… 株式会社中島測量設計コンサルタント
 - 自然科学分析 …………… 株式会社古環境研究所
- 8 土層断面及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に拠る。
- 9 本書で使用した方位は、座標北（座標第Ⅱ系）及び磁北である。座標北を用いた場合には、G.N.、磁北はM.N.と表示している。レベルは海拔絶対高である。
- 10 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
 - S B………… 掘立柱建物跡 S C………… 土坑 S E………… 溝状遺構
 - S H………… ピット
- 11 本書の執筆及び編集は、杉田が担当した。
- 12 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2

第II章 調査の概要

第1節 調査の経過	5
第2節 層序	7

第III章 調査の記録

第1節 弥生時代の遺構と遺物	9
1 土坑（S C）	9
2 弥生時代の遺物	10
第2節 古墳時代から古代の遺物	13
1 土師器	13
2 須恵器	22
3 陶磁器	23
第3節 中世の遺構と遺物	34
1 掘立柱建物跡（S B）	34
2 中世の遺物	37
(1) 土師器	37
(2) 陶磁器	37
第4節 近世・近代の遺構と遺物	38
1 杭列遺構	38
2 近世の遺物	40
第5節 時期不明の遺構と遺物	41
1 溝状遺構（S E）	41
2 時期不明の遺物	42
(1) 土鍾・土製紡錘車	42
(2) 石器	42

第IV章 まとめ

第1節 遺構	46
1 掘立柱建物跡	46
2 杭列遺構	46
第2節 遺物	47
(1) 土師器	47
(2) 須恵器	47

挿 図 目 次

第1図	本宮遺跡と周辺の遺跡位置図	3
第2図	本宮遺跡周辺地形図	4
第3図	グリッド配置図及び遺構検出状況図	6
第4図	層序図	7
第5図	南壁土層断面図	7
第6図	西壁土層断面図	8
第7図	SC1実測図	9
第8図	SC1出土遺物実測図	10
第9図	弥生時代の遺物実測図①	10
第10図	弥生時代の遺物実測図②	11
第11図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図①	15
第12図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図②	16
第13図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図③	17
第14図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図④	18
第15図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図⑤	19
第16図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図⑥	20
第17図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図⑦	21
第18図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図⑧	24
第19図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図⑨	25
第20図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図⑩	26
第21図	出土遺物(古墳時代～古代)実測図⑪	27
第22図	出土陶磁器(古代)実測図	28
第23図	SB1実測図	35
第24図	SB2実測図	35
第25図	SB3実測図	36
第26図	SB4実測図	36
第27図	中世土師皿実測図	37
第28図	中世陶磁器実測図	37
第29図	1号杭列遺構実測図	39
第30図	2号杭列遺構実測図	39
第31図	3号杭列遺構実測図	39
第32図	木杭実測図	40
第33図	近世陶磁器実測図	40
第34図	SE1・SE2実測図	41
第35図	時期不明の遺物実測図①	42
第36図	時期不明の遺物実測図②	43
第37図	時期不明の遺物実測図③	44

表 目 次

第1表	SC1出土土器観察表	12
第2表	弥生土器観察表	12
第3表	出土土師器(古墳時代～古代)観察表①	28
第4表	出土土師器(古墳時代～古代)観察表②	29
第5表	出土土師器(古墳時代～古代)観察表③	30
第6表	出土土師器(古墳時代～古代)観察表④	31
第7表	出土須恵器(古墳時代～古代)観察表①	31
第8表	出土須恵器(古墳時代～古代)観察表②	32
第9表	出土須恵器(古墳時代～古代)観察表③	33
第10表	出土陶磁器(古代)観察表	33
第11表	掘立柱建物跡一覧表	34
第12表	出土土師器(中世)観察表	37
第13表	出土陶磁器・瓦器(中世)観察表	37
第14表	出土木杭(近世～近代)観察表	40
第15表	出土陶磁器(近世)観察表	40
第16表	出土土錘・紡錘車計測表	45
第17表	出土石器計測表	45

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭図版1	本宮遺跡近景(東から)
巻頭図版2	本宮遺跡遠景(西から)
	本宮遺跡全景と市木5号墳

図 版 目 次

図版1	調査前の本宮遺跡と市木5号墳、市木5号墳上の「宮跡」碑、遺物包含層、遺物出土状況	49
図版2	SC1遺物出土状況、SC1完掘状況、SB1、SB2、SB3、作業風景	50
図版3	1号杭列遺構検出状況、1号杭列遺構半截状況、2号杭列遺構半截状況、SE2と3号杭列遺構、3号杭列遺構半截状況、SE1と4号杭列遺構	51
図版4	出土遺物①	52
図版5	出土遺物②	53
図版6	出土遺物③	54
図版7	出土遺物④	55
図版8	出土遺物⑤	56
図版9	出土遺物⑥	57
図版10	出土遺物⑦	58
図版11	出土遺物⑧	59



本宮遺跡近景（東から）



本宮遺跡遠景（西から）



本宮遺跡全景と市木5号墳

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

宮崎県申間土木事務所工務課では平成13年度から市木川統合二級河川整備事業を進めている。同事業の対象地内には周知の遺跡が存在していた。また、事業地の隣接地には県指定史跡の市木5号墳が所在することから、周溝が遺存していれば事業地内にかかる可能性が考えられた。

そこで、宮崎県教育庁文化課では平成15年5月に現地踏査を行い、工事実施予定地に土器片が散布している状況や県指定古墳の立地状況について確認した。その後、平成15年7月に申間土木事務所内において、県指定古墳の取扱いと試掘調査について協議を実施した。また、確認調査は、平成15年8月25日から8月29日までの間に3日間行った。その結果、周溝の存在は確認できなかったものの新たな遺物包含層と柱穴と考えられる痕跡を確認したことから、平成15年9月9日に申間土木事務所と遺跡の取扱いについて協議を実施した。協議の結果、やむを得ず遺跡が影響を受ける事業対象地内の1,535㎡について発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査は、平成15年11月7日から平成16年1月21日にかけて、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。また、平成16年度には遺物整理と報告書作成を埋蔵文化財センターで行った。

第 2 節 調査の組織

発掘調査（平成15年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所	長	米	良	弘	康
副 所 長 兼 総 務 課 長		大	藺	和	博
副 所 長 兼 調 査 第 二 課 長		岩	永	哲	夫
総 務 課 主 幹 兼 総 務 係 長		石	川	恵	史
調 査 第 二 課 調 査 第 三 係 長		菅	付	和	樹
同 係 主 査		杉	田	康	之
同 係 調 査 員		古	屋	美	樹

整理及び報告書作成（平成16年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所	長	宮	園	淳	一
副 所 長 兼 総 務 課 長		大	藺	和	博
副 所 長 兼 調 査 第 二 課 長		岩	永	哲	夫
総 務 課 主 幹 兼 総 務 係 長		石	川	恵	史
調 査 第 二 課 調 査 第 三 係 長		菅	付	和	樹
同 係 主 査		杉	田	康	之

第3節 遺跡の位置と環境（第1図・第2図）

串間市は宮崎県の最南端部に位置している。北部には二つの山脈が走り、東は日向灘、南は志布志湾に臨んでいる。市内は南那珂山地と呼ばれる地質で海成層であるが、主に砂岩・頁岩及び互層から構成されている。この山地は北部にある鰐塚山から南部の都井岬に向かって漸次低下してきており、全体的に南に傾く様相を呈する。南那珂山地に源を発する大小の川は東流して太平洋にそそいでおり、その流域に平野が開ける。海岸部には良港も多く、中世以来外国貿易の拠点であった崎田港（現在本城漁港）などがある。本宮遺跡の所在する市木地区は串間市の東端に位置している。東は日向灘に面し、地先の海に幸島・鳥島及び築島が浮かぶ。本宮遺跡はこの市木平野中央を流れる市木川右岸に立地している。

本遺跡周辺の遺跡を時代を追って概観してみると、弥生時代では大字西方に8軒の竪穴住居跡とともに、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器が出土した唐人町遺跡がある。また、大字北方、標高約27mの小高い丘に所在している大田井遺跡は、壺、高坏、鉢が小範囲内から一括出土しており、出土状況や出土土器の組み合わせなどから祭祀遺跡の可能性が指摘されている。他に周知の遺跡として、迎田遺跡、浜田遺跡などが散布地として知られる。また、江戸時代には大字西方周辺の「王之山」から穀壁が出土しており、弥生時代に中国大陸と交渉をもつ程の勢力が存在した可能性がある。

古墳時代では、本地域で福島古墳群に次ぐ規模である市木古墳群がある。2基の円墳（1・2・3号墳は滅失古墳で、昭和59年に県史跡指定解除）と3基の箱式石棺が確認されているが、そのうち4号墳は本遺跡の北西約380m、市木小学校東側に遺存しており、市木5号墳は本遺跡の南に隣接している。また、市木藤浦古墳（市木箱式石棺群）は本遺跡の北東約1.4kmに位置し、1号箱式石棺内から頭椎太刀が出土している。さらに、桂松古墳、開田古墳、砂子田古墳、松原添遺跡、屋敷田遺跡、平田前遺跡、井手園遺跡などの所在が串間市遺跡詳細分布調査報告書などに記録してあるが詳細は不明である。

律令制の国郡制度のもとでは、当市域が宮崎郡であったことはほぼ間違いないが、何郷であったかは明らかでなく、当市域を中心に田辺郷がおかれたとする説と飢肥郷の一部とされたとする説がある。

中世では、大字西方に典型的な南九州タイプの中世城である櫛間城跡がある。1335年、野辺盛忠によって築かれた城は、江戸時代の初期まで櫛間地方の政治・軍事の中心であった。また、本遺跡の北西約700mの丘陵端部には中福良城跡がある。これは築城の経緯等一切不明であるが、室町時代に島津元久が「櫛間、市木城を攻めた」という記録があることから当城が「市木城」である可能性がある。他に周知の遺跡として前原第2遺跡、郡司部遺跡などが散布地として知られる。

近世の遺跡では、当遺跡の南西約300mに臨濟宗龍源寺跡がある。対明貿易のため島津氏は儒僧を選んで通詞とし朱子学薩南学派の祖といわれる桂庵玄樹らがこれを勤めたが、明治3年に廃寺となり、現在は跡地に市木中学校が建つ。

また、この他にも詳しい調査は行われてはいないが市木地区周辺では弥生時代から近世にかけての遺物が出土する散布地が数多く所在する。

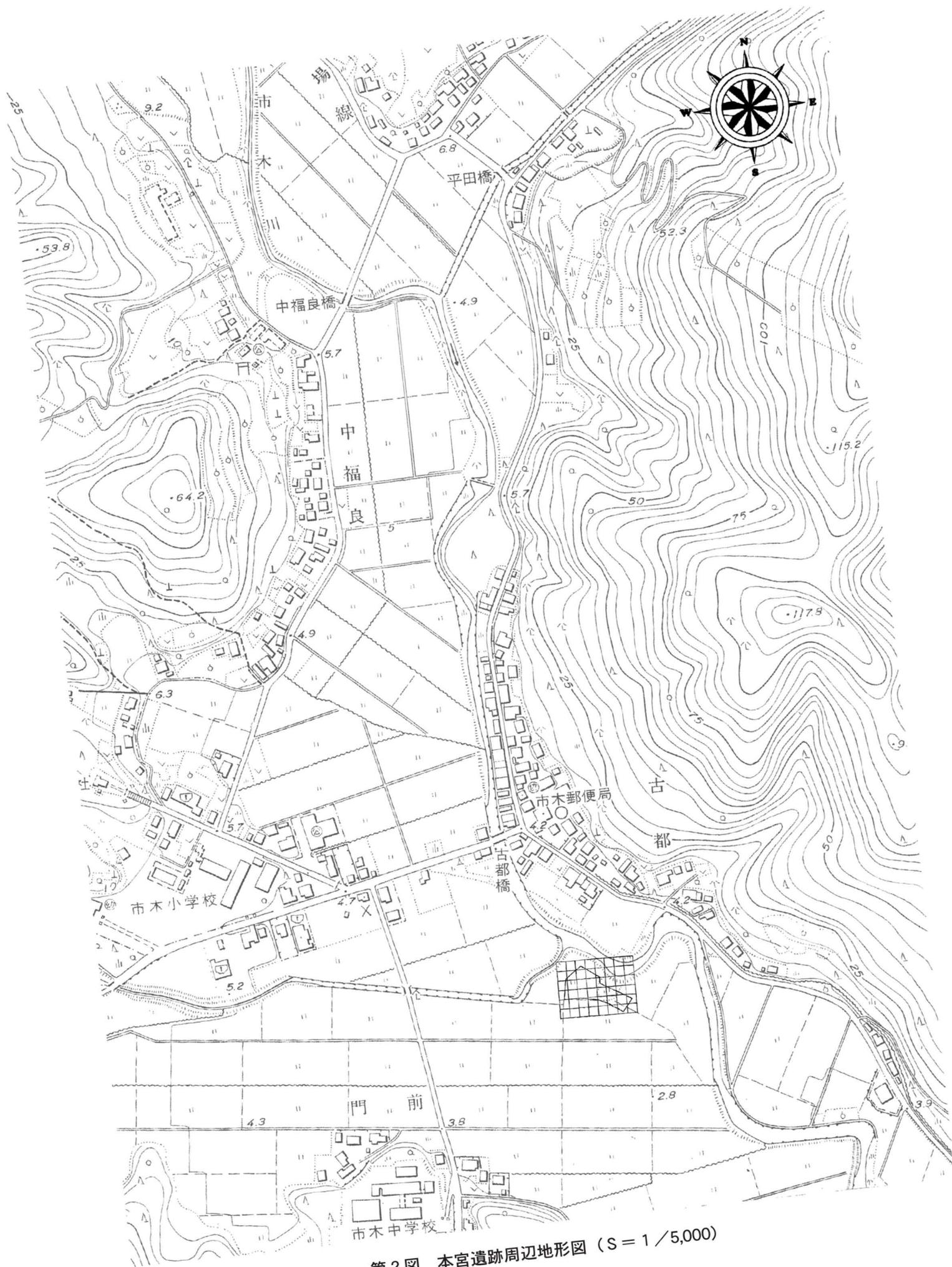
【参考文献】

- | | | |
|----------|------|-------------------------------|
| 宮崎県教育委員会 | 1960 | 『串間市市木箱式石棺調査報告』宮崎県文化財調査報告書第5輯 |
| 串間市役所 | 1974 | 『串間市郷土史』 |
| 角川書店 | 1986 | 『角川日本地名大辞典』 |
| 串間市教育委員会 | 1990 | 『串間市遺跡詳細分布調査報告書（I）』 |
| 宮崎県史刊行会 | 1993 | 『宮崎県史』資料編 考古2 |
| 宮田浩二・東憲章 | 1994 | 『宮崎県南部における中世城郭の一例』宮崎考古 第13号 |
| 串間市 | 1996 | 『串間市史』 |
| 宮崎県教育委員会 | 1999 | 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』詳説編 |



- | | | | | | |
|------------------|--------|--------|--------|--------|-------|
| ①本宮遺跡 | ②迎田遺跡 | ③浜田遺跡 | ④市木5号墳 | ⑤市木4号墳 | ⑥桂松古墳 |
| ⑦市木藤浦古墳(市木箱式石棺群) | ⑧開田古墳 | ⑨砂子田古墳 | ⑩松原添遺跡 | ⑪屋敷田遺跡 | |
| ⑫平田前遺跡 | ⑬井手園遺跡 | ⑭原第2遺跡 | ⑮郡司部遺跡 | ⑯中福良城跡 | ⑰龍源寺跡 |

第1図 本宮遺跡と周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



第2図 本宮遺跡周辺地形図 (S = 1 / 5,000)

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の経過

本宮遺跡は市木川下流域右岸、標高3～4mの市木平野低地に位置する。南側には市木5号墳（県指定史跡：昭和9年）が隣接しているが、現況において円墳の形状は変形しており原形は明らかではない。

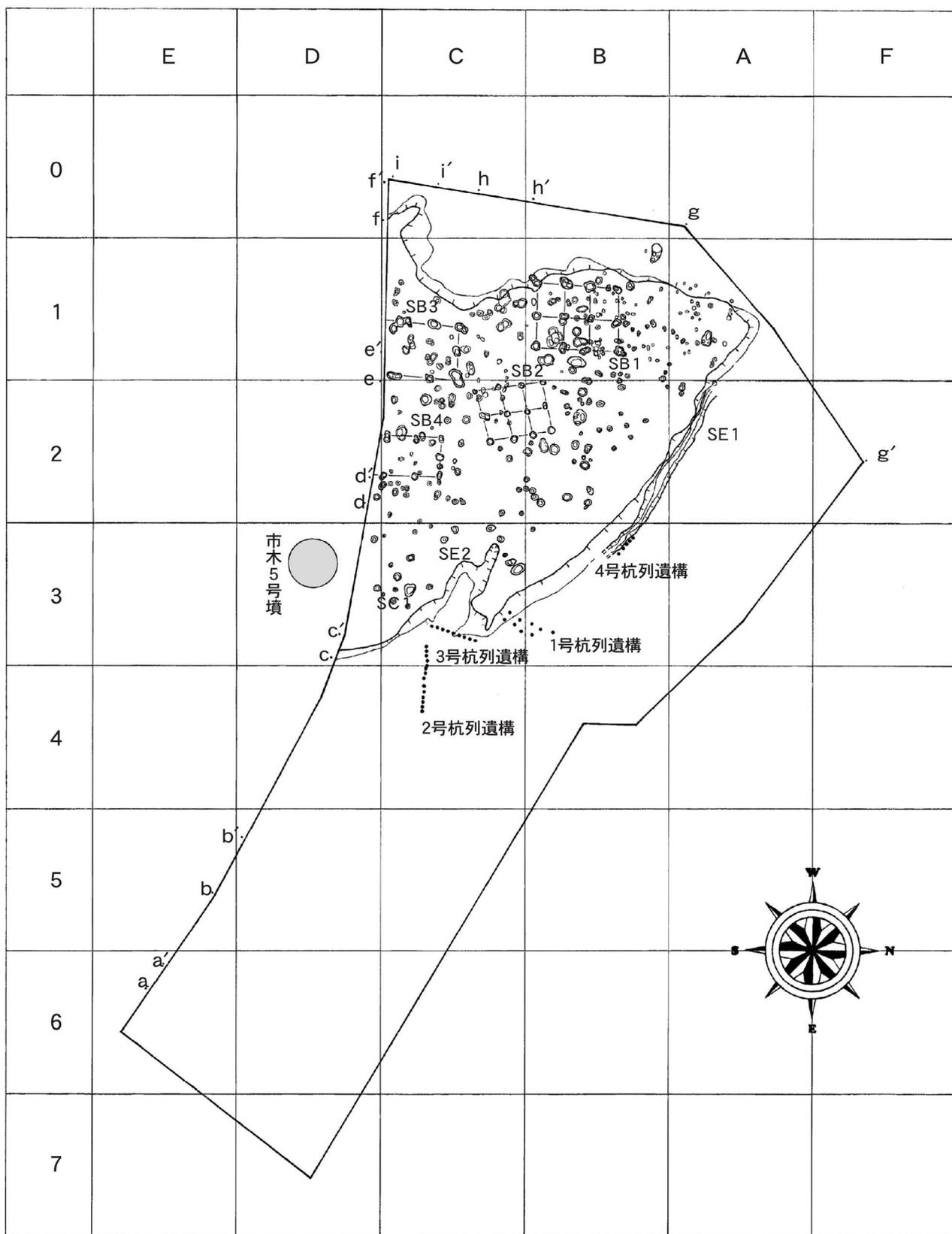
調査は、河川改修予定地で遺構・遺物の消失が懸念される地域を対象にして行った。調査対象面積は1,535㎡である。発掘調査は、まず重機で表土を剥ぎ、その後人力による掘り下げを行った。調査区は発掘調査前は水田であったが、全域にわたるような攪乱はみられなかった。表土の除去後トレンチを数か所設定して土層の確認を行った。その結果、遺物包含層は調査区西部南側付近に集中していること、中央部から北に向かって、土層は深く傾斜していくことを確認した。

調査区は付近一帯よりレベル的に低い地勢で水が溜まりやすく、粘土層上位に伏流する水が発掘によりしみ出すことから、まず調査区の周囲に排水溝を掘るとともに、集まった泥水を溜升で澄ませた後、市木川に逃がす排水施設を整えた。次に調査区西部南側に厚く堆積している遺物包含層（黒褐色土）には大量の遺物が含まれていたことから、小グリッド（2.5m×2.5m）ごとに遺物の取り上げを行った。

遺物包含層の精査後、黄褐色土層が現れたが、その面を精査した結果、300基程のピットが検出され、4棟の掘立柱建物跡（総柱建物2棟を含む）が確認された。また、調査区中央部南端では1号土坑を検出し、床面で底部が入れ子状になった土師質土器が出土した。遺物包含層が深く傾斜する際には溝状遺構が2条検出された。また、調査区内には木杭が点在し、杭列として並ぶものが調査区中央部付近に5列検出された。このうち、1号杭列遺構は2列構造である。これらの遺構は、1～2号溝状遺構及び旧河川跡ないしはより大きな溝状遺構に付設された遺構と考えられる。このうち、1～3号杭列遺構に使用された杭は同じ種類の樹木を用い、先端等の加工の状況も同じである。しかし、それぞれの杭列遺構付近から出土した遺物は流れ込みの様相を呈しており、遺構の構築時期を特定することが困難であった。そこで、加工方法や樹種の異なる2種類の杭列遺構から採取した生木資料をもとに、放射性炭素¹⁴C年代測定（AMS法）と樹種同定を行った。その結果、1～3号杭列遺構は杉材を用いた近世から近代の遺構であること、4号杭列遺構は櫟^{しきみ}を材とした近世の遺構であることが判明した。また、隣接する市木5号墳に伴う周溝等は今回の調査では検出できなかった。

その後、調査は土層堆積状況観察のトレンチで遺構面の下層まで遺構・遺物の有無についての確認調査を行ったが無遺物層であることが判明したため、それ以上の深掘りは避け、平成16年1月21日に調査を終了した。遺物は土器を中心として須恵器、石器が大量に出土し、コンテナ196箱に達した。このうち土器は弥生時代から古代にかけてのものが最も多く出土した。須恵器は、古墳時代の終末から古代にかけてのものが多く出土した。陶磁器類は、中世から近世にかけてのものがコンテナ1箱程出土した。

現地では記録作成のため、国土座標（XY座標）に乗じた10m単位のグリッドを設定（第3図）し、南北方向に北からF、A、B、C、D、E、東西方向に西から0～7の記号を付けた。



第3図 グリッド配置図及び遺構検出状況図 (S = 1 / 400)

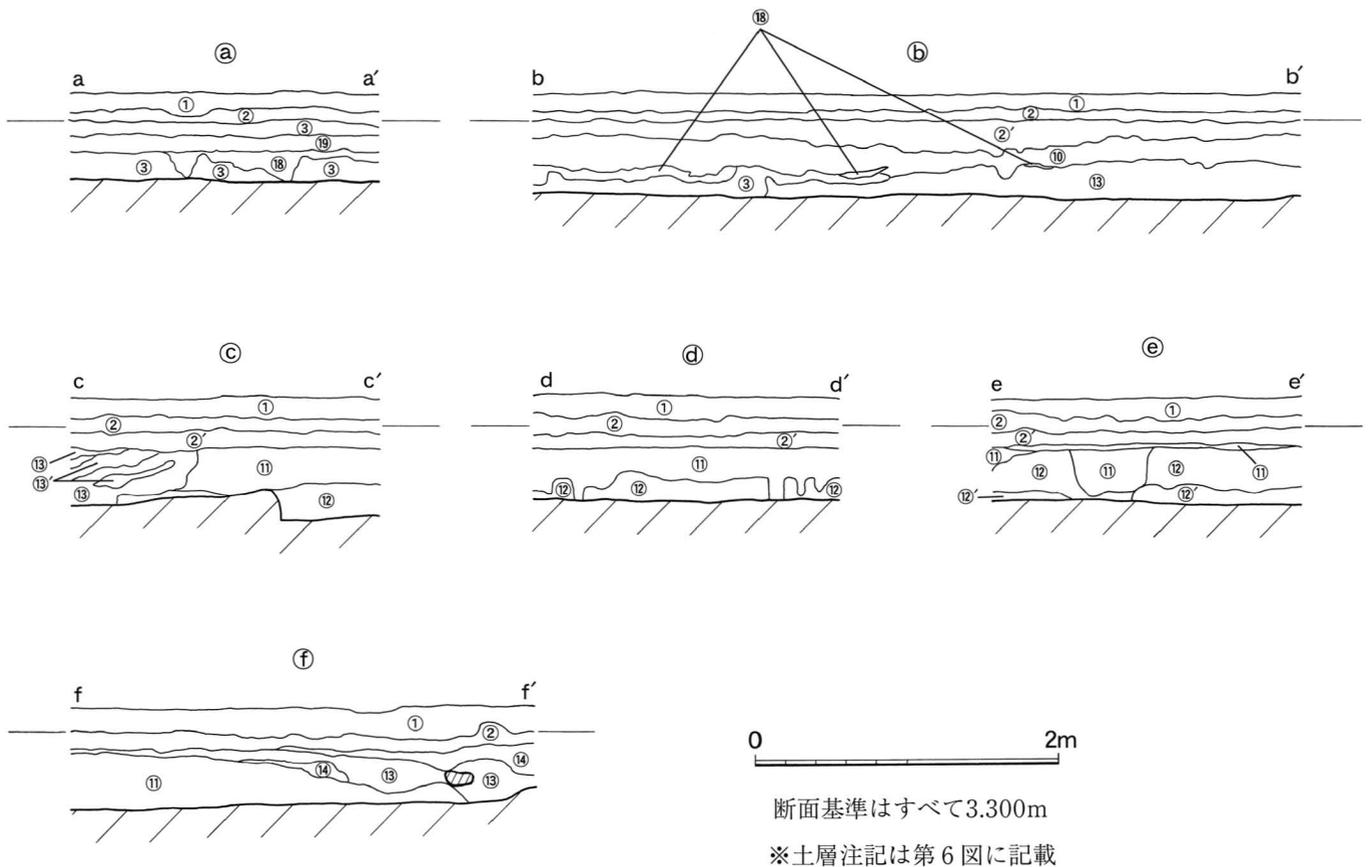
第2節 層序

本宮遺跡の基本層序を第4図に示した。調査前地形は水田であったためほぼ水平であるが、市木川によって形成された扇状地であり、西から東へ緩やかに傾斜した地形である。旧地形は調査区中央部付近から北に向けて深く傾斜していく。指標テフラの堆積は確認できなかった。また、遺跡が市木川のほとりに位置しているため、河川の氾濫による浸食をたびたび受けた様子が確認できた。

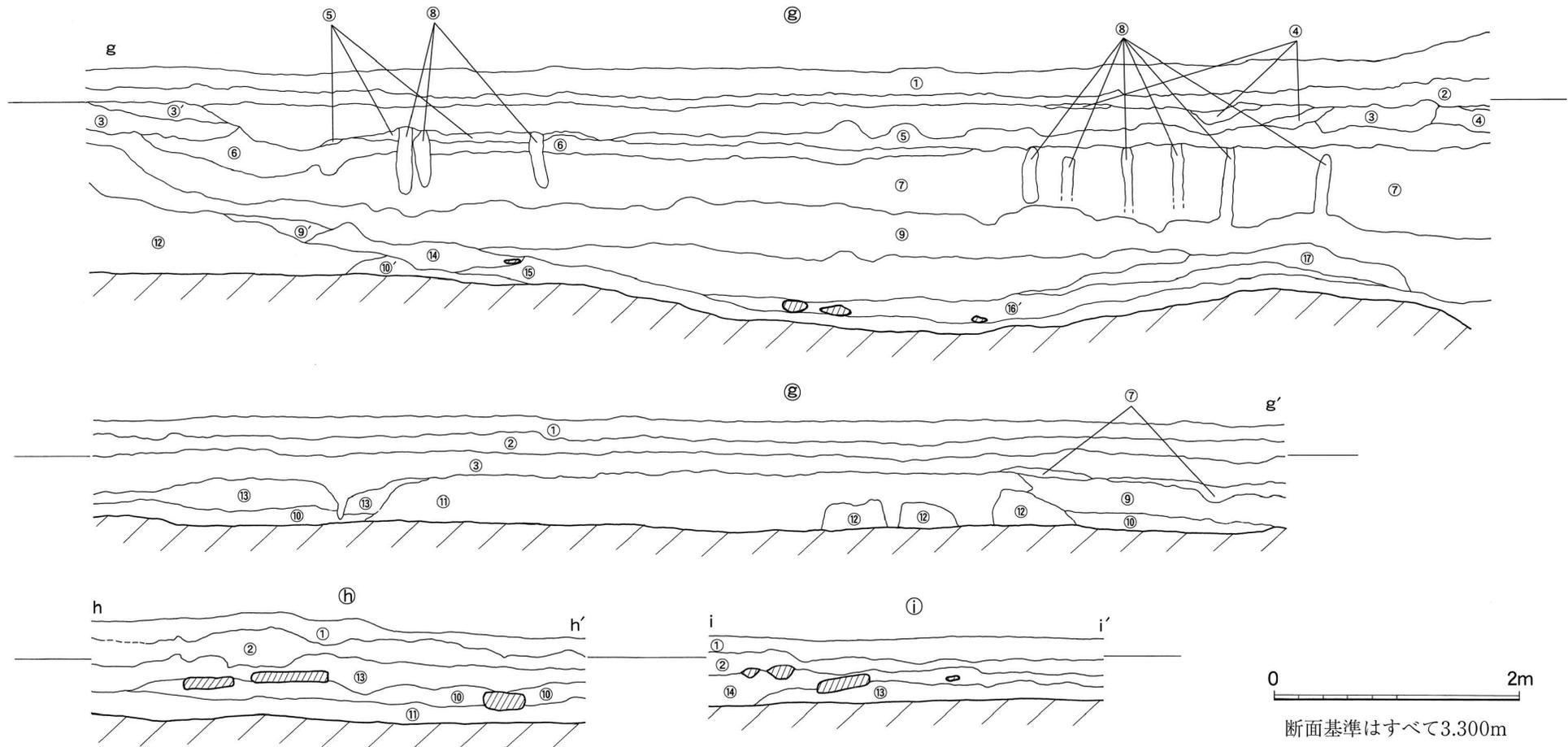
第I層の表土は現水田耕作土で、堆積層の厚さは約15～40cmである。第II層の灰黄褐色土は、10cm前後の堆積を認めることができたが、調査区東部において第II層と第III層は互層をなしており、幾度も水田が造り替えられていることを確認できた。遺物包含層は第VII層で調査区西部南側に厚く堆積しており、最大厚は48cm程度である。弥生時代から古代にかけての遺物を中心に大量に出土した。遺構検出面は第VIII層で調査区西部で確認されたが、北に向かうにつれ深く傾斜していき、オリーブ灰色を呈するようになる。おそらく空気との接触を遮断されていた結果だと推察され旧河川底であったものと考えられる。

第I層	表土
第II層	灰黄褐色土
第III層	暗灰黄色土
第IV層	黄灰色土
第V層	灰色土
第VI層	暗灰黄色土
第VII層	黒褐色土
第VIII層	黄褐色土
第IX層	灰黄色土

第4図 層序図



第5図 南壁土層断面図 (S = 1/50)



【南・西側壁土層注記】

①暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)表土。粘土層でかたくしまりがある。< I層>②灰黄褐色土(Hue10YR4/2)①と似ているが色調がやや暗い。粘土層でしまりがあり乾燥するとぼろぼろになる。水田の床土と思われる明赤褐色の鉄分を多く含む。< II層>②'灰黄色土(Hue2.5Y6/2)φ1mm程度の軽石を全体に多く含む層。水田の床土か。③灰黄褐色土(Hue10YR4/2)粘土と砂の混合土。φ3~10cm程度の角礫を多く含む層。土器などの遺物も混じる。③'灰黄褐色土(Hue10YR4/2)③と同じだが礫を含まない。④黄褐色土(Hue2.5Y5/6)暗灰黄色の粘土ブロックを含む砂の層。かたくしまりがある。⑤暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)粘土層でかたくしまりがある。暗褐色の粒を多く含む。< III層>⑥暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)⑤と同じだが黄褐色の粒を多く含む。⑦黄灰色土(Hue2.5Y5/1)粘土層。かたくしまりがある。暗褐色のにじみがみられ黒褐色の粒を多く含む。< IV層>⑧灰オリーブ土(Hue5Y5/2)中央部に木杭片が残っているものもある。粘りの強い粘土。⑨灰色土(Hue5Y4/1)暗褐色と黄褐色のにじみが多くみられる粘土層。φ1~2mmの白色軽石を微量に含む。細く摩耗した土器片も混入している。< V層>⑨'灰色土(Hue5Y5/1)⑨と同じだが色調がやや明るい。炭化物を微量含む粘土層。⑩暗灰黄色土(Hue2.5Y4/2)黒褐色と褐色のにじみが非常に多く混じる粘土層。< VI層>⑩'黒褐色土(Hue2.5Y3/2)⑩と③の混合土⑩'黄褐色土(Hue2.5Y5/4)遺構検出面。灰色の粘土や暗褐色の粒が全体に混じる。堆積は一樣ではなく凹凸がある。< VII層>⑪'黒褐色土(Hue2.5Y3/2)⑪と③の混合土⑩'黄褐色土(Hue2.5Y5/4)⑩と③の混合土。粘性の強い粘土層。⑬黄灰色土(Hue2.5Y4/1)遺物包含層の二次堆積と思われる層。暗褐色のにじみが全体に広がる。遺物量は⑪に比べ少量である。⑭灰色土層(Hue5Y5/1)オリーブ灰色、黄褐色ブロックを含む粘土層。遺物も少量含む。⑮オリーブ灰色土層(Hue10Y4/2)⑭と同じ層。まだ酸化されておらずオリーブ灰色を呈する。⑯オリーブ黒色土(Hue7.5Y3/1)暗褐色のにじみを少量含む粘土層。炭化物も少量含む。⑯'オリーブ黒色土層(Hue7.5Y2/2)⑯と同じだが、色調がやや暗い。φ20cm程度の角礫を含む。⑰オリーブ黒色土(Hue5Y3/1)⑯と似ているが、オリーブ灰色の粘土ブロックと砂が混じる粘土層。⑱灰黄色土(Hue2.5Y7/2)青灰色の粘土と灰黄色の砂が互層となる層。⑲灰黄色土(Hue2.5Y7/2)砂層< Ⅷ層>

第6図 西壁土層断面図 (S = 1/50)

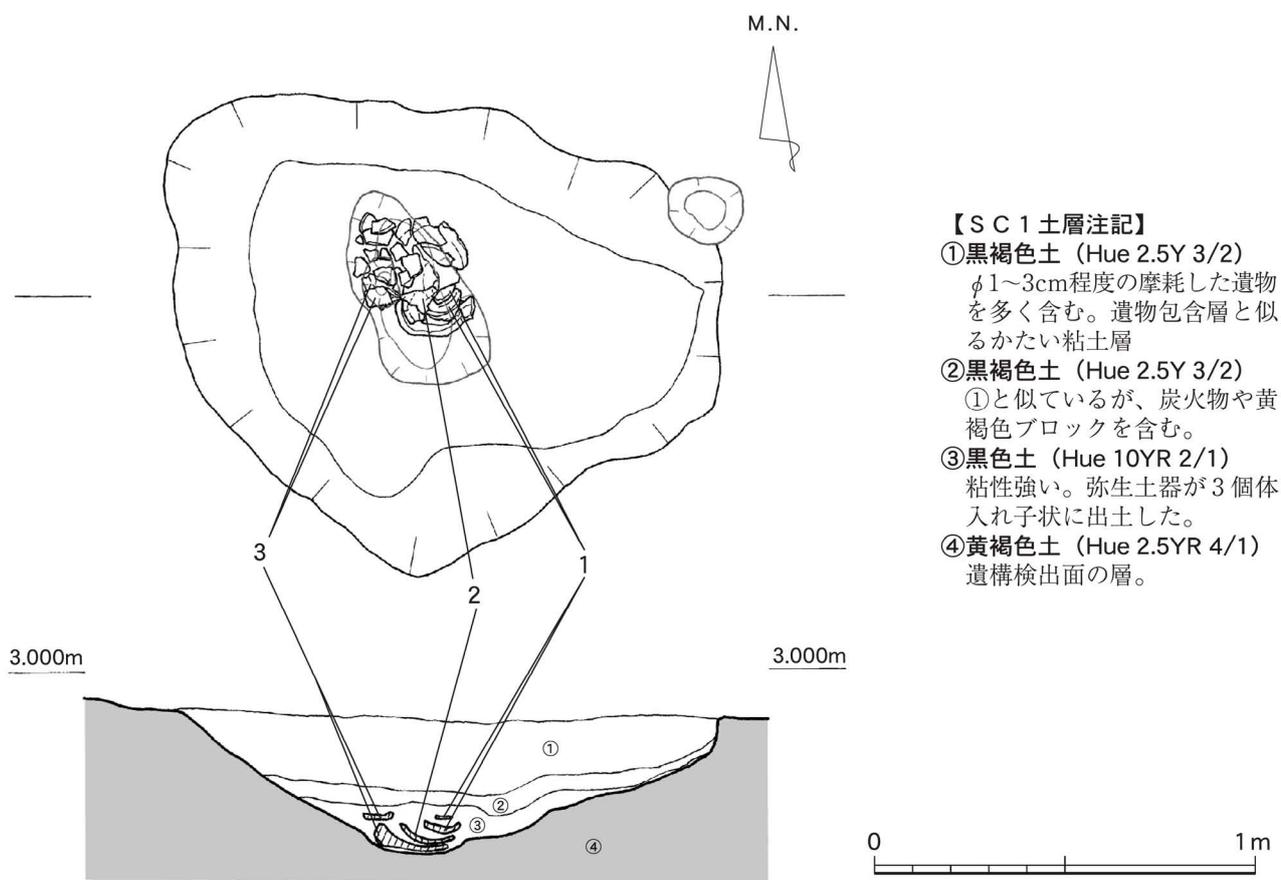
第三章 調査の記録

第1節 弥生時代の遺構と遺物

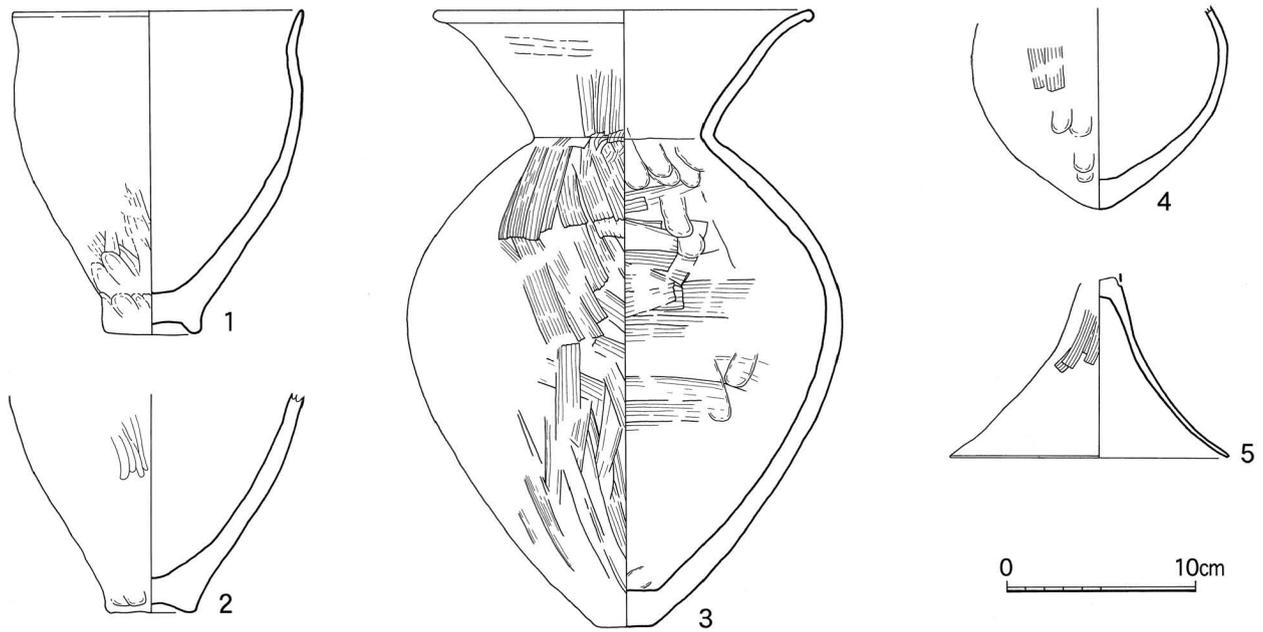
1 土坑（SC）

SC 1（第7図）

C3グリッドで検出された。土坑周辺に弥生時代に構築された遺構はない。規模は長径158cm、短径124cm、検出面からの深さ35cmを測る。平面プランは検出面で不整楕円をとりながら下部に向かって径を細めていき、検出面から約29cmの深さでもう一段緩やかな乳頭状に窪まる。この掘込みの規模は長径54cm、短径28cm、深さ6cmであり、この掘込みの中から弥生土器の甕（1、2）と壺（3）の底部が3個体、入れ子状に出土した。埋土は3層でレンズ状堆積をなす。遺物（第8図）1、2は甕である。1は緩やかに「く」字状に曲がる口縁部をもち、底部端部は張り出した上げ底である。2は口縁部が失われているが1と似た胴部形態を呈すると思われる。底部端部は張り出さず外面はミガキ調整である。3、4は壺である。3は頸部で明確に「く」字状に屈曲し、底部は径の小さい平底である。堅緻な焼きでたたくと金属音がする。4は球形胴をもち尖底で外面調整に一部ハケ目が残る。5は高坏である。裾部はやや外反しながら開く。風化が著しいが、外面に一部ハケ目が残る。



第7図 SC 1実測図 (S = 1/20)

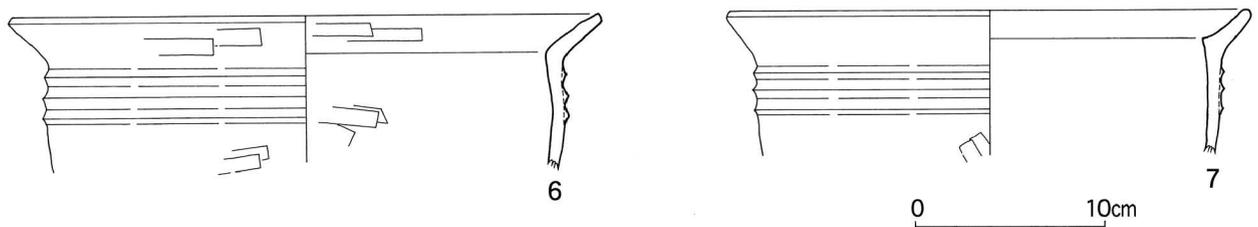


第8図 SC 1 出土遺物実測図 (S = 1 / 4)

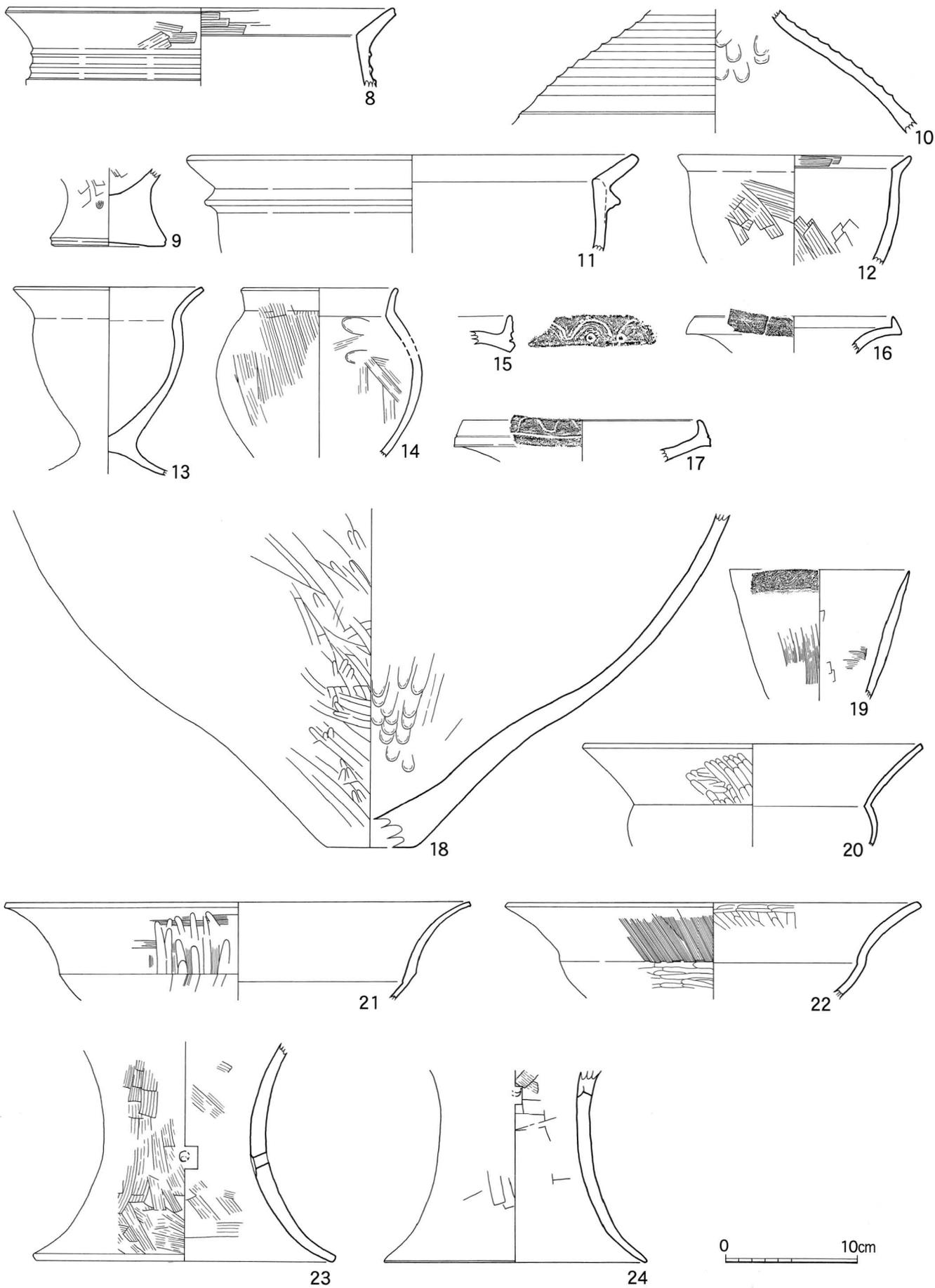
2 弥生時代の遺物 (第9図～第10図)

SC 1 から出土した遺物以外に、包含層等から出土した土器の中でその特徴から、弥生時代の所産と判断したものについてここで取り扱う。しかし、土器編年上どこまでが弥生時代か認定するのは困難であるため、一部古墳時代初頭の資料が混在している可能性がある。また、遺物の出土量は類型化する程多くないので個体ごとにその概要を述べる。なお、土器の詳細については観察表を参照されたい。

土器は完形まで復元できたものはなく、口縁部や底部のみの遺物がほとんどであった。6～9、11～14は甕である。6～10は中期中葉に位置するいわゆる山ノ口系の土器である。6～8はいずれも口頸部が「く」字状に外反し、頸部下に2条～3条の断面三角貼付突帯をもつ。9は平底の甕底部であろう。11は口縁部が「く」字状に外反し、頸部くびれ部内面に明瞭な稜と頸部外面に貼付突帯をもつ。12は最大径を口縁部にもち、頸部くびれ部から内湾気味の口縁部が外側に開く。13は胴部上位でS字状に屈曲し脚台をもつ。14は頸部くびれ部からやや外反気味の口縁部が立ち上がり球形胴部をもつ。10、15～18は壺である。10は壺胴部上半で頸部付近から12条以上の突帯をもつ。15～17は二重口縁壺の口縁部である。15、16は櫛描波状文が施されるが15は竹管状工具による押圧文が観察できる。17は沈線によるくずれた波状文である。18は平底で胴部に向けて大きく開きながら立ち上がる。工具ナデの後ミガキ調整である。19、20は鉢である。19は口縁部に櫛描波状文が施され、20は頸部で屈曲し大きく外反する。21、22は高坏の坏部である。坏底部と口縁部との間で一度明確に屈曲し、口縁部は外反しながら立ち上がる。23、24は器台である。裾部の方が受部より広い寸胴で透かしをもつ。いずれも四方透かしか。



第9図 弥生時代の遺物実測図① (S = 1 / 4)



第10図 弥生時代の遺物実測図② (S = 1 / 4)

第1表 SC1出土土器観察表

遺物番号	種別	器種部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1	弥生土器	甕 口縁部～底部	SC1	(15.0)	4.7	17.1	風化気味だが一部ナデ指頭痕	風化著しいが一部ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	3mm以下の灰色粒 3mm以下の透明光沢粒	外面に黒変
2	弥生土器	甕 胴部～底部	SC1	-	4.6	-	ミガキ ナデの後指頭痕	風化著しいが一部ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (7.5YR7/8)	良好	4mm以下の茶褐色粒 3mm以下の白色光沢粒	外面に黒変
3	弥生土器	壺 口縁部～底部	SC1	(19.7)	3.1	32.8	ナデ 横方向の工具ナデ 縦・斜方向のハケ目	横方向のナデ 指頭痕 横・斜方向のハケ目	橙 (7.5YR6/8)	褐灰 (10YR5/1)	良好	1.1mm～6.5mm大の灰褐色粒	
4	弥生土器	甕 胴部～底部	SC1	-	-	-	風化気味だが一部ハケ目	風化気味だがナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	4.5mm以下の灰黄褐・褐灰色粒	外面に黒変
5	弥生土器	高坏 裾部	SC1	-	(15.2)	-	風化著しいが一部ハケ目	風化著しいが一部ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	明褐灰 (7.5YR7/2)	良好	4mm以下の茶褐色粒 3mm以下の灰色光沢粒	

第2表 弥生土器観察表

遺物番号	種別	器種部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
6	弥生土器	甕 口縁部～胴部	B1①	(31.2)	-	-	ヨコナデ 工具ナデ 三角貼付突帯(3条)	横方向の工具ナデ	褐 (7.5YR4/4)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	1mm以下の赤褐色粒 1mm以下の黒褐色粒	山ノ口式
7	弥生土器	甕 口縁部～胴部	SH256	(27.4)	-	-	ヨコナデ 三角貼付突帯(3条) 風化気味だが工具ナデ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	黒褐 (7.5YR3/2)	良好	2mm以下の白色・赤褐色粒 2mm以下の黒色光沢粒	山ノ口式
8	弥生土器	甕 口縁部～頸部	SH256	(29.1)	-	-	ヨコナデ 横方向のハケ目 横方向のナデ 三角貼付突帯	横方向のナデ 横方向のハケ目	褐灰 (5YR4/1)	にぶい橙 (5YR7/3)	良好	1mm以下の透明光沢粒	山ノ口式
9	弥生土器	甕 底部	SH256	-	8.5	-	工具痕 ナデ 指頭痕 沈線 ヨコナデ	工具痕 ナデ	橙 (5YR6/6)	灰褐 (7.5YR6/2)	良好	1mm以下の乳白色粒 1mm以下の透明光沢粒	山ノ口式
10	弥生土器	壺 頸部付近～胴部	SH258	-	-	-	突帯(12条以上) ヨコナデ	指頭痕 ナデ	褐灰 (7.5YR4/1)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	2mm以下の褐灰色粒 3mm以下の金色光沢粒	山ノ口式
11	弥生土器	甕 口縁部～胴部	B1①	(33.4)	-	-	ヨコナデ 横方向のナデ 丁寧なナデ 三角貼付突帯	横方向のナデ 丁寧なナデ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	1mm以下の金色光沢粒	
12	弥生土器	甕 口縁部～胴部	B1①	(17.2)	-	-	ヨコナデ 横方向のハケ目 斜方向のハケ目	ハケ目 横方向のナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1mm以下の透明光沢粒 1mm以下の黒色光沢粒	外面に黒変
13	弥生土器	甕(異形) 口縁部～底部	SH248-1~8	(14.1)	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	2mm以下の灰褐色粒	
14	弥生土器	甕(異形) 口縁部～胴部	I	(11.6)	-	-	横方向のナデ やや斜方向のハケ目	横方向のナデ 指頭痕 斜・縦方向のハケ目	灰白 (7.5YR8/1)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	3mm以下の浅橙・褐色粒	
15	弥生土器	甕 二重口縁部	表土	-	-	-	櫛描波状文 竹管文 ヨコナデ ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	5mm以下の茶・赤褐・灰色粒	
16	弥生土器	壺 二重口縁部	SH350	(8.0)	-	-	櫛描波状文 丁寧なナデ ナデ	丁寧なナデ	橙 (2.5YR7/8)	橙 (2.5YR7/6)	良好	5mm以下の灰色粒 3mm以下の橙色粒	
17	弥生土器	壺 二重口縁部	SH348	(9.0)	-	-	櫛描波状文 沈線 ヨコナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm～3mmの橙・灰色粒 1mm以下の透明光沢粒	
18	弥生土器	壺 胴部～底部	B2③	-	(6.6)	-	工具ナデの後ミガキ	ナデ 指頭痕	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	3mm以下の褐・褐灰色粒	外面に黒変
19	弥生土器	鉢 口縁部～胴部	SH323	(13.5)	-	-	櫛描波状文 横方向のナデ ハケ目	風化気味だがハケ目	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	3mm以下の茶褐・灰色粒	
20	弥生土器	鉢 口縁部～頸部	SH248-1・7	(25.3)	-	-	風化気味だがミガキ	ナデ	橙 (2.5YR6/8)	淡赤橙 (2.5YR7/4)	良好	2mm以下の暗赤褐・透明・乳白色粒 1mm以下の黒色光沢粒	
21	弥生土器	高坏 口縁部～体部	C3②	(35.1)	-	-	口唇部面取り 縦方向のハケ目 の後縦方向の雑なミガキ	丁寧なナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	4mm以下の茶褐色粒	
22	弥生土器	高坏 坏部	B2②	(30.8)	-	-	ヨコナデ 口唇部面取り 斜方向のハケ目 横方向のミガキ	横・斜方向のミガキ	橙 (5YR7/6)	橙 (2.5YR7/8)	良好	3mm以下の赤褐・褐・黒色粒	
23	弥生土器	器台 柱部～裾部	C2	-	(22.8)	-	縦方向のハケ目 ヨコナデ	斜方向のハケ目 ナデ 横方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	3mm以下の茶赤色粒 1mm以下の灰白・褐色粒	四方透かし
24	弥生土器	器台 柱部～裾部	C2③	-	(20.0)	-	ナデ 工具痕 ヨコナデ	斜方向のハケ目 工具痕 ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	淡赤橙 (10YR8/1)	良好	1mm以下の褐・赤茶色粒	四方透かし

第2節 古墳時代から古代の遺物

本遺跡では、古墳時代から古代にかけての遺構は検出できなかったが、第Ⅶ層黒褐色土層からこの時期の特徴をもつ大量の遺物が出土した。遺物の内容は土師器、須恵器、陶磁器等である。この第Ⅶ層は、古墳時代と古代を分ける明確な層序を確認できず、古墳時代終末から古代初頭にかけての遺物も数多く確認されたことから一括してこの節で取り扱う。須恵器の型式を比定するにあたっては、陶邑窯跡群の田辺昭三氏と隼上がり窯跡資料を用いた増田一裕氏の編年案を用いた。遺物の詳細については別表（第3表～第10表）にまとめた。

1 土師器

甕（第11図～第14図）

甕は完形まで復元できたものではなく、口縁部から胴部上半までのものや底部付近のものがほとんどであった。形態及び調整技法によって大きく以下のように分類される。

甕Ⅰ類 口縁部がゆるやかなS字状を呈し、胴部がふくらみをもつもの

A 貼付突帯をもたないもの（25～27）

B 貼付突帯をもつもの（28～31）

甕Ⅱ類 胴部から口縁部にかけて内湾し、最大径を口縁部もしくは胴上部にもち貼付突帯をもつもの（32～43）

甕Ⅲ類 胴部から口縁部にかけて内湾し、最大径が胴部にあるもの

A 貼付突帯をもつもの（44～55）

B 貼付突帯をもたないもの（56）

蓋部（第13図）

57、58は傘形を呈する甕用の蓋と思われる。天井部内面の調整が比較的粗雑なことや四方透かしが施されていることから蓋として取り扱う。天井部外面端部は指押さえによりわずかに張り出す。

底部（第13図～第14図）

A 上げ底で木の葉痕がナデ消されているもの（59～64）

B 上げ底気味で木の葉底のもの（65～68）

C 平底で木の葉痕がナデ消されているもの（69～75）

D 平底で木の葉底のもの（76～79）

67は工具を用いて植物の葉脈に似せた調整を施した可能性があるが、ここでは木の葉底として取り扱う。80は平底で木の葉底がナデ消されている。底部の器形から壺の底である可能性がある。

甗（第14図）

81～86はいずれも単孔の甗である。81は最大径を口縁部にもち、口縁部下位に突帯が回る。82、83は単孔を形成する底部が厚くなる。84、85は底部から直線的に胴部が外傾し、底部の単孔周りを平たく調整している。86は焼成前に底部に穿孔が施されていることからここでは甗として取り扱う。

壺 (第14図)

87は大型の二重口縁壺である。口縁部付近はさらに発達して外湾する。88、89は口縁部と頸部の境に屈曲点をもつ。88は口縁部はわずかに外反しながら直立気味に立ち上がり、89は直立気味に立ち上がる。89～91は頸部に連続刺突文が施される。92、93は頸部に貼付突帯がめぐる。92は薄い突帯上に二重の刺突文、93は二重の竹管文が施される。94、95はゆるやかなS字状に曲がる口縁部形態をもつ短頸壺である。96は扁球胴からやや外反しながら立ち上がる頸部をもつ長頸壺で、弥生土器である可能性がある。97は木の葉痕の残る平底をもつ比較的大型の長胴壺である。98は平底で底部の内部中央がわずかに厚くなる。内外面ともナデ調整である。

鉢 (第15図)

99は小型の平底をもつ深めの鉢である。内外面とも工具ナデの後ミガキが施される。100～102は浅めの鉢である。100は口縁部にゆるやかな稜をもち内面に指頭痕が残る。101はゆるやかなS字状を呈する頸部をもち、外面口縁部に縦方向の沈線が2条確認できる。102は体部上位に貼付突帯が施される。103は平底の鉢で頸部に三角形の貼付突帯が施される。104～107はコップ状の鉢で104は上げ底気味、105は上げ底、106、107は平底である。108、109は口縁が内湾し108は外面にミガキ、109は内面に工具ナデ調整がみられる。古墳時代終末から古代初頭のものか。110は脚台付鉢か。

碗 (第15図)

碗Ⅰ類 口縁部に稜をもち外湾する立ち上がりをもつもの (111、112)

碗Ⅱ類 口縁部に稜をもち体部から口縁部にかけて内湾するもの

A 底部と体部の境がわりあい明瞭なもの (113～116)

B 底部と体部の境が不明瞭なもの (117～122)

碗Ⅲ類 最大径を体部にもち、口径に比べて器高が高いもの (123、124)

高坏 (第16図)

坏部と脚部の形態から以下のように分類する。四方透かしをもつものは133～138と145、146である。

坏部Ⅰ類 口縁部と受け部の境に稜をもち、外反しながら立ち上がるもの (125)

坏部Ⅱ類 口縁部と受け部の境が不明瞭で、受け部が内湾するもの (126、127)

坏部Ⅲ類 受け部はやや内湾するが、口縁部は直線的に立ち上がり浅い碗状を呈するもの (128)

脚部Ⅰ類 比較的器高が高く、やや外反しながら裾部が開くもの (126、129～138)

脚部Ⅱ類 器高が高く裾部が内湾するもの (139、140)

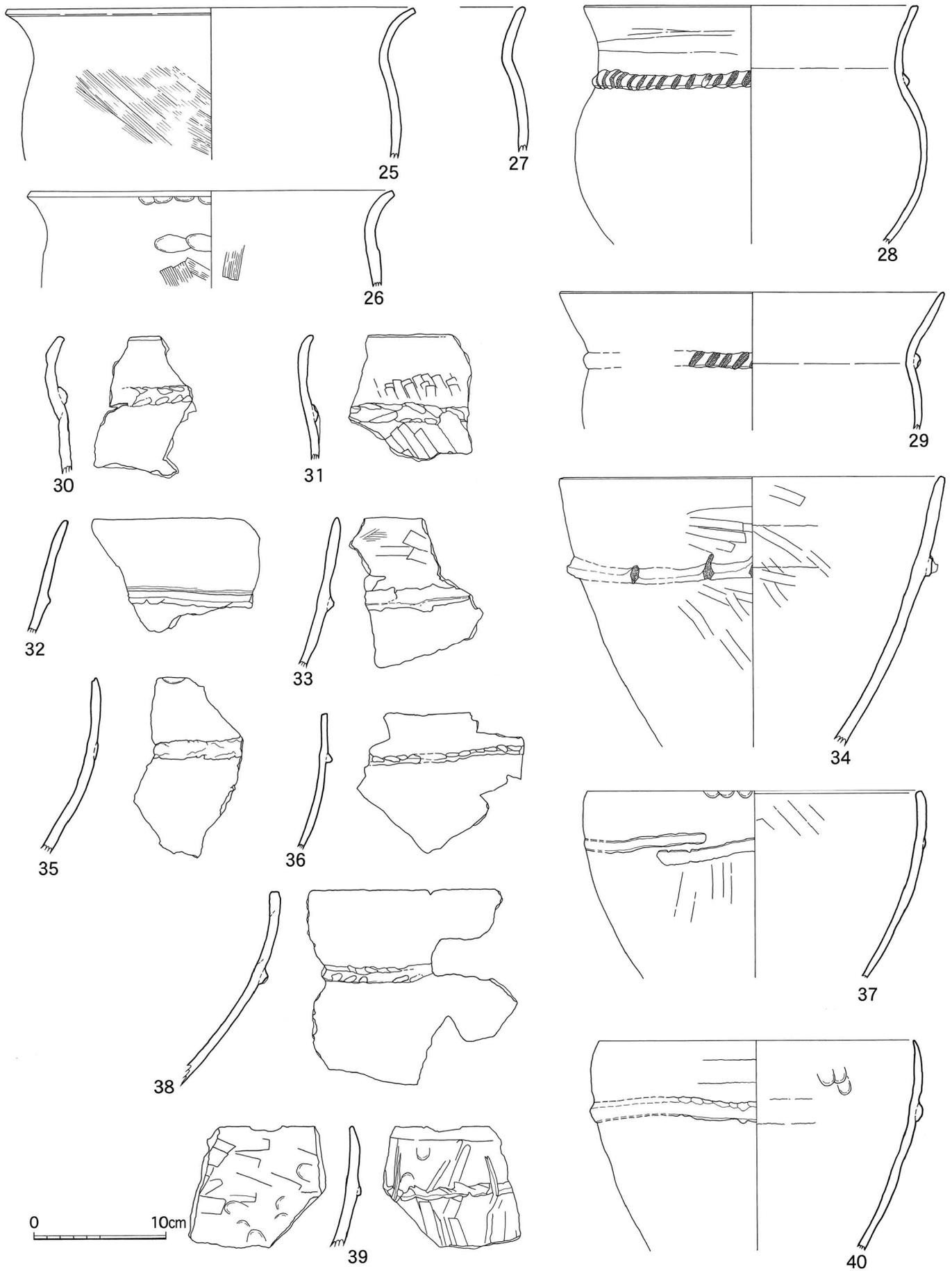
脚部Ⅲ類 器高が低く脚部が大きく開くもの (125、127、141～143)

脚部Ⅳ類 脚柱部がエンタシス状になるもの (144、145)

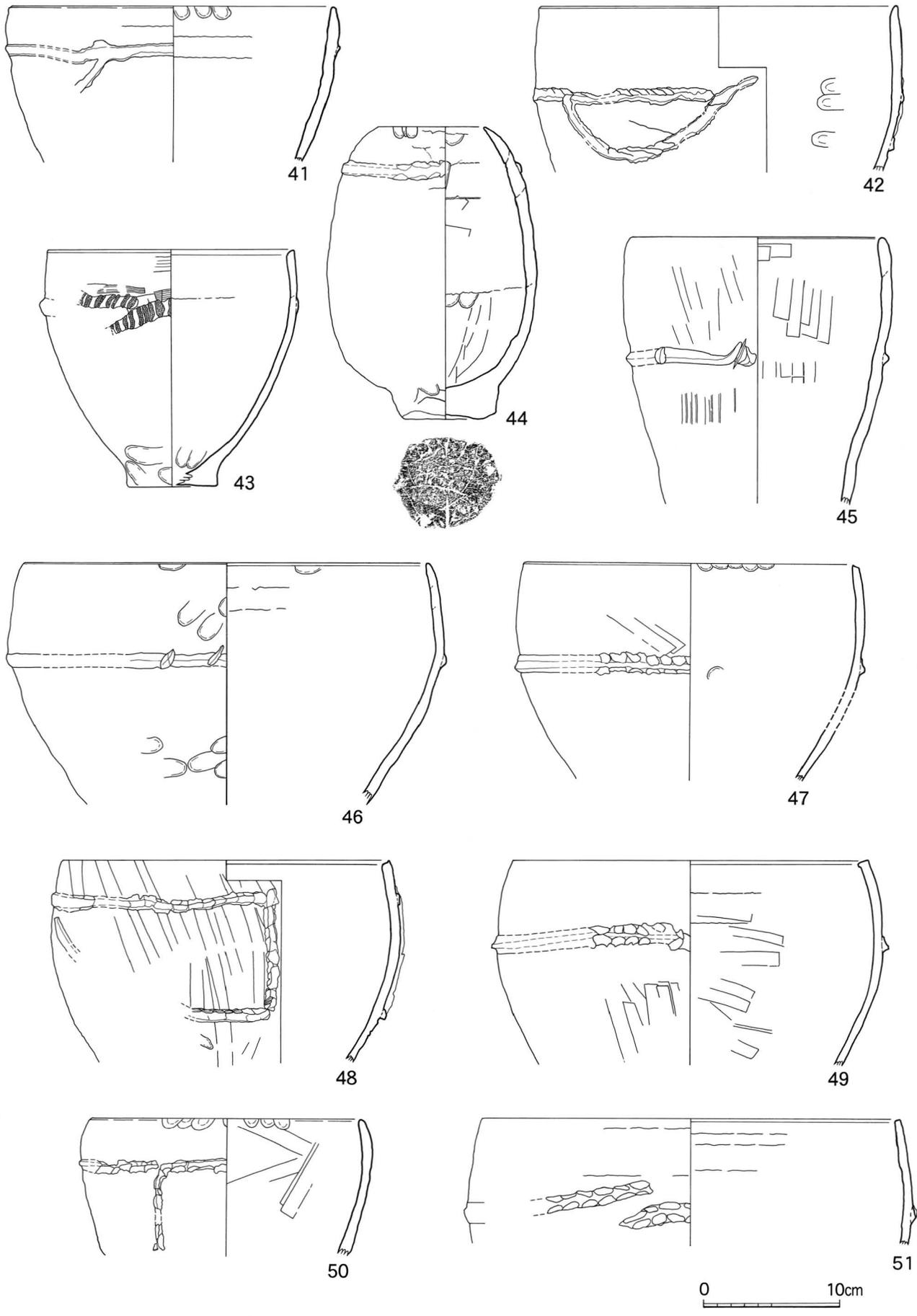
脚部Ⅴ類 脚部が直線的に伸び裾部が開くもの (146、147)

ミニチュア土器 (第16図)

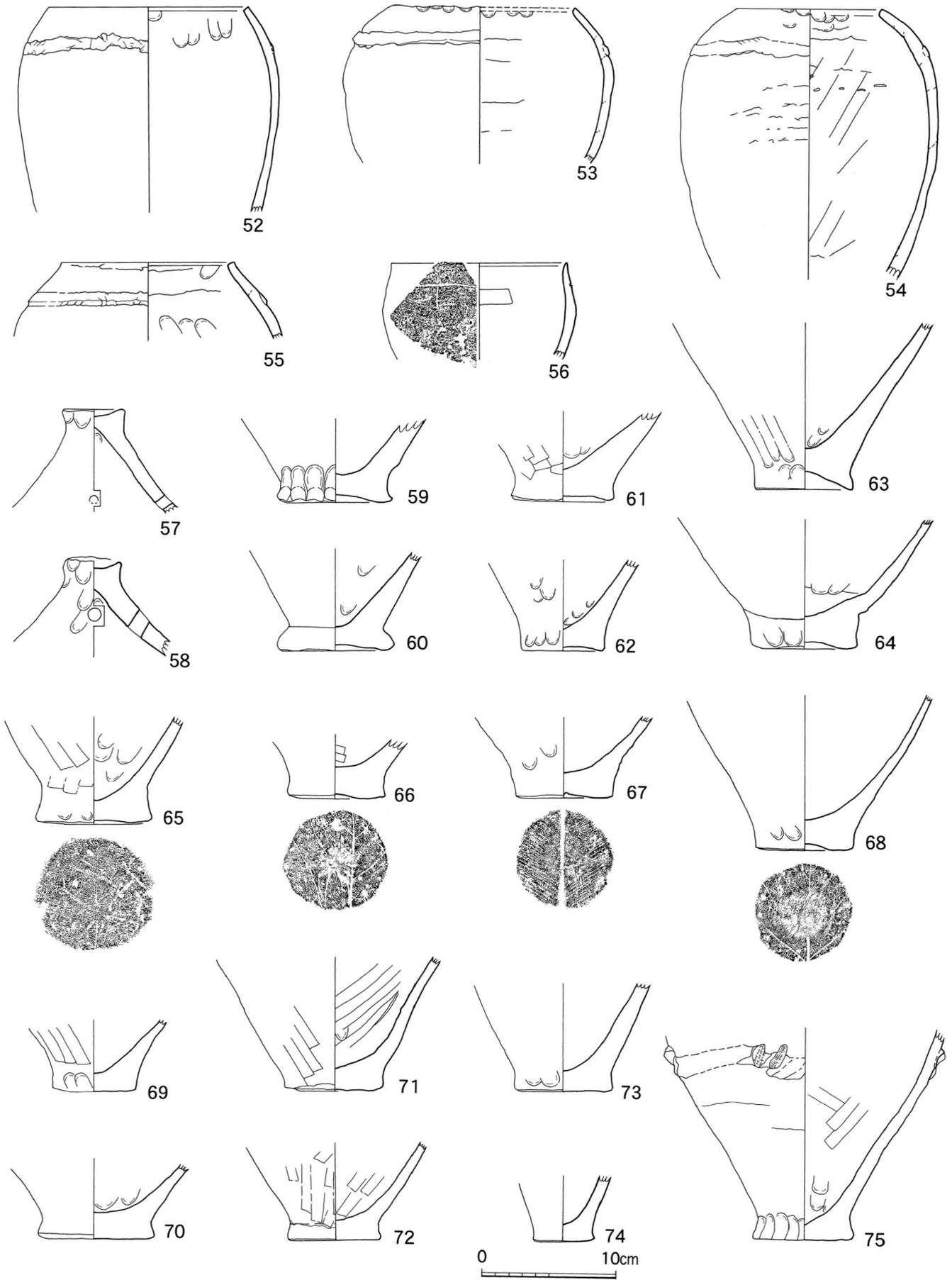
手捏ねのミニチュア土器で、いずれも指頭痕が残る。それぞれの形態により次のように分類した。平底の鉢形(148～151)、壺形(152)、碗形(153)、甕形(154)、尖底もしくは小さな底部の鉢形(155～165)



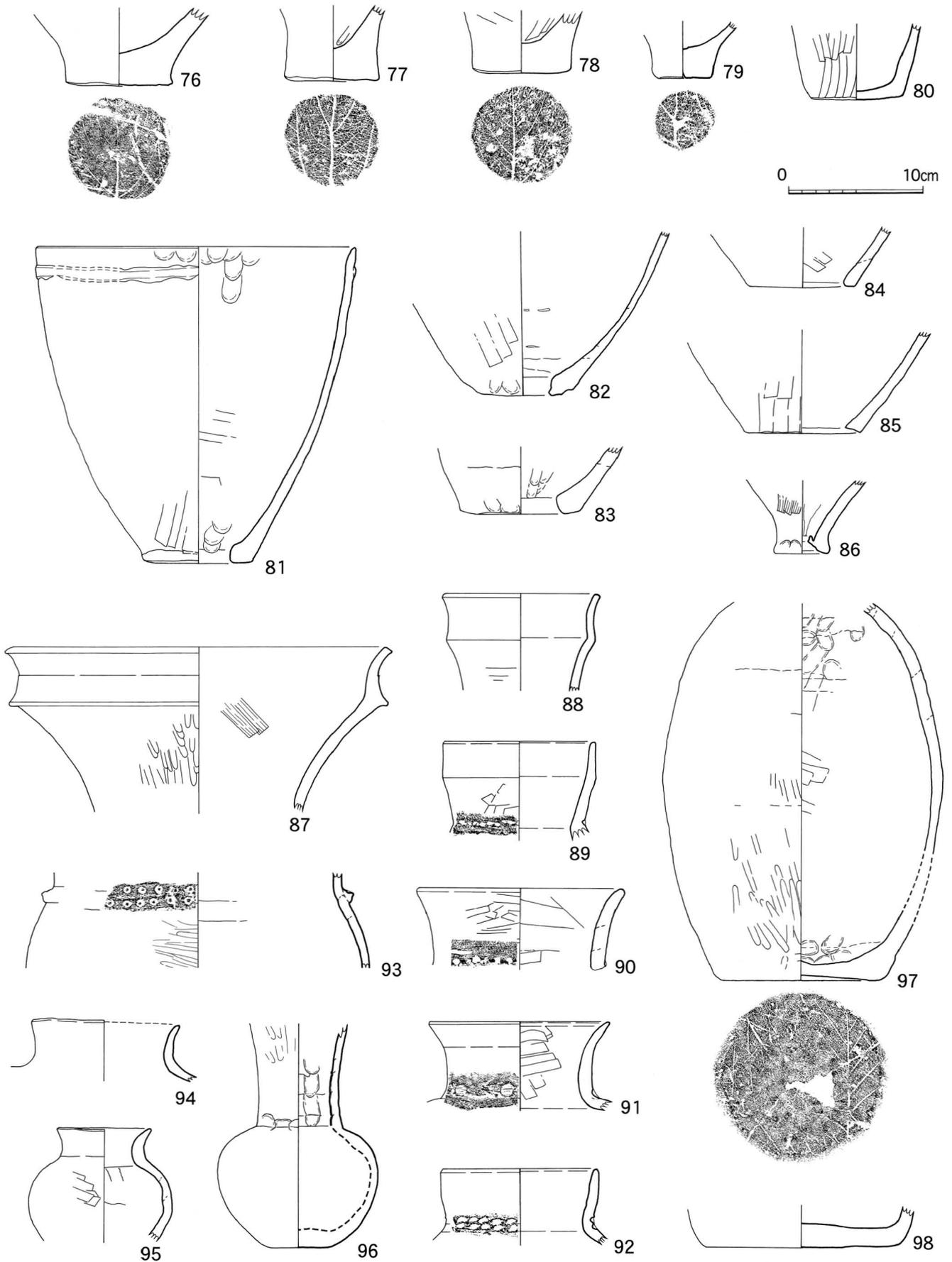
第11図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図①（S = 1 / 4）



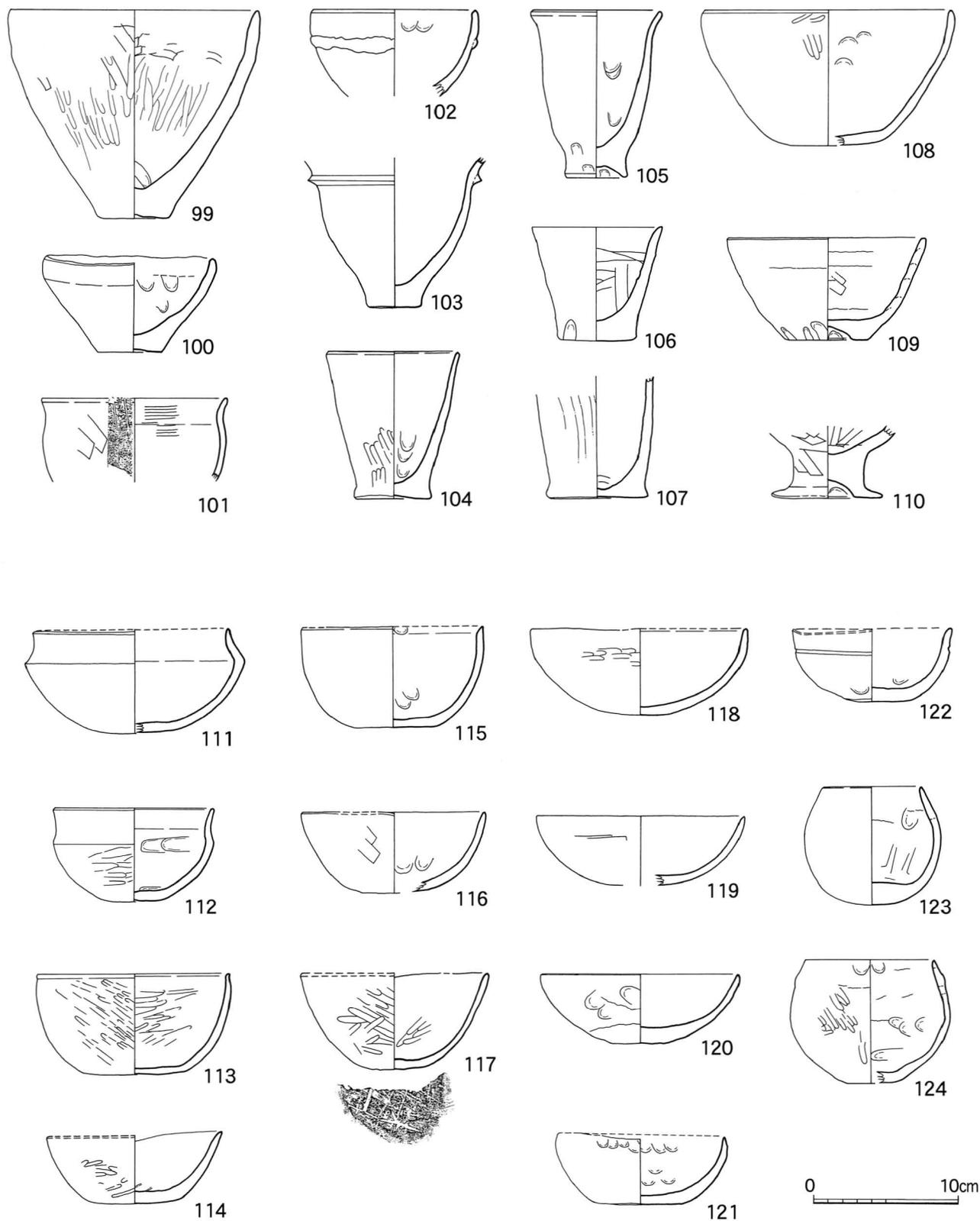
第12図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図②（S = 1 / 4）



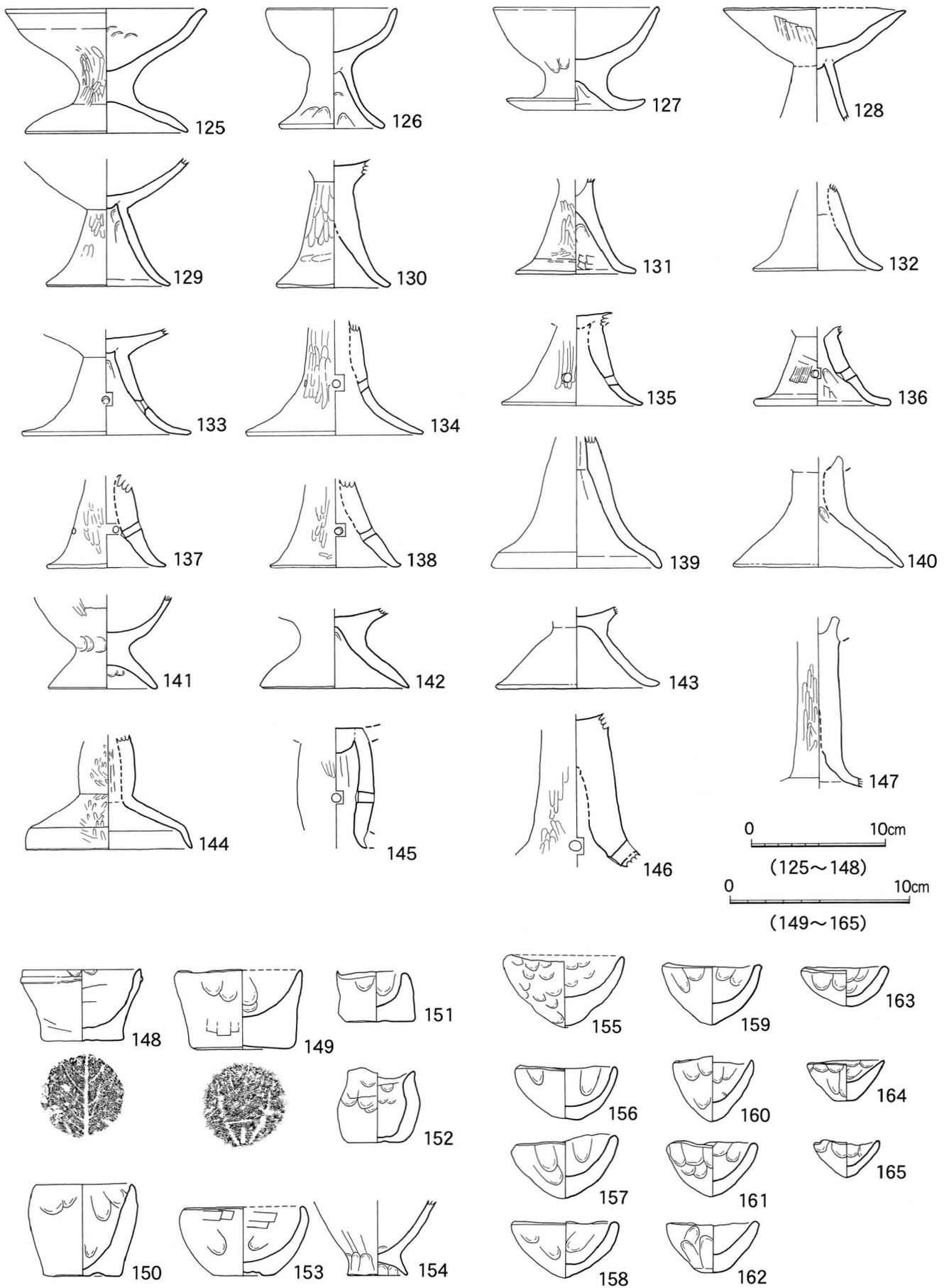
第13図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図③（S = 1 / 4）



第14図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図④（S = 1 / 4）



第15図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図⑤（S=1/4）



第16図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図⑥（S = 1/4, 1/3）

甕（内面にヘラ削り調整痕をもつもの）（第17図）

前述した甕Ⅰ類～甕Ⅲ類とは明らかに調整が異なり、内面にヘラ削り調整を施す甕をこの項で記述する。166～169は頸部に明確な稜をもち内面に削り調整による砂の動きが確認される。170は頸部からゆるやかに外反し口縁部が最大径をもつ。

坏（第17図）

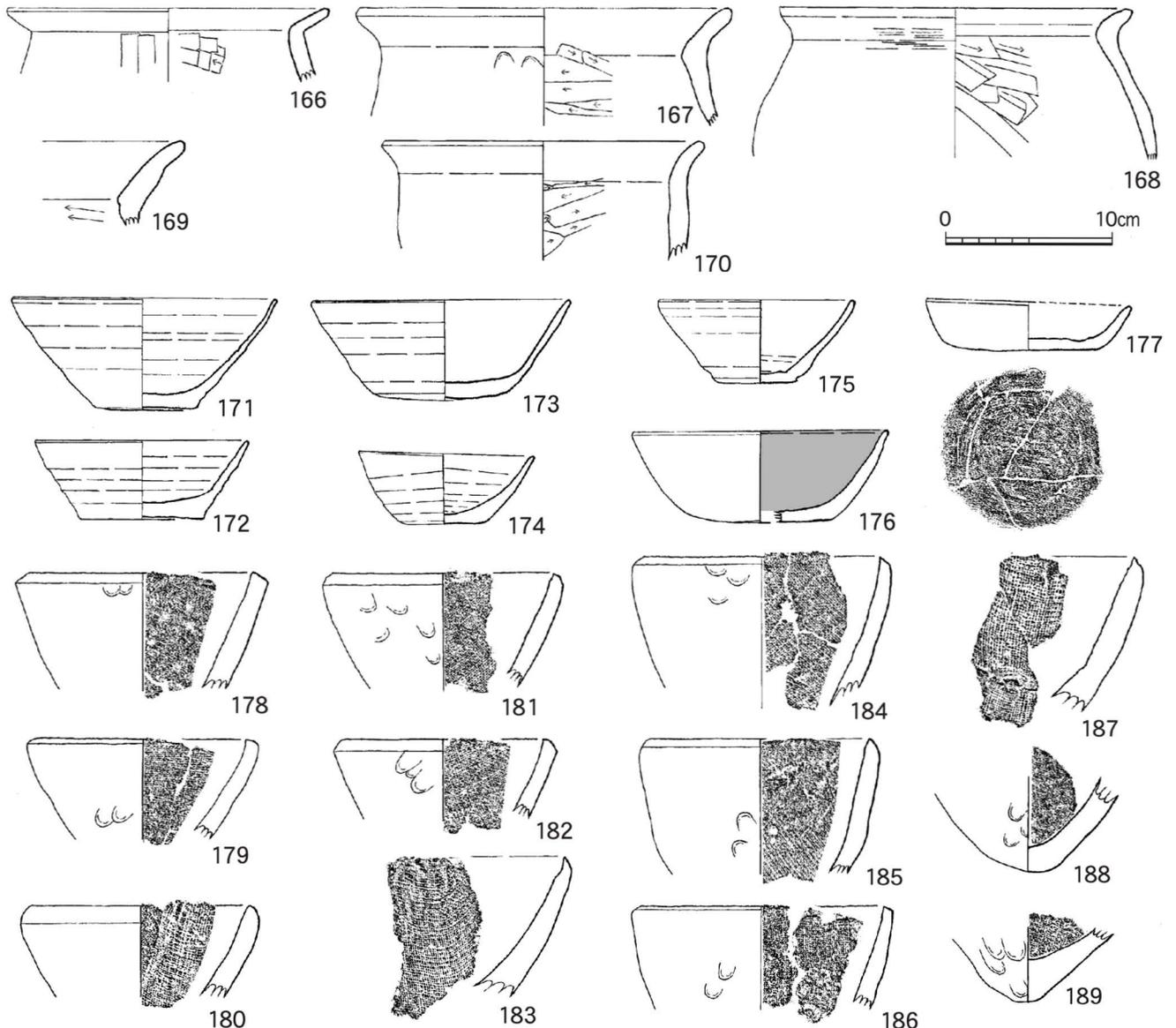
171、172は底部と体部の境が明確で、171は内湾気味172は直線的に立ち上がる。173、174は底部と体部の境が不明瞭で173は直線的に、174は内湾気味に立ち上がる。175は底部にロクロ切り離し部分が薄い円盤状に残る。176は黒色土器A類である。

皿（第17図）

177は底径の大きい糸切り底で、切り離した後についた板目圧痕が残る。

布痕土器（第17図）

いわゆる製塩土器と考えられている土器でやや内湾気味の胴部をもつ。178～182は小型で断面は正三角形形状を呈する。183～187はやや大型で断面は縦長の三角形形状を呈する。188、189は尖底の底部である。



第17図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図⑦（S = 1 / 4）

2 須恵器

坏蓋（第18図）

- 坏蓋Ⅰ類 退化気味の庇状の突出部をもち、体部は内湾するもの。有蓋高坏の蓋か（190、191）
- 坏蓋Ⅱ類 口縁部からなだらかに内湾しながら平たい天井部へと続くもの（192～194）
- 坏蓋Ⅲ類 口縁部からなだらかに内湾しながら丸い天井部へと続くもの（195～197）
- 坏蓋Ⅳ類 小型で丸い天井部に宝珠状のつまみをもち、口縁部に返りを有するもの（198～203）
- 坏蓋Ⅴ類 大型で擬宝珠状の平たいつまみをもち、口縁部に返りを有するもの（204～206）
- 坏蓋Ⅵ類 大型で擬宝珠状の平たいつまみをもち、口縁部が屈曲するもの（207～214）
- 坏蓋Ⅶ類 屈曲した口縁部とつまみを有し、扁平で小型のもの（215）
- 坏蓋Ⅷ類 口縁部に屈曲点をもち、口唇部までが長いもの（216）

坏身（第19図）

- 坏身Ⅰ類 口縁部に立ち上がりを有するもの
 - A 立ち上がりが長く直立気味のもの（217～219）
 - B 立ち上がりが短く内傾するもの
 - a 口径が10cm以上のもの（220～227）
 - b 口径が10cm以下のもの（228、229）
- 坏身Ⅱ類 口径が10cm以下の小型坏身で、口縁部が直線的に外傾するもの（230～234）

高坏（第19図）

235は四方に透かし孔をもち裾部で屈曲する。236は脚部を欠くが坏部下位に透かし孔をあけた痕跡がみられる。三方透かしか。237は坏部下位に二条の沈線をもち、その間に櫛描波状文が施される。脚部は三方透かしをもつ長脚二段透かしである。

甕（第19図～第20図）

238は甕の口縁部である。沈線と二段以上の櫛描波状文が施される。239は大型甕の口縁部である。口縁部上位と下位に二段の櫛描波状文が施される。240はゆるやかに外反し、口唇部が丸く調整されている。241～245は中型の甕である。いずれも外面に縦及び斜方向の平行タタキが施され、内面に同心円当て具痕がみられるが頸部や口唇部の形状に若干の違いがみられる。241～243の外面は平行タタキ後カキ目が施される。246、247はいずれも外面調整が格子目タタキであるが、246は格子目タタキ後にナデ調整が施されており、内面調整は回転ナデである。247は内面に平行当て具痕が残る。

壺（第20図）

248は壺の蓋である。天井部付近はヘラ削り、下位は回転ナデである。口縁部は屈曲し外反する。249～251は長頸壺の特徴をもつ。内外面とも回転ナデ調整であるが頸部の形状に若干の違いがみられる。252は焼成不完全で外面に格子目タタキ後、回転ナデ調整を施している。253は内外面とも回転ナデ調整である。254は糸切り底をもつ小型壺である。

甗（第20図）

255は甗の口縁部で外面に櫛描波状文が施される。256は卵倒形の胴部と頸部に浅い凹線と連続刺突文、胴部に円形の穿孔が施される。

平瓶・提瓶（第20図）

257は平瓶で胴部上位にカキ目が残る。258、259は提瓶である。258は内外面とも回転ナデ調整であるが、頸部に須恵器の小片が付着する。259は体部外面にカキ目調整が明瞭に残る。

高台付坏（第21図）

高台付坏Ⅰ類 口縁部が直線的に伸び高い高台が外に張り出すもの（260～263）

高台付坏Ⅱ類 口縁部が外反し高い高台が外に張り出すもので、口径が大きく器高の低いもの（264～266）

高台付坏Ⅲ類 口縁部が外反し高い高台が外に張り出すもので、口径が小さく器高の高いもの（267、268）

高台付坏Ⅳ類 口径と底径の差がそれほどなく体部は直線的で、口縁部はそのまま直線的にのびるか外反するもの（269～276）

高台付坏Ⅴ類 口縁部がS字状に広がり、口唇部は細く仕上げられるもの（277～279）

高台付坏Ⅵ類 直線的な体部をもち、低い高台のもの（280、281）

坏（第21図）

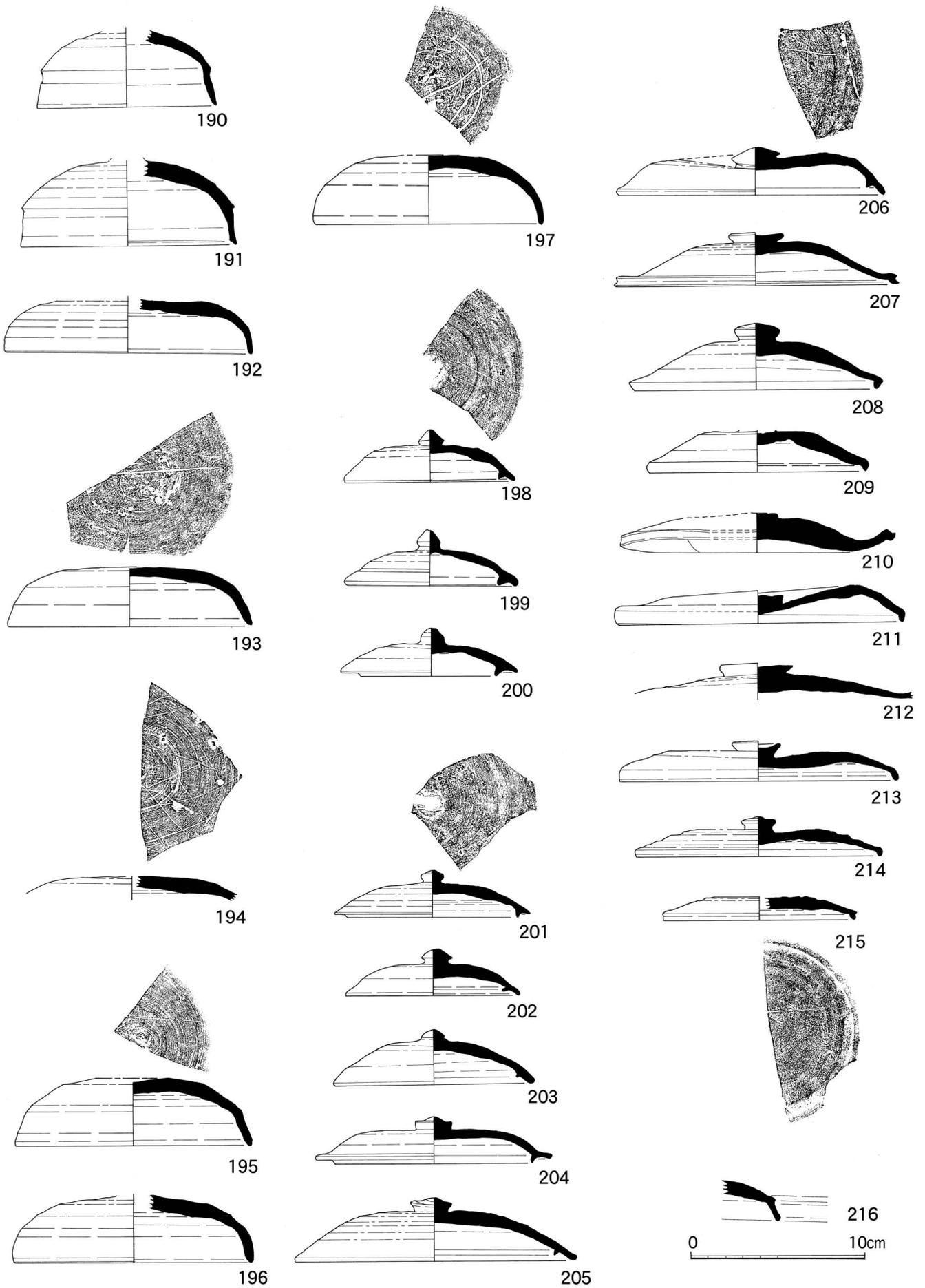
すべて焼成不完全で生焼け気味である。また、底部の切り離し技法はヘラ切りである。282～285は器形的には高台付坏Ⅵ類の坏部に近い。282～284には重ね焼きのため敷いたワラの痕跡が残り、282、284は見込み面、283は内面の体部上位に確認される。282は平底の底部に直線的な体部をもつ。286は器形的には高台付坏Ⅳ類とⅥ類の中間的特徴をもつ。

その他の須恵器（第21図）

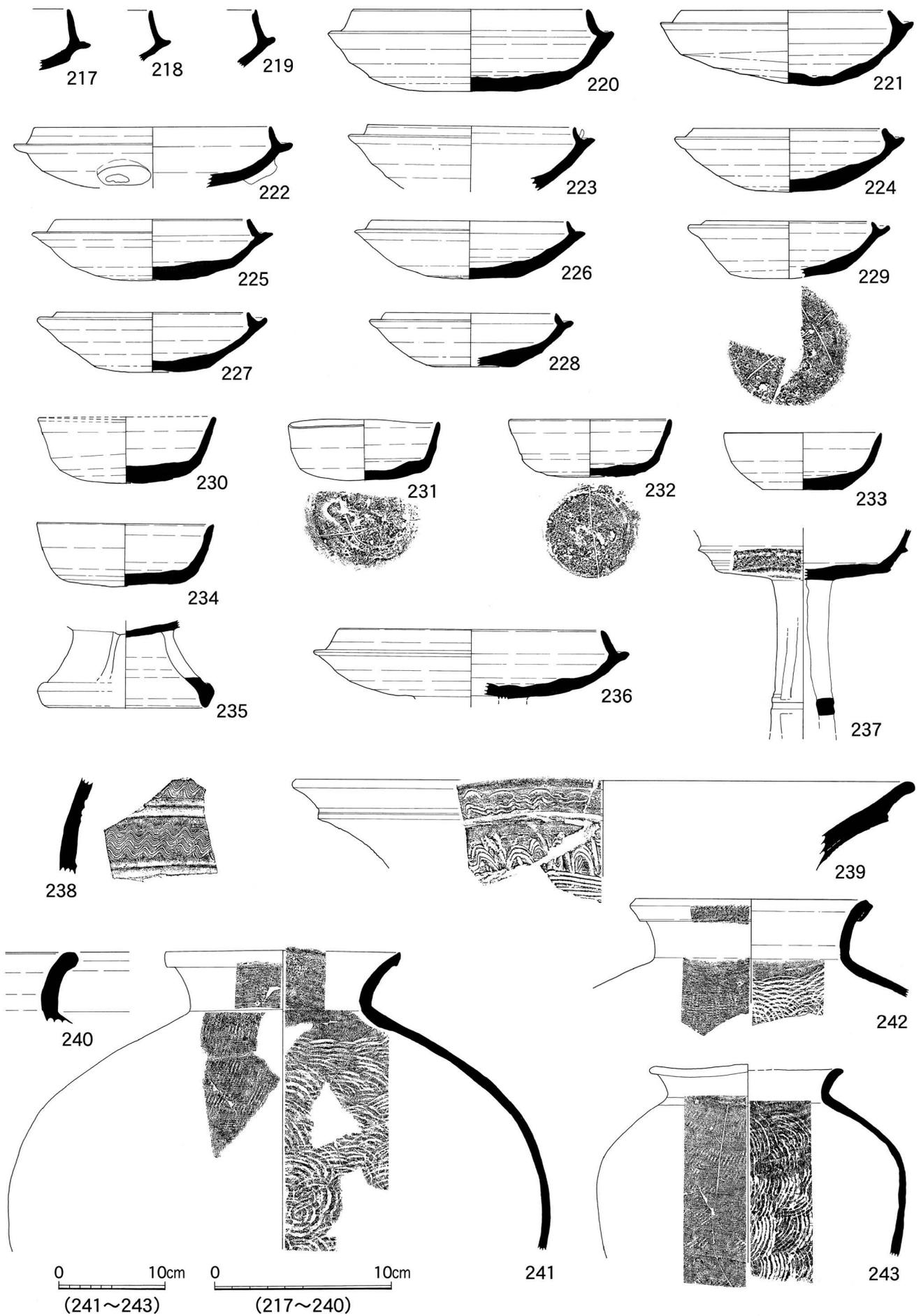
287は甗の底部片と思われるものに、坏蓋の口縁部片が2個体ほぼ平行におかれ、自然釉により付着しているものである。坏蓋は、返りの先端が欠損しているものの、その推定口径や返りの形状から古墳時代後期のものと思われる。288は長頸壺の底部付近と思われるものに、器種は明確でないものの須恵器の小片が付着している。

3 陶磁器（第22図）

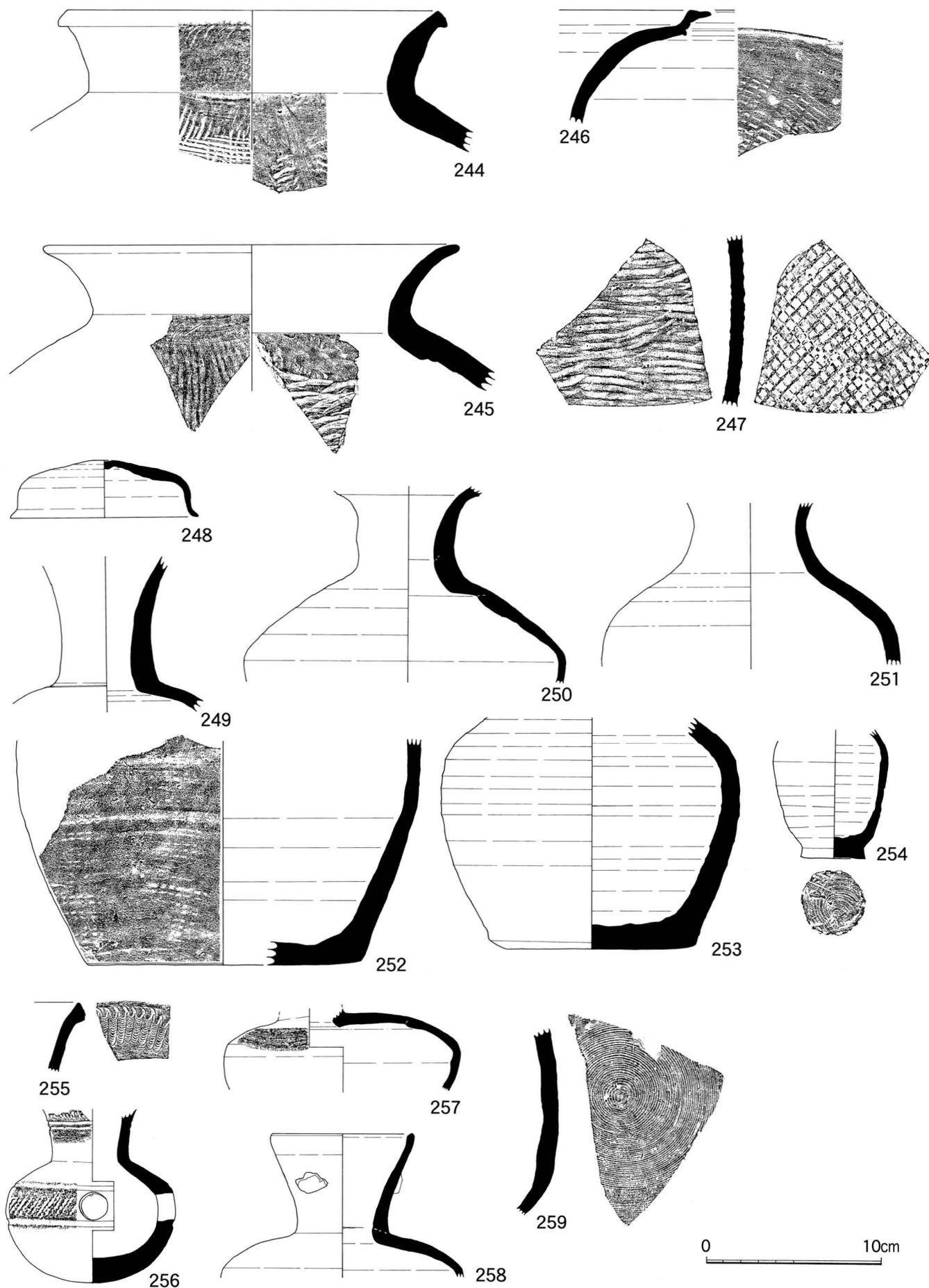
289は越州窯系青磁碗である。胎土に微細な黑色粒子を少量含み、非常に精良である。290、291は緑釉陶器の皿で、高台内面はヘラ切りで丁寧に仕上げられている。290は高台全体、291は高台内面が露胎である。292は緑釉陶器の碗である。露胎はなく畳付幅は13mmと広い。



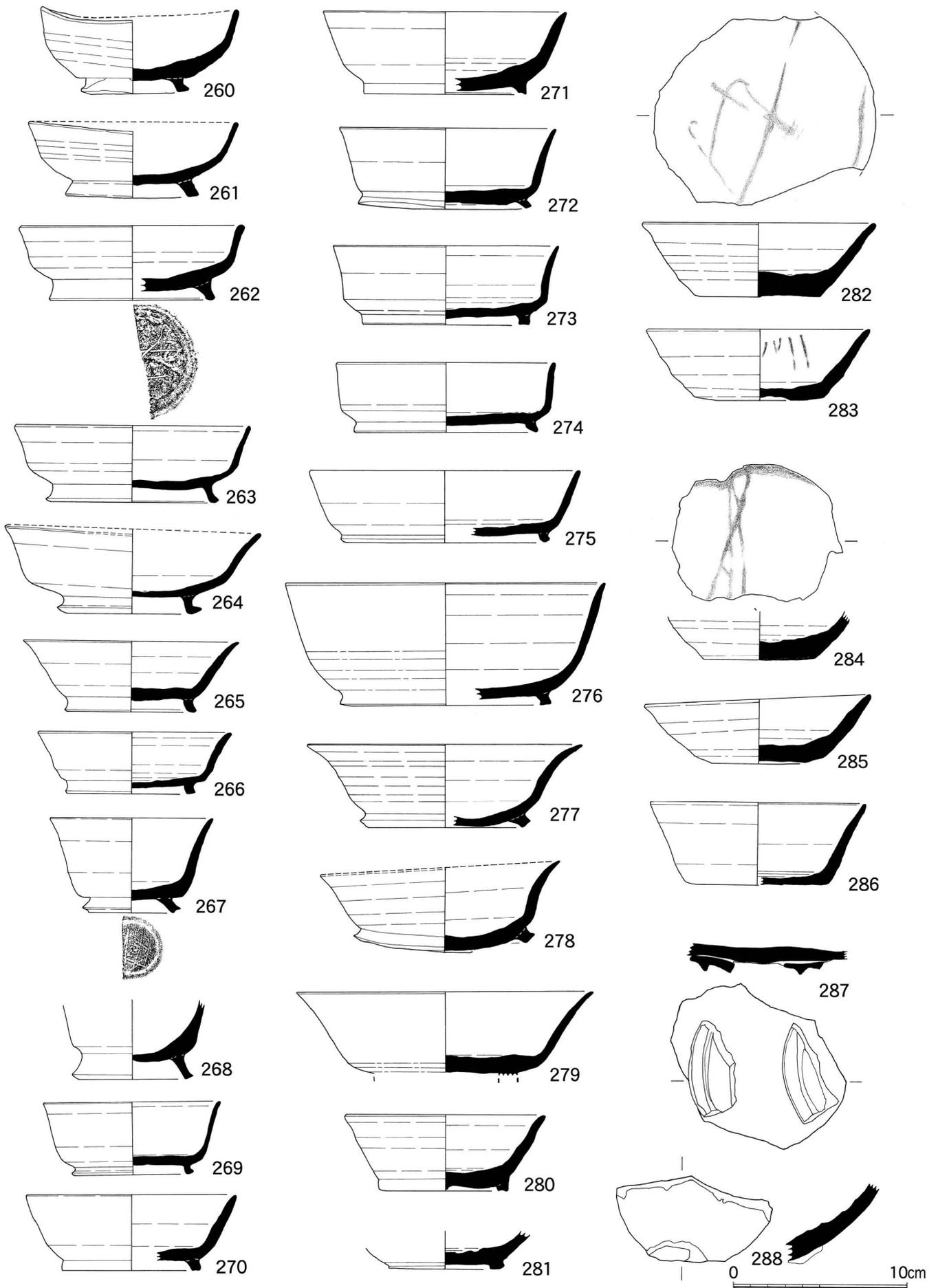
第18図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図⑧（S = 1 / 3）



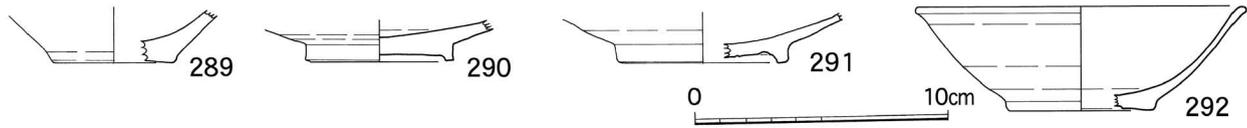
第19図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図⑨（S = 1 / 3, 1 / 5）



第20図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図⑩（S = 1 / 3）



第21図 出土遺物（古墳時代～古代）実測図①（S = 1 / 3）



第22図 出土陶磁器（古代）実測図（S = 1 / 3）

第3表 出土土師器（古墳時代～古代）観察表①

遺物番号	種別	器種部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
25	土師器	甕 口縁部～胴部	SH244	(30.7)	-	-	ヨコナデ 口唇部面取り 横方向のナデ 斜方向のハケ目	横方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	4mm以下の褐・暗褐・灰褐色粒	外面黒変
26	土師器	甕 口縁部	C2④	(27.3)	-	-	ヨコナデ 口唇部面取り 指頭痕 斜方向のハケ目	縦方向のハケ目	淡橙 (5YR8/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	5mm以下の赤茶・褐灰色粒	
27	土師器	甕 口縁部～胴部	SH329	-	-	-	丁寧なナデ	横方向のナデ 斜方向のナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	3mm以下の白・褐灰色粒	内面黒変
28	土師器	甕 口縁部～胴部	C1⑤	(25.0)	-	-	ヨコナデ 丁寧なナデ 工具痕 刻目貼付突帯 (布目痕)	丁寧なナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	橙 (5YR7/6)	良好	3mm以下の赤褐・透明・黒色粒	外面黒変
29	土師器	甕 口縁部～胴部	C1⑥	(28.9)	-	-	ヨコナデ ナデ 刻目貼付突帯 (布目痕)	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	2mm以下の茶・白・透明粒 2mm以下の黒色光沢粒	内面黒変
30	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	-	-	-	横方向のナデ 絡条貼付突帯 ナデ	横方向のナデ 工具ナデ	橙 (2.5YR6/8)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	3mm以下の黒色粒 3mm以下の赤褐・灰色粒	外面黒変 粘土のつなぎ目
31	土師器	甕 口縁部	C1⑤	-	-	-	横方向のナデ 工具による縦・斜方向のナデ 絡条貼付突帯	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	2mm以下の灰・茶・赤褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	内面黒変
32	土師器	甕 口縁部	C1⑬	-	-	-	ヨコナデ ナデ 貼付突帯	横・斜方向の工具ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (2.5YR6/6)	良好	5mm以下の赤褐・乳白・黒色粒 1mm以下の透明光沢粒	
33	土師器	甕 口縁部～胴部	C1⑥	-	-	-	ヨコナデ 横方向の工具ナデの後ナデ 貼付突帯 ナデ	ナデ	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	3mm以下の灰・白・赤褐色粒 0.5mm以下の透明光沢粒	外面黒変 粘土のつなぎ目
34	土師器	甕 口縁部～胴部	C1①	(29.2)	-	-	ヨコナデ 横・斜方向の工具ナデ 刻目貼付突帯 (布目痕)	斜方向の工具ナデ	褐 (7.5YR4/4)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	3mm以下の褐・褐灰色粒	外面黒変
35	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	-	-	-	ナデ 貼付突帯	ナデ 斜方向の工具ナデ 指頭痕	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	3mm以下の褐灰・にぶい褐色粒	粘土のたるみ
36	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	-	-	-	ヨコナデ 口唇部面取り ナデ 絡条貼付突帯	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	3mm以下の赤褐・灰色粒	内面黒変
37	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	(25.4)	-	-	ヨコナデ 口唇部面取り ナデ 指頭痕 貼付突帯 工具ナデ	工具ナデ ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	5mm以下のにぶい・褐・褐灰色粒	内面黒変
38	土師器	甕 口縁部～胴部	SH	-	-	-	ナデ 斜方向のナデ 絡条貼付突帯	横方向のナデ ナデ	明赤褐 (5YR5/8)	灰褐 (7.5YR5/2)	良好	3mm以下の灰・赤褐・淡黄褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	粘土のつなぎ目
39	土師器	甕 口縁部～胴部	C0④	-	-	-	ナデ 横方向のナデ 工具ナデ 指頭痕 貼付突帯	ナデ 横方向の工具ナデ 指頭痕	にぶい橙 (5YR7/3)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	良好	0.5mm以下の灰白色粒 0.5mm以下の透明光沢粒	内面下部黒変
40	土師器	甕 口縁部～胴部	C1⑨	(23.8)	-	-	ナデ 絡条貼付突帯 口唇部指つまみ	ナデ 口唇部指つまみ 指頭痕	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	6mm以下の褐・褐灰色粒	粘土のつなぎ目 内面黒変
41	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	(24.0)	-	-	ヨコナデ 一部口唇部面取り ナデ 貼付突帯	ナデ 指頭痕	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	7mm以下のにぶい・黄褐・褐灰色粒	粘土のつなぎ目 内面一部黒変
42	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑫	(26.2)	-	-	横方向のナデ ナデ 絡条貼付突帯	横方向のナデ 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	5mm以下の灰・茶褐色粒	粘土のつなぎ目
43	土師器	甕 口縁部～底部	C1⑩	(18.1)	6.5	17.4	ヨコナデ 口唇部面取り 貼付突帯 指頭痕 ハケ目	ナデ 指頭痕	褐灰 (10YR5/1)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	1.5mm以下の灰白・橙色粒 1mm以下の黒・透明光沢粒	粘土のつなぎ目
44	土師器	甕 口縁部～底部	C0⑩	(7.8)	6.8	21.6	粗なナデ 口唇部指つまみ 絡条貼付突帯 指頭痕	ナデ 工具ナデ 指頭痕	にぶい橙 (10YR7/2)	灰白 (5YR8/2)	良好	5mm以下の褐灰・灰白・茶褐色粒	粘土のつなぎ目 粘土よれ 木の葉底
45	土師器	甕 口縁部～胴部	B0⑧	(18.7)	-	-	ヨコナデ 工具ナデ 刻目貼付突帯 ナデ	横・縦方向の工具ナデ ナデ	にぶい黄橙 (10YR4/3) 黒	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	3mm以下の灰褐色粒	内外面黒変 粘土のつなぎ目
46	土師器	甕 口縁部～胴部	R17	(29.4)	-	-	ナデ 指頭痕 刻目貼付突帯	ナデ 指頭痕	にぶい橙 (5YR7/4)	褐灰 (5YR6/1)	良好	5mm以下の褐灰・淡黄・灰白色粒	粘土のつなぎ目
47	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	(24.7)	-	-	ヨコナデ ナデ 工具ナデ 絡条貼付突帯	ナデ 指頭痕	にぶい黄橙 (2.5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	良好	1.5mm以下の褐灰色粒	
48	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	(23.9)	-	-	ヨコナデ 口唇部面取り 工具ナデ 絡条貼付突帯	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	4mm以下の灰・赤茶・灰白色粒	
49	土師器	甕 口縁部～胴部	C1⑨	(26.0)	-	-	口唇部面取り 工具ナデ 絡条貼付突帯 ナデ	工具ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	3mm以下の浅黄褐色粒	外面黒変 口唇部 粘土のたるみ
50	土師器	甕 口縁部～胴部	C1⑤	(21.7)	-	-	口唇部指つまみ ナデ 絡条貼付突帯	工具ナデ ナデ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	3mm以下の赤褐・灰色粒	粘土のつなぎ目
51	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	(30.6)	-	-	ヨコナデ 口唇部面取り 横・斜方向のナデ 絡条貼付突帯	横方向のナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰褐 (7.5YR5/2)	良好	5mm以下の白色・褐灰色粒	内面黒変 粘土のつなぎ目
52	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	(14.7)	-	-	ヨコナデ 口唇部面取り ナデ 貼付突帯	ナデ 指頭痕	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	7mm以下の茶褐色粒 5mm以下の灰・黒・赤褐色粒	外面黒変
53	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	13.7	-	-	ナデ 口唇部指つまみ 貼付突帯	ナデ 口唇部指つまみ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	橙 (7.5YR6/6)	良好	8mm以下の灰褐・褐灰色粒	外面黒変 粘土のつなぎ目
54	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑩	(10.8)	-	-	ナデ 口唇部指つまみ 貼付突帯	工具ナデ 口唇部指つまみ	にぶい橙 (7.5YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	6mm以下の灰褐色粒	粘土のつなぎ目 外面黒変
55	土師器	甕 口縁部～胴部	C0⑫	(12.8)	-	-	ナデ 口唇部面取り 貼付突帯	ナデ 指頭痕	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	5mm以下の灰・茶褐色粒 2mm以下の白色光沢粒	口唇部に粘土のたるみ 粘土のつなぎ目
56	土師器	甕 口縁部～胴部	B1	(13.0)	-	-	ナデ 沈線	横方向のナデ 工具ナデ	橙 (5YR7/8)	褐灰 (5YR6/1)	良好	3mm以下の灰白・褐灰色粒	外面部分的に黒変
57	土師器	甕(蓋) 天井部	SH328	天井部 4.8	-	-	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	浅黄橙 (10YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	4mm以下の灰・褐・乳白色粒 2mm以下の黒・透明光沢粒	内外面黒変 透かし1(他不明)
58	土師器	甕(蓋) 天井部	C2	天井部 4.5	-	-	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2mm以下の褐灰・橙色粒 1mm以下の透明光沢粒	透かし4
59	土師器	甕 胴部～底部	B2⑥	-	7.1	-	ナデ 指頭痕	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	暗灰 (N3)	良好	2mm以下の黒・灰色粒	部分的に黒変
60	土師器	甕 胴部～底部	D1⑤	-	-	8.7	ナデ	ナデ 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	3mm以下の黒色粒 1mm以下の透明光沢粒	底部一部黒変
61	土師器	甕 胴部～底部	C1⑨	-	7.7	-	ナデ 工具痕	ナデ 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	4mm以下の褐灰・明赤褐色粒	外面黒変
62	土師器	甕 底部	C1⑨	-	(6.0)	-	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	0.5mm～4mmの茶褐色粒 2mm以下の黒色光沢粒	外面黒変
63	土師器	甕 胴部～底部	C2	-	7.2	-	指ナデ	ナデ 指頭痕	橙 (5YR6/8)	明褐灰 (7.5YR7/2)	良好	3mm以下の乳白色粒 3mm以下の黒光沢粒	
64	土師器	甕 胴部～底部	C1⑨	-	8.0	-	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	8mm以下の褐灰・乳白・黒色粒 5mm以下の黒・透明光沢粒	
65	土師器	甕 胴部～底部	C0⑫	-	8.6	-	工具ナデ ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰褐 (7.5YR5/2)	良好	5mm以下の褐・灰色粒 2mm以下の黒・透明光沢粒	外面一部黒変 風化木の葉底
66	土師器	甕 底部	C0⑩	-	7.3	-	ナデ	工具ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/6)	良好	6mm以下の赤褐・灰白・黒褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	内面一部黒変 木の葉底
67	土師器	甕 胴部～底部	C0⑩	-	7.2	-	ナデ 指頭痕	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	7mm以下の暗褐・褐灰色粒 1mm以下の白色光沢粒	風化 木の葉底?

第4表 出土土師器（古墳時代～古代）観察表②

遺物番号	種別	器種部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
68	土師器	甕 胴部～底部	C0⑩	-	7.2	-	ナデ 指頭痕	ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	4mm以下の褐灰・褐色粒	内面黒変 木の葉底
69	土師器	甕 胴部～底部	C1⑩	-	6.2	-	工具ナデ ナデ 指頭痕	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	8mm以下の茶褐色粒 2mm以下の黒色柱状光沢粒	底部黒変
70	土師器	甕 胴部～底部	C0⑩	-	8.8	-	ナデ	ナデ 指頭痕	橙 (7.5YR7/6)	灰 (10Y4/1)	良好	5mm以下の灰・褐・灰白色粒	外面一部黒変
71	土師器	甕 胴部～底部	C1⑥	-	7.4	-	工具ナデ ナデ	斜方向の工具ナデ 指頭痕	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	5mm以下の褐灰・赤褐・鈍い橙 色粒	外面黒変 粘土のかえり
72	土師器	甕 胴部～底部	C0⑩	-	6.9	-	斜・縦方向の工具ナデ ナデ	斜・縦方向の工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	2mm以下の透明光沢粒 4mm以下の褐・淡黄橙・灰白色粒	内面一部黒変 粘土のよれ
73	土師器	甕 胴部～底部	C1⑥	-	7.2	-	丁寧なナデ ナデ 指頭痕	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい橙 (10YR7/3)	良好	2mm以下の透明・黒色光沢粒 2mm以下の金角柱状粒	風化 内外面黒変
74	土師器	甕 胴部～底部	SH390	-	4.6	-	丁寧なナデ ナデ	丁寧なナデ	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (5YR6/4)	良好	2mm以下の灰白・透明・黒色粒 2mm以下の透明光沢粒	黒斑
75	土師器	甕 胴部～底部	B1⑬	-	7.5	-	ナデ 刻目貼付突帯(布目痕) 指頭痕	工具ナデ 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	明褐色 (7.5YR7/2)	良好	3mm以下の黒色柱・灰色光沢粒 4mm以下の灰褐色粒	粘土のつなぎ目
76	土師器	甕 胴部～底部	C1⑥	-	8.0	-	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	2mm以下の灰褐・褐灰色粒	粘土のよれ 木の葉底
77	土師器	甕 胴部～底部	C0⑩	-	7.1	-	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰 (N4/)	良好	4mm以下の褐・灰・黒色粒 2mm以下の透明光沢粒	外面黒変 木の葉底
78	土師器	甕 底部	SH298	-	7.3	-	工具痕 ナデ	工具痕 ナデ	黄橙 (7.5YR7/6)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	5mm以下の灰・オリブ黒色粒	内外面黒変 木の葉底
79	土師器	甕 底部	C1⑨	-	4.2	-	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	黄橙 (10YR8/6)	良好	4mm以下の赤・褐・灰白・黒色粒 1mm以下の透明光沢粒	風化 木の葉底(葉2枚か?)
80	土師器	甕 胴部～底部	C0⑩	-	7.0	-	工具ナデ ナデ	ナデ	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	良好	2mm以下の黒褐・灰白色粒 1mm以下の透明光沢粒	風化著しい
81	土師器	甕 口縁部～底部	C0⑤	(23.7)	8.2	23.6	工具ナデ ナデ 指頭痕 貼付突帯	工具ナデ 指頭痕	橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	6mm以下の灰・赤褐・黄灰色粒	内外面黒変 外面粘土よれ
82	土師器	甕 胴部～底部	B1⑬	-	6.2	-	工具ナデ 指頭痕	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	5mm以下の褐灰・褐色粒	内面粘土のつなぎ目 粘土のかえり
83	土師器	甕 胴部～底部	C0⑫	-	8.9	-	ナデ 指頭痕	工具ナデの後指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	8mm以下の灰褐・褐灰色粒	粘土のつなぎ目 外面一部黒変
84	土師器	甕 胴部～底部	C0⑩	-	8.0	-	ナデ	工具ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR6/4)	良好	5mm以下の灰褐・褐灰色粒	内面黒変 粘土のつなぎ目
85	土師器	甕 胴部～底部	C0⑩	-	8.8	-	縦方向の工具ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	褐灰 (7.5YR6/1)	良好	5mm以下の褐・褐灰色粒	内面黒変
86	土師器	甕 底部	B2⑮	-	3.9	-	ハケ目 ナデ 指頭痕	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1.5mm以下のにぶい黄褐・褐灰色 色粒	内面粘土のしぼり目・ 粘土のかえり
87	土師器	壺 口縁部～頸部	A1⑮	(27.7)	-	-	ヨコナデ 風化著しいが一部ミガキ	ハケ目 ナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (7.5YR6/6)	良好	3mm以下の赤褐・灰褐・灰白色 粒	風化
88	土師器	壺 口縁部～頸部	C0⑩	(11.0)	-	-	横方向のナデ 工具ナデ	横方向のナデ	橙 (2.5YR6/8)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1mm以下の灰白・黒・乳白色 1mm以下の透明光沢粒	内面黒斑
89	土師器	壺 口縁部～頸部	C3	(11.0)	-	-	一部丁寧なナデ ナデ 工具 痕 刺突文	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1mm～3mm以下の橙色粒 2mm以下の黒色光沢粒	
90	土師器	壺 口縁部～頸部	C1⑥	(15.0)	-	-	横方向の工具ナデ 刺突文	ナデ 工具痕	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	4mm以下の灰白・褐・乳白色粒 1mm以下の透明光沢粒	
91	土師器	壺 口縁部～頸部	C1⑥	(13.4)	-	-	ナデ 刺突文	横方向の工具ナデ 指頭痕	橙 (2.5YR7/6)	灰白 (2.5YR6/8)	良好	1mm～4mm以下の灰・橙色粒 2mm以下の透明光沢粒	粘土のつなぎ目
92	土師器	壺 口縁部～頸部	C1⑥	(11.4)	-	-	ナデ 横方向のナデ 二列の刺突文	横方向のナデ 指頭痕	橙 (5YR7/6)	灰白 (7.5YR8/2)	良好	5mm以下の茶褐・灰・褐色粒 3mm以下の黒色光沢粒	粘土のつなぎ目
93	土師器	壺 頸部～胴部	C1⑨	-	-	-	ナデ ミガキ 貼付突帯 竹管文	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	1mm以下の灰褐・褐灰色粒	粘土のつなぎ目 内面一部黒変
94	土師器	壺 口縁部～頸部	C0⑩	10.9	-	-	横方向のナデ	ナデ	橙 (5YR7/6)	黄灰 (2.5YR6/1)	良好	2mm以下の黒・灰・赤褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	
95	土師器	壺 口縁部～胴部	C0⑩	7.0	-	-	ヨコナデ 横方向のナデ 工具ナデ	ナデ	橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	3mm以下の灰・褐・黒色粒 1mm以下の透明光沢粒	粘土のつなぎ目 内面粘土のしぼり目
96	土師器	壺(長頸) 頸部～底部	C0⑩	-	4.7	-	丁寧なナデ ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2mm以下の茶褐・灰・灰白色粒 1mm以下の黒・透明光沢粒	粘土のつなぎ目 外面黒変
97	土師器	壺 頸部～底部	C1⑩	-	12.1	-	ナデの後ミガキ 斜方向のミガキ	指頭痕 縦・斜方向の工具 ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR7/3)	良好	5mm以下の茶赤色粒 2mm以下の浅黄色粒	粘土のつなぎ目 木の葉底(葉は2枚)
98	土師器	壺 底部	C0⑫	-	14.4	-	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/8)	褐灰 (9.5YR4/1)	良好	2mm以下の黒褐・灰白・赤褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	風化 外面一部黒変
99	土師器	鉢 口縁部～底部	D3③	(16.9)	4.8	14.5	工具痕 一部風化気味だが 工具痕の後ミガキ	一部風化気味だが工具痕の 後ミガキ痕 指頭痕	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	良好	5mm以下の灰色粒	内面に黒変 外面に粘土のつなぎ目
100	土師器	鉢 口縁部～底部	C1	11.5	4.4	6.7	ヨコナデ ナデ	ナデ 指頭痕	褐灰 (10YR6/1)	褐灰 (10YR5/1)	良好	1mm以下の褐灰・透明粒	粘土のつなぎ目
101	土師器	鉢 口縁部～胴部	C1⑤	(12.8)	-	-	沈線 工具ナデ	工具ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	3mm以下の褐灰・褐色粒	内面部分的に黒変
102	土師器	鉢 口縁部～胴部	C0⑩	(11.2)	-	-	ヨコナデ 貼付突帯	ナデ 指頭痕	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	2mm以下の明褐・黒灰・灰褐色 粒	外面炭化物付着 内面黒変 風化
103	土師器	鉢 口縁部～底部	A1⑮	(11.8)	2.9	-	ヨコナデ 三角状の貼付突帯 ナデ 指頭痕	ナデ	橙 (5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	0.5mm～3mm以下の灰・赤褐 色粒	
104	土師器	鉢 口縁部～底部	C0⑫	(8.4)	5.0	10.2	ヨコナデ ナデ ミガキ	ナデ 指頭痕	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm以下の赤褐・褐灰色粒	
105	土師器	鉢 口縁部～底部	B2⑥	(8.7)	(4.0)	11.6	ナデ 口唇部が摩耗している	ナデ 指頭痕	浅黄橙 (7.5YR8/4)	灰白 (10YR7/1)	良好	0.5mm～3mmの茶褐色粒	
106	土師器	鉢 口縁部～底部	表土	-	5.0	-	風化気味だが一部指頭痕が みられる	斜方向の指ナデ 工具痕	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	3mm以下の茶褐色粒 4mm以下の灰色粒	
107	土師器	鉢 口縁部～底部	SH407	-	7.1	-	工具ナデ ナデ	ナデ	淡橙 (5YR8/4)	橙 (5YR6/6)	良好	1mm以下の明赤褐・灰・灰白色 粒	風化
108	土師器	鉢 口縁部～底部	C1⑨	(17.0)	(4.9)	9.4	風化気味だがミガキ	風化気味だが単位不明の ミガキ 指頭痕	橙 (2.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	3mm以下の黒褐・灰白・赤褐色 粒	外面一部黒変
109	土師器	鉢 口縁部～底部	C1①	(13.6)	5.2	7.2	ヨコナデ ナデ 指頭痕	ナデ 工具痕	橙 (5YR6/8)	橙 (7.5YR7/6)	良好	2mm以下の褐灰・赤褐・灰白色 粒	粘土のつなぎ目
110	土師器	鉢 脚部	C0④	-	7.7	-	斜方向の工具ナデ ヨコナデ ナデ	工具ナデ 指頭痕	橙 (5YR7/6)	褐灰 (10YR5/1)	良好	6mm以下の明褐・褐灰・灰白・ 明赤褐色粒	粘土のつなぎ目
111	土師器	碗 口縁部～底部	C0⑩	13.2	(5.0)	(7.2)	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	3mm以下の赤褐・褐灰・黒色粒 1mm以下の透明光沢粒	風化
112	土師器	碗 口縁部～底部	C2⑫	(11.1)	(3.0)	6.6	横方向のナデ ミガキ ナデ	丁寧なナデ 指ナデ	褐灰 (10YR6/1)	褐灰 (7.5YR6/1)	良好	2.5mm以下の茶褐・灰褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	
113	土師器	碗 口縁部～底部	C0⑩	(12.4)	(7.0)	7.0	ミガキ	ミガキ	橙 (5YR6/6)	褐灰 (5YR5/1)	良好	3mm以下の褐灰色粒	内面黒変
114	土師器	碗 口縁部～底部	C0⑩	12.0	6.4	(4.7)	斜方向のミガキ	風化気味だが丁寧なナデ	淡赤橙 (2.5YR7/4)	橙 (5YR7/6)	良好	2mm以下の茶褐・灰白・黒色粒	

第5表 出土土器（古墳時代～古代）観察表③

遺物 番号	種別	器 種 部 位	出 土 場 所	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか				色 調		焼成	胎 土 の 特 徴	備 考
				口径	底径	器高	外 面		内 面		外 面	内 面			
115	土器	碗 口縁部～底部	C0⑩	12.6	5.6	7.0	丁寧なナデ	ナデ	丁寧なナデ	指頭痕	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	3.5mm以下の褐・褐色色粒	
116	土器	碗 口縁部～底部	C0⑩	12.6	4.3	(5.6)	ナデ 工具痕	ナデ	ナデ	指頭痕	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	6mm以下の茶褐・灰色粒 3mm以下の黒角柱状粒	風化
117	土器	碗 口縁部～底部	C0⑩	12.8	2.0	(6.7)	ナデ ヨコナデ 斜方向の ミガキ 縦線	ナデ	ミガキ		橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/7)	良好	4.5mm以下の茶赤色粒 3.5mm以下の灰白・褐色粒	内面黒変
118	土器	碗 口縁部～底部	C1⑨	14.8	2.8	(6.1)	ミガキ 丁寧なナデ	ナデ	丁寧なナデ		赤灰 (2.5YR6/1)	淡赤橙 (2.5YR7/3)	良好	1mm以下の灰白・褐色・黒色粒 1mm以下の透明光沢粒	
119	土器	碗 口縁部～底部	C0⑨	14.4	-	-	工具痕 風化気味だが丁寧 なナデ	ナデ	丁寧なナデ		橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	2mm以下の褐色色粒	内面黒変 風化
120	土器	碗 口縁部～底部	B1⑨	(13.5)	(4.0)	4.8	ナデ 指頭痕	ナデ	丁寧なナデ		橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	3mm以下の赤褐色粒	粘土のつなぎ目 風化
121	土器	碗 口縁部～底部	C0⑩	(11.4)	6.0	(4.9)	ナデ 指頭痕	ナデ	指頭痕		橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	7mm以下のにぶい黄褐・褐色・赤 褐・灰白色粒	
122	土器	碗 口縁部～底部	C0⑩	10.9	3.2	(5.0)	ヨコナデ ナデ 指頭痕 凹線	ナデ	指頭痕		橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	4mm以下の灰褐・明赤褐・黒・灰 白色粒	内面一部黒変
123	土器	碗 口縁部～底部	C1⑨	(6.6)	-	8.2	丁寧なナデ	ナデ	工具痕 指頭痕		にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	3mm以下の茶褐色粒 2mm以下の黒角柱状粒	粘土のつなぎ目
124	土器	碗 口縁部～底部	C0⑩	(8.9)	(3.3)	8.6	ミガキ 指頭痕	ナデ	指頭痕		浅黄橙 (7.5YR8/4)	明褐灰 (7.5YR7/1)	良好	6mm以下の茶褐・灰色粒	粘土のつなぎ目
125	土器	高坏 坏部～裾部	C0⑩	(14.8)	(12.0)	9.3	ミガキ ヨコナデ	ナデ	指頭痕		橙 (5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	2mm以下の灰・褐・黒色粒	風化
126	土器	高坏 口縁部～裾部	C0⑩	(9.5)	(7.5)	9.0	ヨコナデ 指頭痕	ナデ	丁寧なナデ 指頭痕		橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2mm以下の黒褐・赤褐・灰白色等 の粒 1mm以下の透明光沢粒	粘土のつなぎ目 風化
127	土器	高坏 口縁部～裾部	C0⑩	(12.3)	(10.3)	7.7	ヨコナデ 指頭痕	ナデ	工具痕		橙 (7.5YR7/6)	褐灰 (7.5YR6/1)	良好	5mm以下の褐灰・赤褐・灰白色等 の粒 1mm以下の透明光沢粒	粘土のつなぎ目 風化
128	土器	高坏 坏部～脚部	B0⑩	13.3	-	-	ヨコナデ 風化著しいがハケ目	ナデ			にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1mm以下の褐灰色粒 1mm以下の透明光沢粒	内面黒変
129	土器	高坏 坏部～裾部	C1⑤	-	9.4	-	丁寧なナデ ミガキ ヨコナデ	ナデ	指頭痕 横方向のナデ 風化気味だが丁寧なナデか		橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	1mm以下の黒色粒 2mm以下の赤褐色粒	内面一部黒変
130	土器	高坏 基部～裾部	C3④	-	8.6	-	風化気味だがミガキ ヨコナデ	ナデ	丁寧なナデ 横方向のナデ		橙 (5YR6/6)	褐灰 (7.5YR6/1)	良好	2mm以下の赤褐色粒 3mm以下の灰色粒	
131	土器	高坏 脚部～裾部	D3③	-	8.8	-	風化気味だがミガキ	工具痕 指頭痕		橙 (5YR6/6)	褐灰 (5YR4/1)	良好	3mm以下の褐灰・褐色粒	外面風化 内面黒変	
132	土器	高坏 脚部～裾部	C1⑨	-	9.8	-	風化気味だが丁寧なナデ	ナデ		橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	良好	1mm以下の灰白・黒色粒 2mm以下の透明光沢粒		
133	土器	高坏 坏部～裾部	C1⑥	(12.6)	(12.6)	-	丁寧なナデ ナデ	ナデ	指頭痕		にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	5mm以下の褐・灰・黒・白色粒 2mm以下の黒・透明光沢粒	風化 透かし (現存3個推定4個)
134	土器	高坏 脚部～裾部	C1⑤	-	(13.3)	-	ミガキ ナデ	ナデ		浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	2mm以下の灰・黒・灰白・褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	透かし(現存4個) 風化	
135	土器	高坏 基部～裾部	C1⑨	-	(10.5)	-	ミガキ ヨコナデ	ナデ		にぶい橙 (7.5YR7/3)	オリーブ黒 (7.5YR3/1)	良好	1mm以下の灰白・黒・褐色・褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	透かし(現存4個) 風化	
136	土器	高坏 脚部～裾部	表土	-	(9.5)	-	ハケ目 工具痕 ナデ	工具痕 ナデ 指頭痕		橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	1mm以下の黒褐色粒 1mm以下の黒色光沢粒	穿孔	
137	土器	高坏 脚部～裾部	C1⑨	-	9.0	-	ミガキ	ナデ		橙 (5YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	3mm以下の明褐・褐色・灰白・黒 色粒 1mm以下の透明光沢粒 2mm以下の黒角柱	透かし(現存4個) 内面一部黒変 風化	
138	土器	高坏 脚部～裾部	C1⑤	-	9.8	-	ミガキ ヨコナデ	ナデ		橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	良好	2mm以下の黒褐・赤褐・灰白色粒 1mm以下の透明光沢粒	外面一部黒変 透かし(現存4個)	
139	土器	高坏 脚部～裾部	C1⑨	-	(12.6)	-	丁寧なナデ 横方向のナデ	ナデ		にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰 (5Y4/1)	良好	4mm以下の明赤褐・褐色・灰白・ 黒色粒 2mm以下の黒角柱粒 1mm以下の透明光沢粒	外内黒変 内面粘土 しぼり 風化	
140	土器	高坏 脚部～裾部	C1①	-	12.8	-	丁寧なナデ ヨコナデ	横方向のナデ 指頭痕		にぶい橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	2mm以下の褐灰・にぶい褐・灰白 色粒 1mm以下の透明光沢粒	未調整	
141	土器	高坏 坏部～裾部	C0⑩	-	(8.0)	-	風化気味だがミガキ ナデ 指頭痕	ナデ	指頭痕		橙 (5YR7/6)	灰白 (10YR8/2)	良好	5mm以下の黒・褐色粒 2mm以下の褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	
142	土器	高坏 基部～裾部	C0⑩	-	11.1	-	ヨコナデ	ナデ	指頭痕		橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	3mm以下の黒褐・明褐灰・明褐 色粒	風化
143	土器	高坏 基部～裾部	C0⑩	-	12.1	-	一部丁寧なナデ	ナデ		橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	1mm以下の褐灰・赤褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	風化	
144	土器	高坏 脚部～裾部	C3⑤	-	12.4	-	ミガキ	ナデ		橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	3mm以下の褐・褐色・灰褐色粒	内面に粘土のしぼり 目	
145	土器	高坏 基部～脚部	C1⑩	-	-	-	ナデ ミガキ	ナデ		にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (5YR7/6)	良好	2mm以下の灰白・灰・褐・黒色粒 1mm以下の透明光沢粒	透かし(現存2個推 定4個) 風化	
146	土器	高坏 基部～裾部付近	B2⑩	-	-	-	縦方向のミガキ	ナデ		橙 (5YR7/4)	灰白 (10YR7/1)	良好	2.5mm以下の褐色色粒 1mm以下の灰白色粒	穿孔 内面黒変	
147	土器	高坏 脚部	C1⑤	-	-	-	ミガキ	ナデ		橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2mm以下の赤褐色粒		
148	土器	ミニチュア土器 (鉢形) 口縁部～底部	B2⑩	(8.6)	6.2	5.3	指つまみ 貼付突起 ナデ 工具痕	指つまみ ナデ 一部灰色変色		橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	6mm以下の灰赤・明赤褐・褐色 の粒	木の葉底 内面に 粘土のつなぎ目	
149	土器	ミニチュア土器 (鉢形) 口縁部～底部	C1⑤	6.8	4.9	4.5	工具痕 ナデ 指つまみ	指つまみ ナデ 指頭痕		浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	1mm以下の茶褐色粒	木の葉底	
150	土器	ミニチュア土器 (鉢形) 口縁部～底部	B3⑤	(5.4)	4.4	5.2	ナデ 指つまみ	指つまみ ナデ 指頭痕		灰 (N5/)	灰 (N5/)	良好	7mm以下の黄褐・白色・赤色粒		
151	土器	ミニチュア土器 (鉢形) 口縁部～底部	C1⑤	3.8	3.8	2.8	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕		橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	良好	4mm以下の褐灰・灰白・黒褐色粒	外面一部黒変	
152	土器	ミニチュア土器 (壺形) 口縁部～底部	C3⑥	3.7	3.0	3.9	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕		橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	1mm以下の茶褐色粒	内外面に粘土のつ なぎ目	
153	土器	ミニチュア土器 (碗形) 口縁部～底部	C0⑤	6.5	3.5	3.9	指頭痕 横方向の工具ナデ	指頭痕 横方向の工具 ナデ		橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1mm以下の透明光沢粒	上げ底	
154	土器	ミニチュア土器 (壺形) 口縁部～底部	SH357	-	3.5	-	工具ナデ 指頭痕 ナデ	ナデ 指頭痕		灰白 (10YR7/1)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	2mm以下の赤褐・灰色粒	外面一部黒変	
155	土器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	D3③	6.2	-	(4.1)	指つまみ ナデ 指頭痕	指つまみ ナデ 指頭痕		橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	4mm以下のにぶい赤褐・灰・灰白 色粒	外面一部黒変	
156	土器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	C3⑤	5.3	-	2.8	指つまみ ナデ 指頭痕	指つまみ ナデ 指頭痕		橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	1mm以下の透明光沢粒	外面に黒変	
157	土器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	C3⑤	5.6	-	3.3	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕		明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	良好	3mm以下の黒褐・赤褐・灰白色粒	外面に黒変	
158	土器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	SH317	5.5	-	3.1	指つまみ ヨコナデ 指頭痕	指つまみ 指頭痕		橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/8)	良好	2mm以下の赤褐・灰色粒	外面茶褐色の付着物	
159	土器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	D3③	5.1	-	3.3	指つまみ ナデ 指頭痕	指つまみ ナデ 指頭痕		明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	2mm以下の黒褐・赤褐・灰白色粒	内外面に黒変	
160	土器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	SH89	4.4	-	3.7	指つまみ ナデ 指頭痕	指つまみ ナデ 指頭痕		褐灰 (7.5YR4/1)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	1mm以下の赤褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	外内黒変	
161	土器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	C1	4.6	-	3.1	指つまみ ナデ 指頭痕	指つまみ ナデ 指頭痕		にぶい黄橙 (10YR7/3)	灰黄 (10YR6/2)	良好	6mm位の灰褐・浅黄・無色透明光 沢粒		

第6表 出土土師器（古墳時代～古代）観察表④

遺物番号	種別	器種部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
162	土師器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	SH161	4.8	1.6	2.8	指つまみ ナデ 指頭痕	指つまみ ナデ 指頭痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	3mm以下の灰白・赤褐色粒	内外面黒変
163	土師器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	C3⑨	4.5	—	2.2	指つまみ ナデ 指頭痕	指つまみ ナデ 指頭痕	橙 (5YR7/6)	橙 (2.5YR7/8)	良好	2mm以下の灰白・褐・灰褐・無色 透光沢粒	
164	土師器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	C3⑩	4.3	1.3	2.3	指つまみ ナデ 指頭痕	指つまみ ナデ 指頭痕	灰白 (7.5YR8/1)	灰白 (7.5YR8/2)	良好	2mm以下の赤茶色粒	
165	土師器	ミニチュア土器 (手捏ね) 口縁部～底部	C2⑧	3.6	—	2.0	指つまみ ナデ 指頭痕	指つまみ ナデ 指頭痕	橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (5YR7/3)	良好	1.5mm以下の赤茶・褐灰・無色透 明光沢粒	
166	土師器	甕 口縁部	C0⑧	(18.8)	—	—	ヨコナデ 横方向の工具ナデ 縦方向の工具ナデ	横方向のナデ ヘラ削り	褐 (7.5YR4/3)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	2mm以下の灰白・黒褐・褐色粒	
167	土師器	甕 口縁部～頸部	C2	(22.0)	—	—	ヨコナデ 指頭痕 横方向のナデ	横方向のナデ 斜方向のヘラ削り	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	2mm以下の黒褐・灰白色粒	
168	土師器	甕 口縁部～胴部	D4⑥	(21.0)	—	—	ヨコナデ 横方向のナデ 風化気味だがナデ	横方向のナデ 斜方向のヘラ削り	橙 (2.5YR6/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	良好	1mm～4mmの灰白色粒 1mm～3mmの透明光沢粒	
169	土師器	甕 口縁部	SH195	—	—	—	ヨコナデ 横方向のナデ	横方向のナデ 斜方向のヘラ削り	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	3mm以下の金色に光る粒 2mm以下の灰白色粒	
170	土師器	甕 口縁部～胴部	表土	(18.6)	—	—	ヨコナデ 横方向のナデ	斜方向のヘラ削り ナデ	黒 (10YR2/1)	橙 (7.5YR6/6)	良好	1mm以下の褐灰・赤褐・灰白色粒	
171	土師器	環 口縁部～底部	C3⑩	(15.6)	6.2	6.7	回転ナデ	回転ナデ	橙 (2.5YR7/8)	橙 (2.5YR7/8)	良好	1mm以下の褐灰・黒・赤褐色粒	ヘラ切り
172	土師器	環 口縁部～底部	B1	(12.8)	(7.3)	4.7	回転ナデ	回転ナデ	灰白 (5YR8/2)	淡赤褐 (2.5YR7/3)	良好	きめ細か	外面部分的に黒変 板目瓦痕 ヘラ切り
173	土師器	環 口縁部～底部	B1	(15.4)	8.2	6.0	風化気味だが回転ナデ ヘラ削りの後粗なナデ	風化気味だが回転ナデ	淡橙 (5YR8/3)	淡橙 (5YR8/3)	良好	きめ細か	ヘラ切り
174	土師器	環 口縁部～底部	SH237	10.6	5.0	4.3	回転ナデ	回転ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/8)	良好	2mm以下の褐色粒	ヘラ切り
175	土師器	環 口縁部～底部	C0⑫	(11.8)	4.9	5.0	風化気味だが回転ナデ	風化気味だが回転ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (2.5YR7/8)	良好	きめ細か	ヘラ切り
176	土師器	坏(内黒土器) 口縁部～底部	C1③	15.2	8.3	5.5	ミガキ 回転ナデ ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	オリープ黒 (5Y3/1)	良好	3mm以下の赤褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	外面一部黒変 風化 ヘラ切り
177	土師器	皿 口縁部～底部	SH133	12.3	9.1	2.9	風化気味だが回転ナデ	風化気味だが回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1mm以下の黒・赤褐色粒	糸切り 板目瓦痕
178	土師器	布痕土器 口縁部～胴部中	C1⑤	(13.2)	—	—	ヘラ切り ナデ 指頭痕	布目痕	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	1mm以下の灰白色・透明粒	
179	土師器	布痕土器 口縁部～胴部	C1⑤	(13.8)	—	—	ヘラ切り ナデ 指頭痕	布目痕	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (5YR6/8)	良好	9mm以下の橙色粒	堅緻な焼き
180	土師器	布痕土器 口縁部～胴部	C3⑪	(13.9)	—	—	ヘラ切り ナデ	布目痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5Y7/6)	良好	6mm以下の暗褐色粒 3mm以下の褐灰色粒	
181	土師器	布痕土器 口縁部～胴部	C1⑤	(13.2)	—	—	ヘラ切り ナデ 指頭痕	布目痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	3mm以下の明赤褐・褐色色粒	
182	土師器	布痕土器 口縁部～胴部	C1⑥	(13.4)	—	—	ヘラ切り ナデ 指頭痕	布目痕	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (5YR7/8)	良好	1mm～10mm以下の淡い黄色粒	
183	土師器	布痕土器 口縁部～胴部	SH176	—	—	—	ヘラ切り ナデ	布目痕	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	6mm以下の褐灰色粒	
184	土師器	布痕土器 口縁部～胴部	C1⑤	(14.0)	—	—	ヘラ切り ナデ 指頭痕	布目痕	橙 (5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	良好	2mm以下の黒褐・赤褐・灰白色粒	
185	土師器	布痕土器 口縁部～胴部	B1⑨	(13.1)	—	—	ヘラ切り ナデ 指頭痕	布目痕	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	2mm以下の褐灰色粒 1mm以下の赤褐色粒	
186	土師器	布痕土器 口縁部～胴部	C1⑤	(14.6)	—	—	ヘラ切り ナデ 指頭痕	布目痕 指頭痕	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	2mm以下の黒褐・灰白色粒	
187	土師器	布痕土器 口縁部～胴部	B1	—	—	—	ヘラ切り ナデ	布目痕	橙 (2.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	1mm以下の灰白色粒	
188	土師器	布痕土器 底部	B0	—	—	—	ナデ 指頭痕	布目痕	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	3mm以下の明褐・灰白色粒	
189	土師器	布痕土器 底部	C1⑤	—	—	—	ナデ 指頭痕	布目痕	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	6mm以下の橙色粒	

第7表 出土須恵器（古墳時代～古代）観察表①

遺物番号	種別	器種部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
190	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	B1	(12.2)	—	—	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	1mm以下の灰白色粒	
191	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	C1⑬	(12.4)	—	—	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	3mm以下の灰白色粒	つまみ
192	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	B3⑮	(14.2)	—	—	ヘラ削り 回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	3.5mm以下の灰白色粒	
193	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	SH253	(14.0)	—	3.4	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	1.5mm以下の灰白色粒	ヘラ記号
194	須恵器	環蓋 天井部	SH192	—	—	—	ヘラ削り	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N6/)	堅緻	3mm以下の灰白色粒	ヘラ記号
195	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	C1⑨	(13.5)	—	3.7	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	堅緻	1mm以下の灰白粒	ヘラ記号
196	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	SH348	(13.7)	—	—	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	堅緻	2mm以下の灰白粒	
197	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	C0⑧	(13.0)	—	4.0	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ ヨコナデ	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	2mm以下の白色粒	ヘラ記号
198	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	C0④	9.7	—	3.0	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 自然釉	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	精良	ヘラ記号 宝珠つまみ
199	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	C0⑯	9.8	—	3.3	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	4mm以下の灰白色粒	宝珠つまみ
200	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	C0⑯	10.2	—	2.8	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の灰白色粒	宝珠つまみ
201	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	表土	(11.2)	—	2.8	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	宝珠つまみ
202	須恵器	環蓋 天井部～口縁部	表土	(10.0)	—	2.7	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	宝珠つまみ
203	須恵器	環蓋 つまみ部～口縁部	C23	11.3	—	3.2	ヘラ削り 回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰白 (N7/)	灰白 (N7/)	堅緻	1mm以下の白色粒	宝珠つまみ
204	須恵器	環蓋 つまみ部～口縁部	C0⑫	(13.4)	—	26.5	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	3mm以下の白色粒 1mm以下の黒色粒	擬宝珠つまみ

第8表 出土須恵器（古墳時代～古代）観察表②

遺物番号	種別	器種部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
205	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	C0⑩	16.0	—	3.7	ヘラ削り 回転ナデ 自然釉	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の黒・灰白色粒	疑宝珠つまみ
206	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	C0⑧	15.4	—	2.7	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	暗灰 (N3/)	灰 (N4/)	堅緻	2mm以下の黒・灰白色粒	須恵器の小片付着 疑宝珠つまみ
207	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	B0	(15.8)	—	3.1	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の白色粒	疑宝珠つまみ
208	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	B1	13.9	—	3.9	ヘラ削り 回転ナデ 自然釉	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N4/)	灰 (N5/)	堅緻	精良	疑宝珠つまみ
209	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	B1	13.9	—	3.9	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N4/)	灰 (N5/)	堅緻	精良	疑宝珠つまみ
210	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	B1	15.8	—	2.3	回転ナデ 自然釉	回転ナデ 自然釉	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の灰白色粒	疑宝珠つまみ
211	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	C0⑩	16.4	—	1.9	回転ナデ	回転ナデ	灰 (N7/)	灰 (N6/)	堅緻	2mm以下の黒色粒 4mm以下の白色粒	疑宝珠つまみ
212	須恵器	坏蓋 天井部	B1①	—	—	—	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	焼成不完全 (生焼け)	7mm以下の白色粒 2mm以下の無色光沢粒	疑宝珠つまみ
213	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	B0	16.0	—	2.3	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰白 (N8/)	灰 (N6/)	焼成不完全 (一部)	1mm以下の灰白色粒	疑宝珠つまみ(歪)
214	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	C0⑧	(14.2)	—	2.3	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰白 (N7/)	灰 (N7/)	焼成不完全 (生焼け)	2.5mm以下の暗灰色粒 1mm以下の白色粒	疑宝珠つまみ
215	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	B0⑩	(11.0)	—	—	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	堅緻	2mm以下の透明粒 1mm以下の白・黒色粒	ヘラ記号
216	須恵器	坏蓋 つまみ部～口縁部	SH401	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白 (5Y8/1)	灰白 (5Y8/1)	焼成不完全 (生焼け)	1mm以下の灰色粒	
217	須恵器	坏身 口縁部	C1⑤	—	—	—	回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	
218	須恵器	坏身 口縁部	C1⑤	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の黄灰色粒	
219	須恵器	坏身 口縁部	C4⑤	—	—	—	回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰 (N5/)	灰 (N4/)	堅緻	3mm以下の黒色粒 4mm以下の白色粒	
220	須恵器	坏身 口縁部～底部	C1⑤	(13.2)	—	4.7	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N4/)	堅緻	1mm以下の灰白色粒	
221	須恵器	坏身 口縁部～底部	C0⑩	11.8	—	4.4	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	青灰 (5PB5/1)	青灰 (5PB5/1)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	
222	須恵器	坏身 口縁部～底部	表土	(13.4)	—	—	回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰 (N4/)	灰 (N5/)	堅緻	4mm大の灰色粒 1.5mm以下の灰色粒	須恵器の小片付着
223	須恵器	坏身 口縁部～底部	C1⑨	(11.7)	—	—	回転ナデ 厚い自然釉	回転ナデ	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	須恵器の小片付着
224	須恵器	坏身 口縁部～底部	C1⑥	(10.8)	—	3.6	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	焼成不完全 (生焼け)	2mm以下の乳白色粒 1mm以下の黒・灰色粒	
225	須恵器	坏身 口縁部～底部	C0⑩	11.1	—	3.5	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	青灰 (5PB5/1)	青灰 (5PB5/1)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	
226	須恵器	坏身 口縁部～底部	C1⑤	11.2	—	3.3	ヘラ削り 回転ナデ 自然釉	回転ナデ	暗青灰 (5B4/1)	暗青灰 (5B4/1)	堅緻	2.5mm以下の灰白粒	
227	須恵器	坏身 口縁部～底部	C0⑩	(10.8)	—	3.4	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (10Y5/1～7/1)	灰 (10Y5/1～7/1)	堅緻	1mm以下の黒色粒	
228	須恵器	坏身 口縁部～底部	表土	(9.6)	(11.6)	3.1	ヘラ削り 回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	1.5mm以下の暗灰・灰白色粒	
229	須恵器	坏身 口縁部～底部	C0⑩	9.4	—	3.3	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	2mm以下の白色粒	ヘラ記号
230	須恵器	坏身 口縁部～底部	C0⑩	9.9	—	3.7	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	4mm以下の灰白色粒 2mm以下の黒色粒	
231	須恵器	坏身 口縁部～底部	C0⑩	8.4	—	3.5	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	5mm以下の灰白色粒	ヘラ記号
232	須恵器	坏身 口縁部～底部	C0⑩	(9.0)	—	3.3	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	暗灰 (N3/)	暗灰 (N3/)	堅緻	4mm以下の灰白色粒	ヘラ記号
233	須恵器	坏身 口縁部～底部	C0⑩	(8.8)	(4.5)	3.3	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N4/)	灰 (N5/)	堅緻	5mm以下の灰色粒 1mm以下の黒色粒	
234	須恵器	坏身 口縁部～底部	C0⑩	(9.9)	—	3.6	ヘラ削り 回転ナデ 板目痕	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	3mm以下の茶・灰白色粒	
235	須恵器	高坏 基部～裾部	C1②	—	9.4	—	回転ナデ	回転ナデ	灰 (N4/)	灰 (N5/)	堅緻	4mm以下の灰色粒 2mm以下の黒色粒	四方透かし
236	須恵器	高坏 口縁部～基部	C1⑤	(14.8)	—	—	回転ナデ 自然釉	回転ナデ 仕上げナデ	オリーブ灰 (5GY6/1)	灰 (N6/)	堅緻	2mm以下の白黒粒 1mm以下の灰色粒	三方透かし
237	須恵器	高坏 坏部～脚部	C1⑤	—	—	—	回転ナデ 櫛波状文 2条の沈線 自然釉	回転ナデ	灰 (5Y4/1)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	1mm以下の灰白色粒・暗灰色粒	三方透かし
238	須恵器	甕 口縁部	SH207	—	—	—	櫛波状文 沈線	回転ナデ 自然釉	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	
239	須恵器	甕 口縁部	SE2	(35.2)	—	—	回転ナデ 櫛波状文 横方向・斜目の原体施文	仕上げナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の黒・灰白色粒	
240	須恵器	甕 口縁部	C1⑤	—	—	—	回転ナデ 自然釉	回転ナデ 自然釉	緑黒 (10GY2/1)	緑黒 (10GY2/1)	堅緻	1mm以下の白色粒	
241	須恵器	甕 口縁部～胴部	表土	22.0	—	—	回転ナデ 自然釉 平行タ キの後カキ目	カキ目 自然釉 同心円当 て具痕	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の灰白・褐灰色粒	
242	須恵器	甕 口縁部～頸部	C0⑩	(21.6)	—	—	回転ナデ 平行タタキの後カ キ目 自然釉 仕上げナデ	回転ナデ 自然釉 同心 円当て具痕	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	
243	須恵器	甕 口縁部～胴部	C1⑨	17.3	—	—	回転ナデ 平行タタキの後カ キ目	回転ナデ 同心円当て具痕	灰 (7.5Y5/)	灰 (7.5Y5/)	堅緻	2.5mm以下の灰白色粒	ヘラ記号
244	須恵器	甕 口縁部～頸部	B1	(21.1)	—	—	タタキ後回転ナデ 自然釉 平行タタキ	回転ナデ 同心円当て具痕	灰白 (N7/)	灰白 (N7/)	堅緻	3mm以下の灰色粒	
245	須恵器	甕 口縁部～頸部	B1⑤	(23.3)	—	—	回転ナデ 平行タタキ 自然釉	回転ナデ 同心円当て具痕	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	
246	須恵器	甕 口縁部	B1	—	—	—	回転ナデ 格子目タタキ	回転ナデ	黒褐 (2.5Y3/1)	暗灰黄 (2.5Y4/2)	堅緻	1mm以下の白・黒色粒	
247	須恵器	甕 胴部	C3	—	—	—	格子目タタキ	平行当て具痕	褐灰 (7.5YR4/1)	灰 (10Y4/1)	堅緻	1mm以下の暗黒色粒	
248	須恵器	壺蓋 天井部～口縁部	C3①	(10.6)	—	3.2	ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰白 (N5/)	灰白 (N4/)	堅緻	3mm以下の灰白色粒	
249	須恵器	壺 頸部～肩部	C2	—	—	—	回転ナデ 自然釉	回転ナデ 自然釉	灰白 (10Y7/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の灰白色粒	
250	須恵器	壺 頸部～胴部	表土	—	—	—	回転ナデ 自然釉	回転ナデだが隆起が激しい ナデ 自然釉	灰白 (5Y7/1)	灰オリーブ (5Y6/2)	堅緻	2mm以下の黒・茶色粒	
251	須恵器	壺 頸部～胴部	C1⑤	—	—	—	回転ナデ ヘラ削り 自然釉	回転ナデ 自然釉	灰 (N6/)	灰 (N5/)	堅緻	1mm以下の灰白・褐灰色粒	

第9表 出土須恵器（古墳時代～古代）観察表③

遺物番号	種別	器種部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
252	須恵器	壺 胴部～底部	C3⑥	-	15.6	-	格子目タタキ 回転ナデ	回転ナデ	灰 (N6/)	灰白 (N7/)	やや軟 (やや不完全)	1mm以下の褐灰色粒	
253	須恵器	壺 胴部～底部	SE2	-	11.7	-	回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰白 (10YR7/1)	褐灰 (10YR5/1)	堅緻	1mm以下の褐灰色粒	
254	須恵器	小型壺 胴部～底部	C3	-	3.7	-	回転ナデ	回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	精良	糸切底
255	須恵器	罎 口縁部	C1⑤	-	-	-	回転ナデ 自然釉 櫛描波状文	回転ナデ	暗オリーブ灰 (2.5GY3/1)	暗オリーブ灰 (2.5GY3/1)	堅緻	1mm以下の灰白色粒	
256	須恵器	罎 頭部～底部	C3⑤	-	-	-	回転ナデ 自然釉 刺突文 浅い凹線	不明	灰白 (N7/)	灰白 (N7/)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	穿孔
257	須恵器	平瓶 頸部～体部	C0⑧	-	-	-	回転ナデ カキ目 自然釉	回転ナデ	暗灰 (N3/)	暗灰 (N3/)	堅緻	3mm以下の褐灰色粒	
258	須恵器	提瓶 口縁部～頸部	C0⑩ (7.9)	-	-	-	回転ナデ 自然釉	回転ナデ 自然釉	黒褐 (7.5YR3/1)	暗灰 (N3/)	堅緻	3mm以下の乳白色粒	須恵器の小片付着
259	須恵器	提瓶 体部	C2	-	-	-	カキ目 自然釉	回転ナデ	灰 (N4/)	灰 (N5/)	堅緻	2.5mm以下の灰白色粒	
260	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑫	11.2	6.2	(4.5)	回転ナデ ヘラ起こし ナデ 自然釉	回転ナデ 自然釉	黒 (N2/)	黒 (N2/)	堅緻	1mm以下の灰茶・黒灰色粒	
261	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C1⑬	11.9	7.7	(4.4)	回転ナデ ヘラ起こし ナデ 自然釉	回転ナデ 自然釉	黒 (N2/)	灰 (N4/)	堅緻	2mm以下の灰色粒	
262	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	B1⑬ (12.7)	(9.6)	4.3		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	精良	ヘラ記号
263	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑫ (13.4)	(10.0)	4.5		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ 仕上げナデ	暗灰 (N3/)	灰 (N4/)	堅緻	精良	
264	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑩	14.5	8.3	(4.9)	回転ナデ ヘラ起こし 自然釉	回転ナデ	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	2mm以下の白色粒	
265	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C1 (12.3)	(7.6)	4.1		回転ナデ ヘラ起こし 自然釉	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	精良	
266	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑧ (11.1)	(7.4)	3.7		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	3mm以下の白色光沢粒 5mm以下の白色粒	
267	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑫ (9.3)	(5.7)	5.5		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ	にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	焼成不完全 (生焼け)	精良	ヘラ記号
268	須恵器	高台付坏 胴部～底部	B1⑨	-	(7.0)	-	回転ナデ ヘラ起こし	風化著しい為調整不明	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	焼成不健全 (生焼け)	精良	風化
269	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑩ (10.2)	7.0	4.2		回転ナデ ヘラ起こし 自然釉	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N6/)	灰 (N5/)	堅緻	3mm以下の白色粒	
270	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	表土 (12.0)	(8.0)	4.4		回転ナデ ヘラ起こし 自然釉	回転ナデ 仕上げナデ 一部重ね焼きの痕	灰 (N5/)	灰 (N6/)	堅緻	3mm以下黒灰白色粒	
271	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	表土 (14.0)	(9.4)	4.8		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N6/)	堅緻	精良	
272	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C3 (12.4)	10.0	4.7		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ 仕上げナデ	暗青灰 (10BG4/1)	青灰 (10BG5/1)	堅緻	4mm以下の暗灰色粒	
273	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	表土 (12.9)	(9.6)	4.6		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ 仕上げナデ	暗青灰 (10BG4/1)	灰 (N5/)	堅緻	精良	
274	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C1⑥ (12.3)	(10.6)	4.1		回転ナデ ヘラ起こし 自然釉	回転ナデ 仕上げナデ	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (N7/)	堅緻	4mm以下の茶褐色粒	須恵器の小片付着
275	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑧ (15.4)	(12.0)	4.2		回転ナデ 回転ナデヘラ起こし	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N6/)	堅緻	6mm以下の灰白色粒	
276	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑧ (18.2)	(12.1)	7.1		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ	灰 (N6/)	灰 (10Y6/1)	堅緻	1mm以下の白灰・灰色粒	
277	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0④ (15.5)	(10.0)	4.9		回転ナデ ヘラ起こし 自然釉	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N6/)	堅緻	1mm以下の黒色粒	
278	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	B0 (13.6)	10.5	4.9		回転ナデ ヘラ起こし 自然釉	回転ナデ 仕上げナデ	灰 (N5/)	灰 (N5/)	堅緻	1mm以下の白色粒	
279	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑩ (17.0)	-	-		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ 仕上げナデ	灰白 (N7/)	灰白 (N7/)	やや軟	2mm以下の灰色・白灰色粒	風化
280	須恵器	高台付坏 口縁部～底部	C0⑩ (11.5)	7.4	4.4		回転ナデ	回転ナデ	灰 (N5/)	灰 (N6/)	堅緻	5mm以下の黒色粒 2mm以下の白色粒	
281	須恵器	高台付坏 胴部～底部	B1	-	6.6	-	回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ	灰 (N5/1)	灰 (N6/)	堅緻	4mm以下の灰白色粒	
282	須恵器	坏 口縁部～底部	B1 (13.2)	7.3	4.3		回転ナデ ヘラ起こし 仕上げナデ	回転ナデ フラ焼き痕	灰白 (10YR7/1)	灰白 (10Y7/1)	やや軟	1mm以下の黒・赤茶・灰褐色粒	
283	須恵器	坏 口縁部～底部	B1⑨ (12.7)	7.5	4.1		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ フラ焼き痕	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	焼成不完全 (生焼け)	精良	
284	須恵器	坏 胴部～底部	B3⑮	-	6.4	-	回転ナデ ヘラ起こし フラ焼き痕	回転ナデ フラ焼き痕	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	焼成不完全 (やが生焼け)	精良	
285	須恵器	坏 口縁部～底部	B1	12.8	7.5	3.8	回転ナデ ヘラ起こし 重ね焼きによる焼け方の違い	回転ナデ	灰白 (5Y7/1)	灰 (5Y6/1)	焼成不完全 (生焼け)	精良	
286	須恵器	坏 口縁部～底部	C0⑧ (12.2)	(8.2)	(4.7)		回転ナデ ヘラ起こし	回転ナデ	灰白 (10YR8/2)	灰白 (2.5YR8/2)	焼成不完全 (生焼け)	1mm以下の黒・灰白色粒	
287	須恵器	壺 底部	C4⑮	-	-	-	回転ナデ 自然釉	回転ナデ 自然釉	灰白 (N7/)	灰白 (N7/)	堅緻	7.5mm以下の灰白色粒	坏蓋付着
288	須恵器	長頸壺 底部付近	C3⑦	-	-	-	回転ナデ 仕上げナデ	回転ナデ 自然釉	灰 (N4/)	灰 (10Y6/1)	堅緻	2mm以下の灰白色粒	須恵器小片付着

第10表 出土陶磁器（古代）観察表

遺物番号	種別	器種部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		胎土調		産地	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
289	青磁	碗	A2	-	(4.9)	-	施釉	施釉	灰白 (N7/)	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	越州窯系
290	緑釉	皿	DS⑨	-	(5.9)	-	施釉 一部露胎	施釉	灰白 (N7/)	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	洛西
291	緑釉	皿	E5③	-	(6.9)	-	施釉	施釉	灰 (10Y5/1)	オリーブ灰 (10Y5/2)	オリーブ灰 (10Y5/2)	洛西
292	緑釉	碗	木杭-4 (C3⑩)	(12.9)	(6.8)	4.2	施釉	施釉	灰 (N6/0)	灰オリーブ (7.5Y5/2)	灰オリーブ (7.5Y5/2)	洛西

第3節 中世の遺構と遺物

1 掘立柱建物跡（S B）

遺物包含層下部の黄褐色土層面（第Ⅷ層）で300基程のピット群を検出した。そのうち調査区西部南側で掘立柱建物跡を4棟検出した。掘立柱建物跡同士及び他遺構との切り合い関係はない。各建物跡の方位は、ほぼ南北軸でいずれも座標北方向から2～7°の振れを有する。柱痕や根石、火所に伴う炭化物、焼土等は検出できなかった。柱穴から出土した遺物は小片で凶化していないが中世土師器の特徴をもつことから、建物跡の構築時期は同時期相当と考えられる。柱穴の埋土はいずれも黒褐色土である。遺構の規模等詳細については下表（第11表）にまとめた。

S B 1（第23図）

調査区西部の微高地西端に位置する。本遺跡で検出された建物跡の中では最も規模が大きい総柱建物跡で、主軸はN3°Wである。柱穴の掘形は円、楕円を主とするが、柱穴が幾重にも切り合っているものがあり、立て替えが頻繁に行われた可能性がある。柱穴の深さは検出面で32cm～52cmである。

S B 2（第24図）

S B 1を少し小型にした総柱建物跡で同遺構の南東隣に位置する。主軸はN7°Wで、床面の平面プランは桁がやや東方向に傾く平行四辺形を呈する。柱穴の掘形はSH1～SH12までよく似ており柱間が正確に設置されている。柱穴の深さは検出面で30cm～50cmである。

S B 3（第25図）

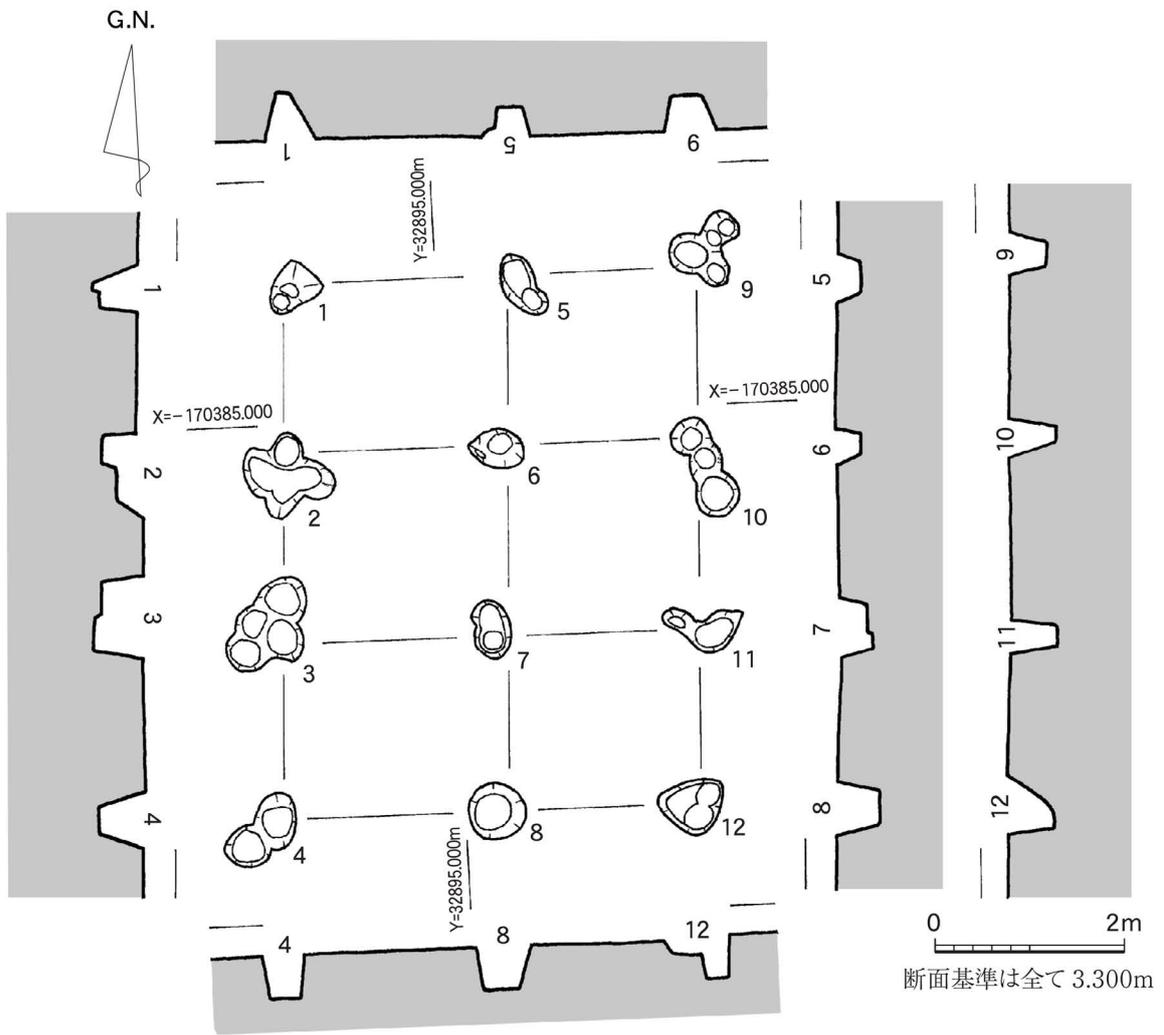
微高地の先端付近に建てられたS B 1・2の背後に位置し、調査区外にかかる南北軸の側柱建物跡と考えられる。主軸はN7°Eである。柱穴の掘形は楕円を主とするが、柱穴が幾重にも切り合っているものがあり、立て替えの可能性はある。桁行の柱間は1.82m～2.32m、梁行の柱間は1.76m～1.78mである。

S B 4（第26図）

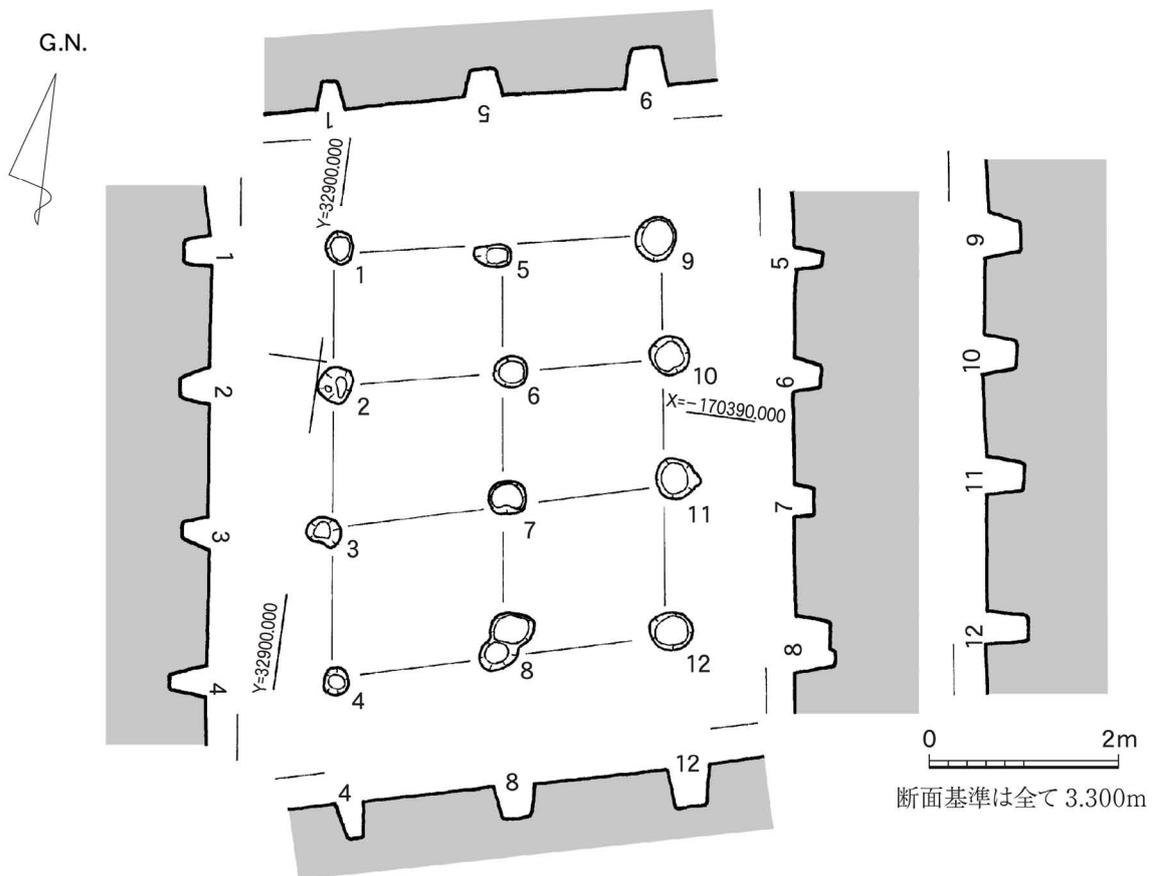
S B 3の東隣に位置し本遺跡で検出した最も小型の建物跡である。調査区外にかかる南北軸の側柱建物跡と考えられる。主軸はN2°Eで、掘形は楕円を主とする。桁行の柱間は1.71m～2.08m、梁行の柱間は1.24m～1.28mである。

第11表 掘立柱建物跡一覧表

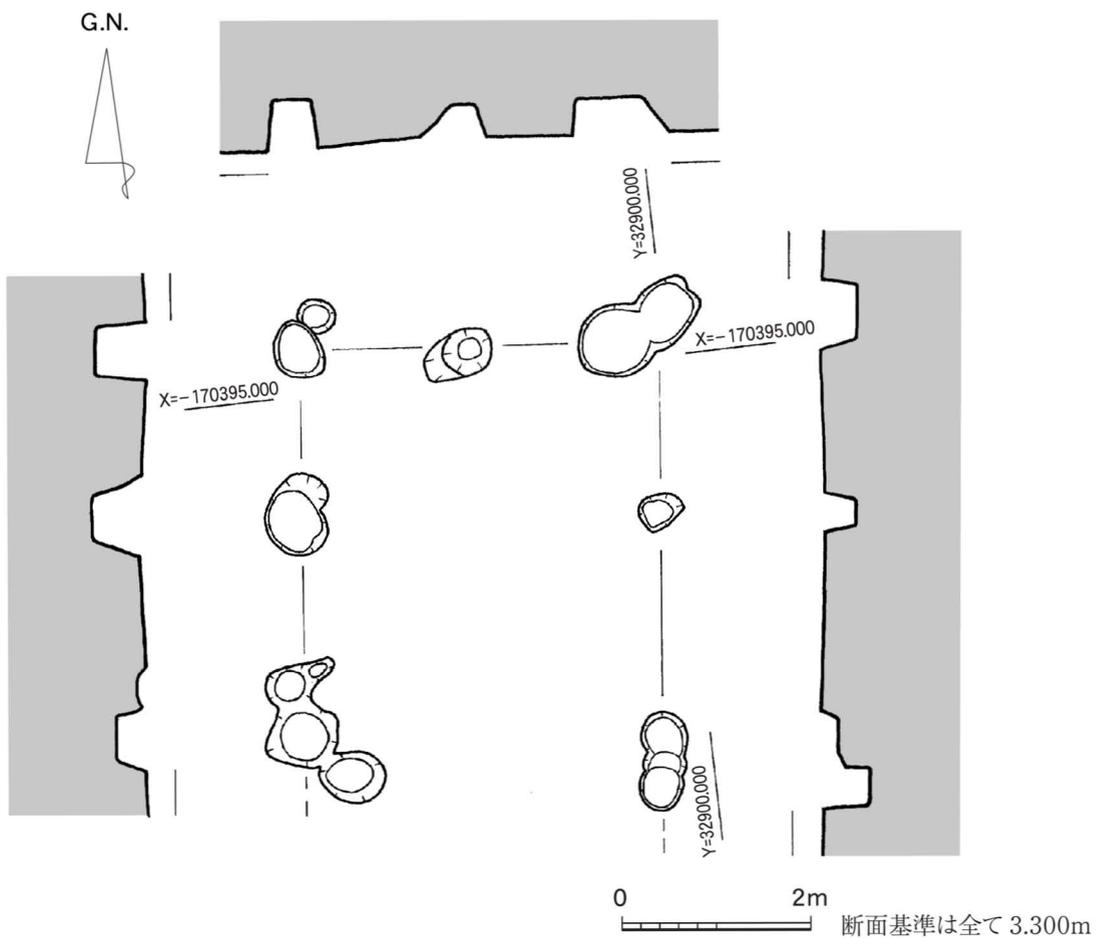
建物番号	位置	主軸	建物の種別	規模	桁行	梁行	長幅比	床面積
S B 1	B-1グリッド	南北	総柱建物	3間×2間	5.63～5.69m	4.37～4.43m	1.3	24.9m ²
S B 2	B・C-2グリッド	南北	総柱建物	3間×2間	4.19～4.53m	3.49～3.56m	1.2	15.4m ²
S B 3	C-1・2グリッド	南北	側柱建物	(2+α)間×2間	4.17m以上	3.54m(北側)	—	—
S B 4	C・D-2グリッド	南北	側柱建物	(2+α)間×2間	3.76m以上	2.52m(北側)	—	—



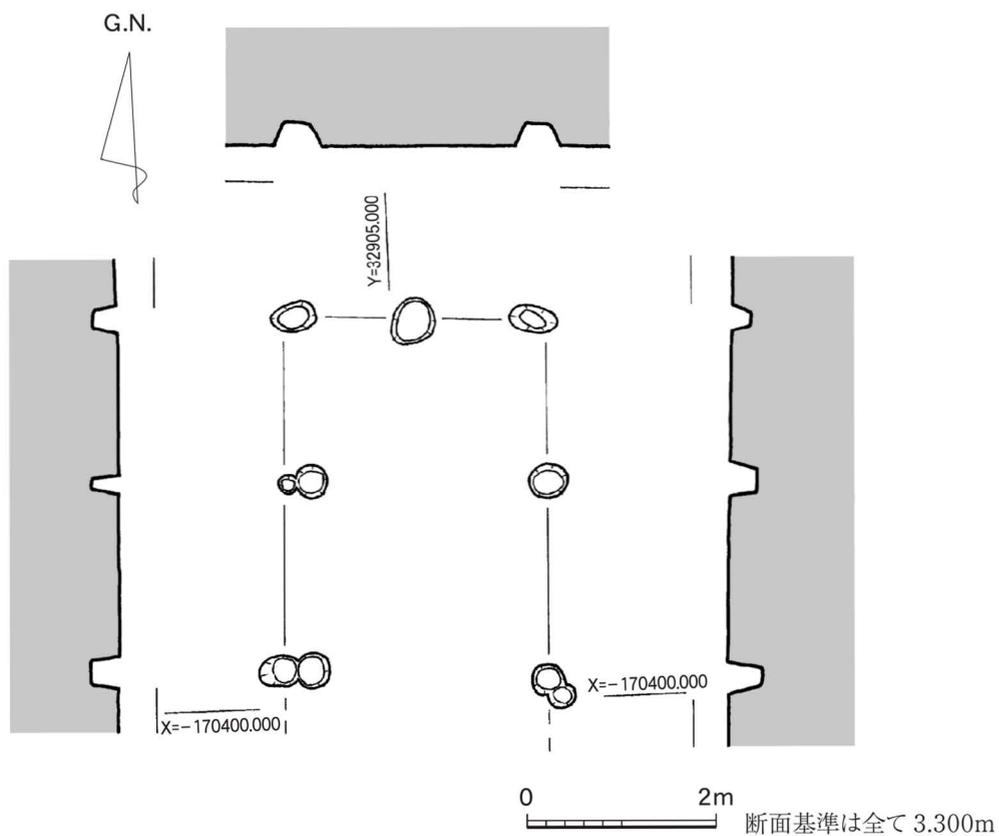
第23図 SB 1 実測図 (S = 1/80)



第24図 SB 2 実測図 (S = 1/80)



第25図 SB 3 実測図 (S = 1/80)



第26図 SB 4 実測図 (S = 1/80)

2 中世の遺物

(1) 土師器 (第27図)

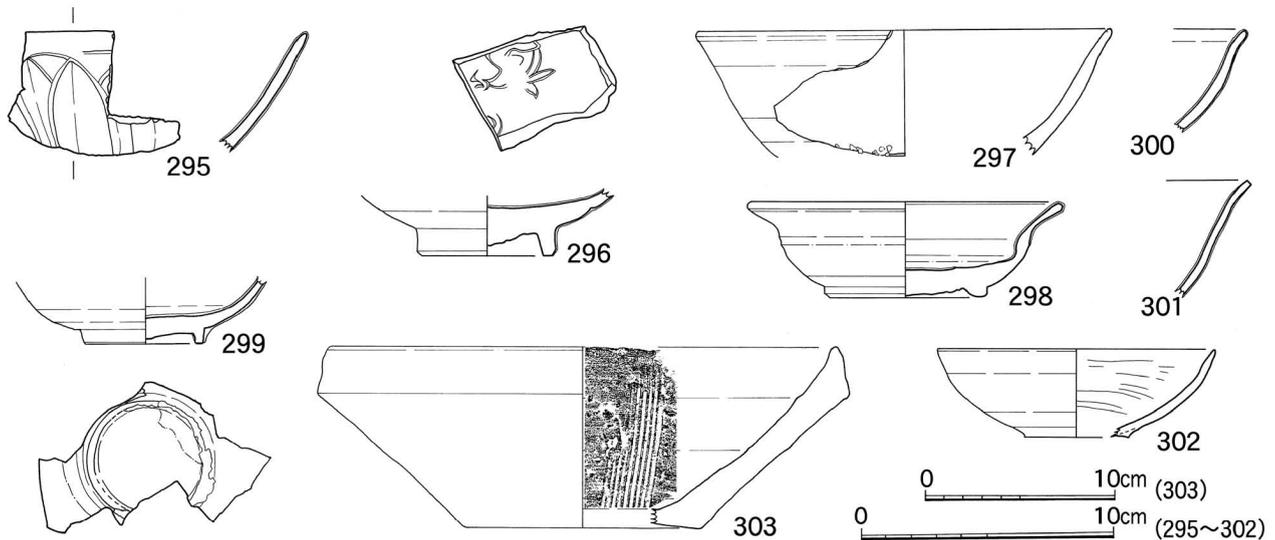
293、294は、いずれも底部の切り離し技法がヘラ切りの土師皿である。底部と体部の境はそれほど明確ではなく肉厚で、内湾気味の体部と先細りの口縁部をもつ。



第27図 中世土師皿実測図 (S = 1 / 3)

(2) 陶磁器 (第28図)

295～301は中国産の貿易陶磁器で、そのうち295～298は龍泉窯系青磁、299、300は華南系白磁である。295は外面に鎬蓮弁文、296は見込みに印花文が施される。297は外面の体部下位に砂目が付着する。重ね焼きの目跡か。298は見込みに蛇の目釉剥ぎが残る腰折れ皿である。299、300は13世紀の白磁碗である。301は口禿碗である。302は瓦器碗である。内面に暗文が施され、外面底部には形骸化した高台が薄く貼り付けられる。303は備前系の擂鉢で内面に9条1単位の擂目が認められる。



第28図 中世陶磁器実測図 (S = 1 / 4, 1 / 3)

第12表 出土土師器 (中世) 観察表

遺物番号	種別	器種 部位	出土位置	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		構成	胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
293	土師器	土師皿 口縁部～底部	C3	6.7	4.4	1.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	1mm以下の橙・灰色粒	ヘラ切り
294	土師器	土師皿 口縁部～底部	C3	6.3	4.7	1.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1mm以下の赤褐色粒	付着物? ヘラ切り 板目圧痕

第13表 出土陶磁器・瓦器 (中世) 観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		胎土調	色調		産地	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
295	表土	青磁	碗	-	-	-	緑釉 鎬蓮弁文	緑釉	灰白 (7.5Y7/1)	オリープ灰 (2.5GY5/1)	オリープ灰 (2.5GY5/1)	龍泉窯系	
296	C3	青磁	碗	-	(5.2)	-	施釉 露胎	施釉 印花	灰白 (10Y7/1)	明緑灰 (10GY7/1)	明緑灰 (10GY7/1)	龍泉窯系	
297	SH1	青磁	碗	(16.2)	-	-	緑釉 重ね焼き目跡?	緑釉	灰 (N5/)	オリープ灰 (10Y4/2)	オリープ灰 (10Y4/2)	龍泉窯系	
298	C0	青磁	碗	(12.1)	(6.0)	3.8	施釉 露胎 ヘラ切り 蛇ノ目高台?	施釉 釉剥ぎ	灰白 (10YR8/2)	明オリープ灰 (2.5GY7/1)	明褐色 (7.5GY7/2)	龍泉窯系	腰折れ皿
299	B3⑨	白磁	碗	-	4.7	-	施釉 露胎 (釉のたれが一部みられる)	施釉	浅黄 (2.5Y7/4)	明オリープ灰 (5GY7/1)	明オリープ灰 (5GY7/1)	華南系	
300	C0⑩	白磁	碗	-	-	-	施釉	施釉	灰 (5Y6/1)	灰オリープ (5Y6/2)	灰オリープ (5Y6/2)	華南系	
301	C0⑩	白磁	碗	-	-	-	施釉 口禿	施釉	灰白 (N7/)	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	中国	
302	C2⑮	瓦器	貼付高台付碗	(10.9)	(4.1)	3.5	回転ナデ 指ナデ 指頭痕 高台付 ナデ	回転ナデ 暗文	-	灰 (N5/)	灰 (N6/)	泉?	
303	C4⑮	陶器	擂鉢	(26.4)	(12.4)	9.6	ナデ 横方向のナデ 自然釉	横方向のナデ 樽描による 9条の擂目	灰赤 (2.5YR4/2)	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	にぶい赤褐 (2.5YR4/3)	備前系	部分的に鉄分? 付着

第4節 近世・近代の遺構と遺物

1 杭列遺構

調査区中央部付近で検出された4列の杭列遺構は、SE1・2及び旧河川跡に付設された遺構と考えられる。しかし、それぞれの杭列遺構付近の出土遺物は流れ込みの様相を呈しており、遺構の構築時期の特定が困難であった。そこで、放射性炭素¹⁴C年代測定（AMS法）を行ったところ、いずれも近世以降の遺物であることが判明した。

1号杭列遺構（第29図）

B・C-3グリッドで検出した。旧河川跡に直交するように付設されており2列構造である。流路の上方に5本、下方に4本検出したが2列の木杭は相対するよう打ち込まれていた。検出面は黄灰色土である。また、④層のオリブ灰色土はSC1やSB1～4が検出された硬化面であるが、木杭の先端がそこまで達していないものもあることから、④層上に堆積した層に対して打ち込まれたものと考えられる。木杭aと木杭b・c付近に横倒しになった木片が確認された。特に木杭b・c付近の木片は木杭cの流路上方にあり、堰の横木の役割を果たしていた可能性がある。遺物（第32図）304の樹種はスギ（スギ科）である。半截した樹木をさらに分割して加工してある。上部は一部欠損しているが現存長よりそれほど長くはなかったと思われる。また、最大幅から半截前の樹木の径は19cm以上と推定される。杭は先端に向けて鋭く尖らせているが、加工面のうち最大のもの長軸が20cm程あることや一部刃が入り込んだ痕跡があることから、重量のある鋭い刃で加工したことが分かる。

2号杭列遺構（第30図）

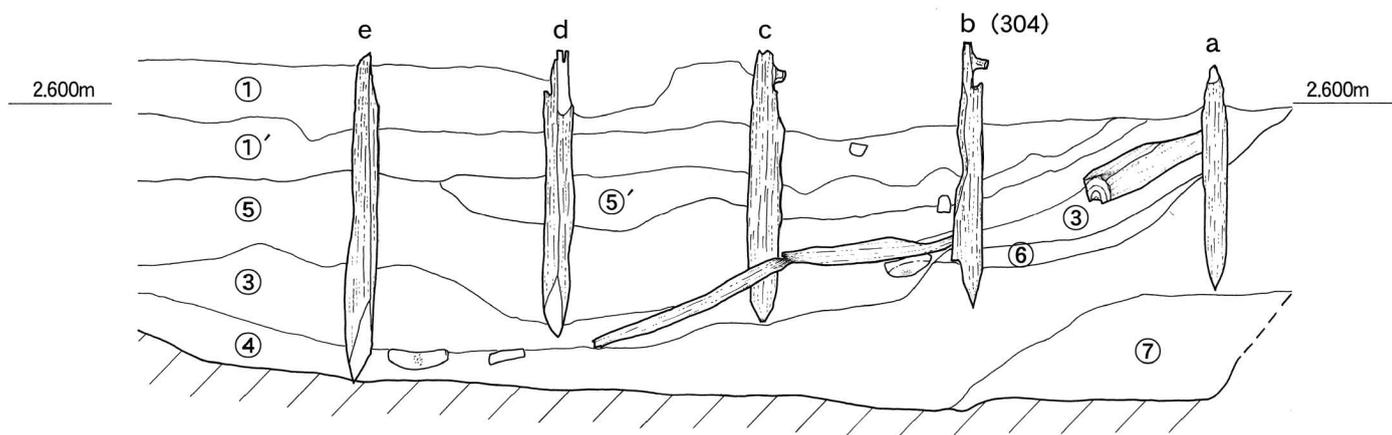
C-3グリッドで検出した。1号杭列遺構の旧河川下流に位置する一列構造の遺構で、14本の木杭が地面に対してほぼ垂直に打ち込まれていた。木杭間は1号杭列状遺構に比べて狭くなるが、特にc・d間で最大に開く。検出面や検出状況は1号杭列遺構とほぼ同じであるが、やはり硬化面である④層上に堆積した層に対して打ち込まれたものと考えられる。横木や水溜用の樹皮等は確認できなかった。遺物（第32図）305の樹種はスギ（スギ科）である。半截した材をさらに半截した1/4角の杭である。上部は欠損しているが、中位程から上部に向けて細くなることから現存長よりそれほど長くはないと思われる。杭の先端の加工痕は304に比べ短くなるが、加工の仕方は非常に似ている。

3号杭列遺構（第31図）

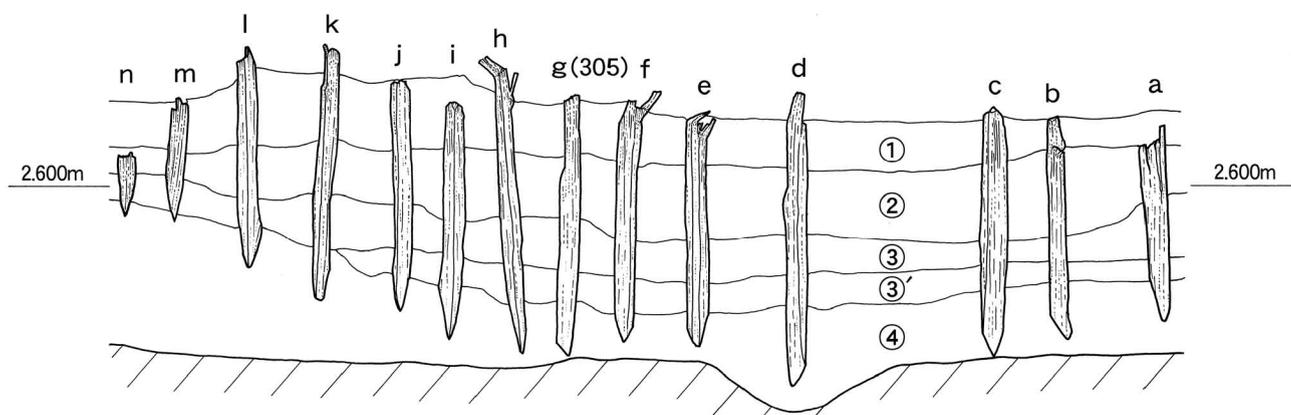
C-3・4グリッドで検出した。1列構造の遺構でSE2の流路に対して垂直方向に付設されている。木杭は9本現存していたが、SE2の南側は検出できなかったことから完全にSE2を堰き止めるものではないかもしれない。木杭間はほぼ2号杭列遺構と同じである。検出面は②層であるが、硬化面である④層に対して現存する木杭の1/3以上が打ち込まれている。横木や水溜用の樹皮等は確認できなかった。遺物（第32図）306は樹種がスギ（スギ科）の1/4角の杭である。上部は著しく欠損しているが他の木杭の長さが同程度であることや上部端に打たれたような痕跡が残ることから、当時のものとほぼ現存長は変わらないものと推察される。杭の先端は全面から加工され鋭くなっている。

4号杭列遺構 (第34図)

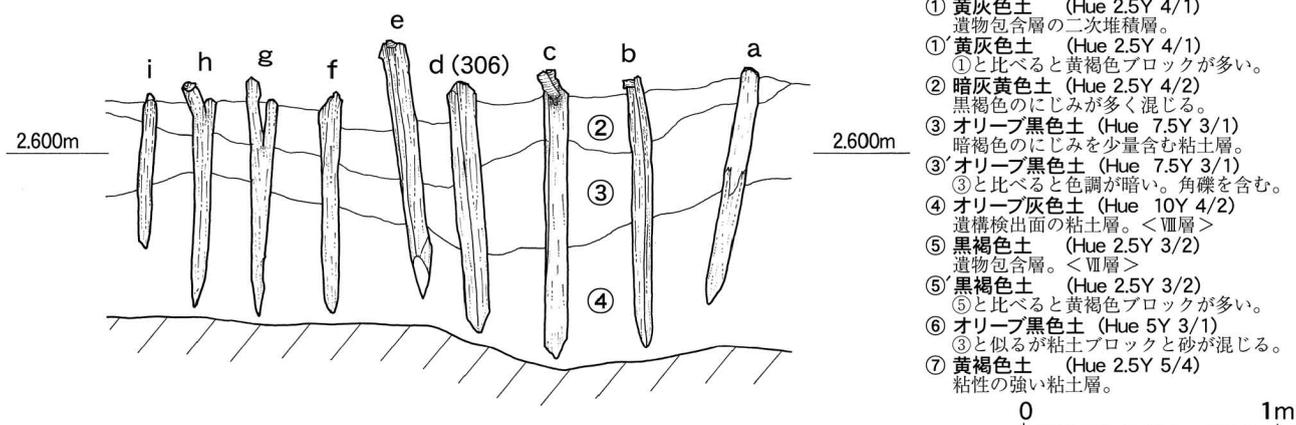
1列構造の遺構でSE1の流路に平行して付設されていた。SE1の北側上面から20cm程離して打ち込まれていたが南側には検出できなかった。また、B-3グリッドでのみ検出した。1.7m程の幅で柵列状に並ぶ木杭は5本遺存していた。遺物(第32図)307の樹種はシキミ(モクレン科)で芯持ち材の先端を尖らせており、本体はほぼ全面にわたって本来の樹皮を残している。上部は欠損している。先端部は杭状に加工しているが、中心部から放射状円錐形に整えるのではなく、1/2面を手斧状の工具で削り取っている。手斧痕の最大幅は2.7cm程で、長さは2.5~4.2cm程ある。



第29図 1号杭列遺構実測図 (S = 1/30)



第30図 2号杭列遺構実測図 (S = 1/30)

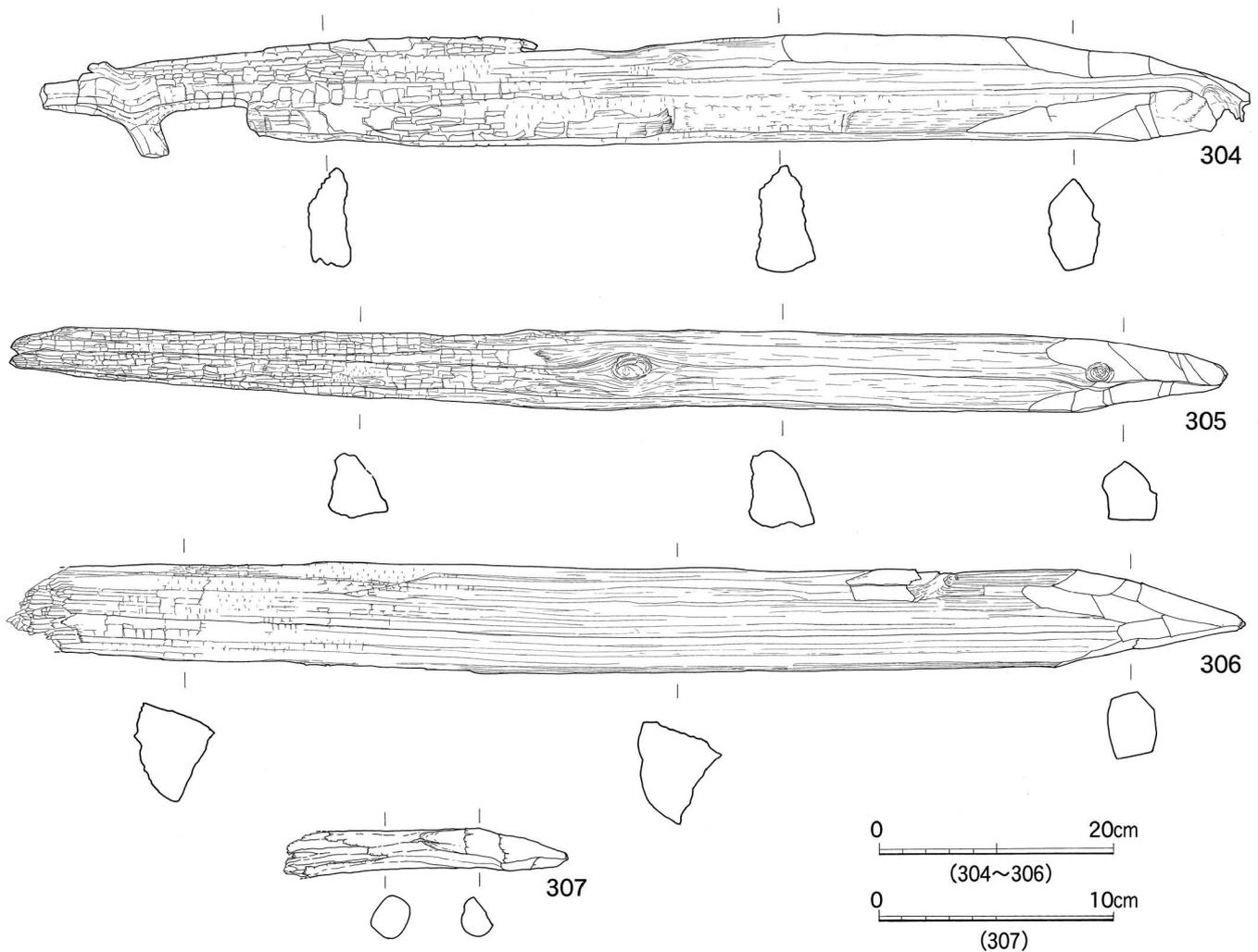


第31図 3号杭列遺構実測図 (S = 1/30)

【杭列遺構土層注記】

- ① 黄灰色土 (Hue 2.5Y 4/1)
遺物包含層の二次堆積層。
- ①' 黄灰色土 (Hue 2.5Y 4/1)
①と比べると黄褐色ブロックが多い。
- ② 暗灰黄色土 (Hue 2.5Y 4/2)
黒褐色のにじみが多く混じる。
- ③ オリーブ黒色土 (Hue 7.5Y 3/1)
暗褐色のにじみを少量含む粘土層。
- ③' オリーブ黒色土 (Hue 7.5Y 3/1)
③と比べると色調が暗い。角礫を含む。
- ④ オリーブ灰色土 (Hue 10Y 4/2)
遺構検出面の粘土層。<Ⅶ層>
- ⑤ 黒褐色土 (Hue 2.5Y 3/2)
遺物包含層。<Ⅶ層>
- ⑤' 黒褐色土 (Hue 2.5Y 3/2)
⑤と比べると黄褐色ブロックが多い。
- ⑥ オリーブ黒色土 (Hue 5Y 3/1)
③と似るが粘土ブロックと砂が混じる。
- ⑦ 黄褐色土 (Hue 2.5Y 5/4)
粘性の強い粘土層。

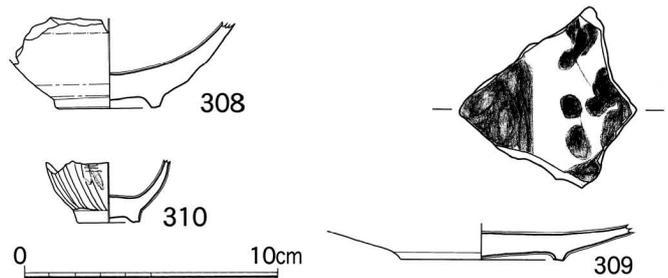
0 1m



第32図 木杭実測図 (S = 1 / 5 , 1 / 6)

2 近世の遺物 (第33図)

308は唐津焼の陶器碗である。灰釉が施され外面は腰部以下が露胎となる。309は伊万里焼の染付皿である。内面に描かれているのは唐人図か。310は伊万里焼の小杯である。外面に鎬彫り福寿文の染付を施す。



第33図 近世陶磁器実測図 (S = 1 / 3)

第14表 出土木杭 (近世～近代) 観察表

遺物番号	出土位置	用途	樹種	現存での法量 (cm)			加工法	
				最大長	最大幅	重量	加工部の長さ	加工面数
304	B・C-3グリッド 1号杭列遺構 南から2本目	堰か	スギ (スギ科)	102.8	9.5	831.8	24.3	12
305	C-3グリッド 2号杭列遺構 東から7本目	堰か	スギ (スギ科)	103.2	6.7	778.2	18.9	12
306	C-3グリッド 3号杭列遺構 南から4本目	堰か	スギ (スギ科)	105.8	9.1	1118.7	19.0	12
307	B-3グリッド 4号杭列遺構 東から2本目	柵列	シキミ (モクレン科)	20.1	3.8	49.8	12.5	5

第15表 出土陶磁器 (近世) 観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		産地	備考	
				口径	底径	器高	外面	内面	胎土調	外面			内面
308	B3⑤	陶器	碗	-	(4.1)	-	灰釉 回転ナデ ヘラ削り	灰釉	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	肥前	
309	C4⑬	染付	皿	-	(6.4)	-	露胎 施釉	施釉 唐人図か	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (5GY8/1)	灰白 (5GY8/1)	伊万里	
310	木杭-4 (C3⑯)	磁器	小杯	-	2.5	-	鎬彫り 福寿文	施釉	灰白 (N8/)	明緑灰 (10G7/1)	明緑灰 (10G7/1)	伊万里	

第5節 時期不明の遺構と遺物

1 溝状遺構 (SE)

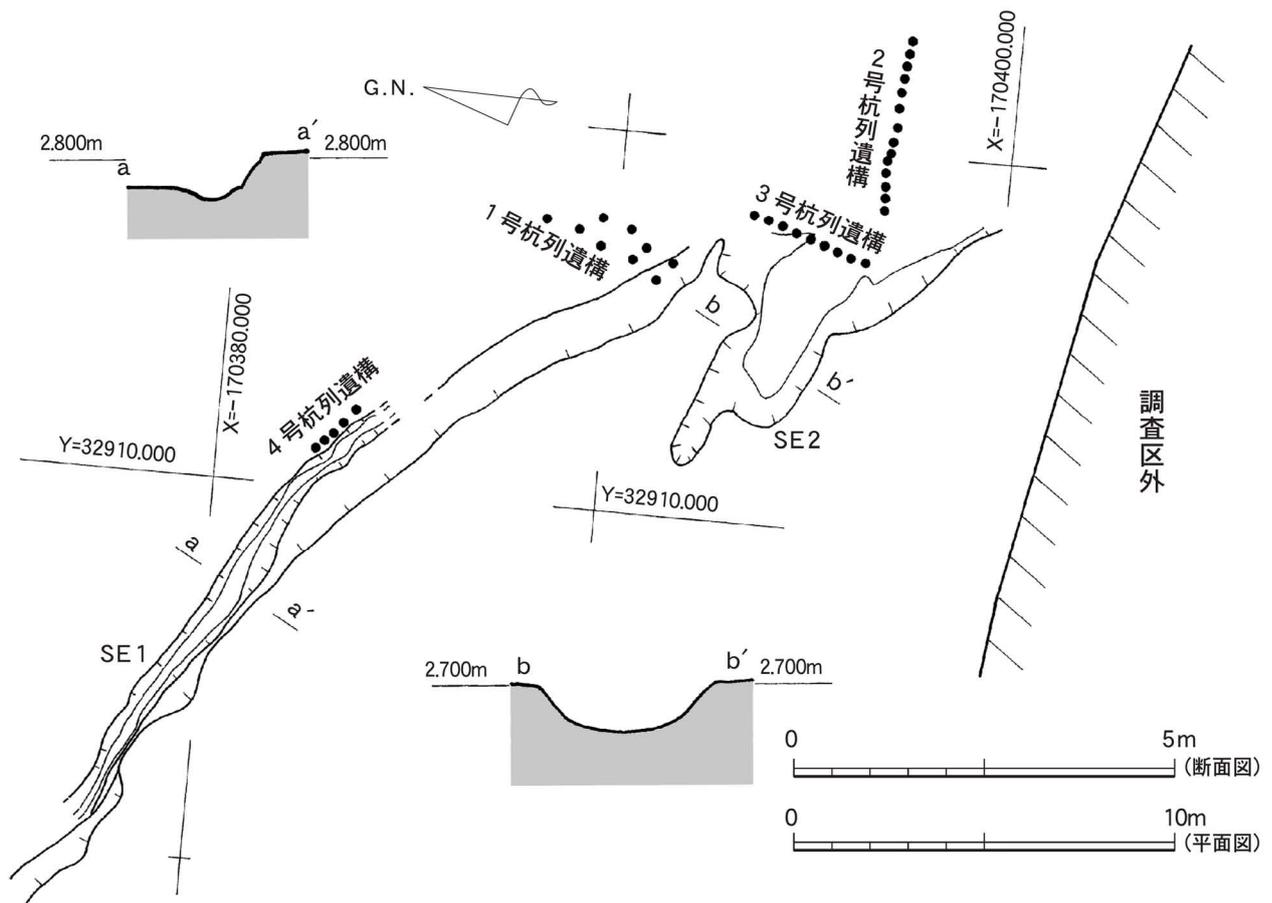
調査区中央部付近に、溝状遺構を2条検出した。それぞれに付設された杭列は¹⁴C年代測定により近世から近代の時期特定が得られているが、遺物は流れ込みの様相を呈しており、遺構の構築時期の特定は困難であることからここでは時期不明の遺構として取り扱う。

SE 1 (第34図)

SE 1は検出面で最大幅1.1m、深さ20cm、長さ13mを測る溝で、調査区西部の微高地と平行して直線的に延びる。発掘調査終了直前に検出されたため全容を明らかにすることはできなかったが、調査区西端でも確認できたので、さらに6.5mほど規模を大きくして調査区外へと延びていく。埋土は中近世の遺物包含層の二次堆積と考えられる灰色土 (Hue 5Y 5/1) である。遺構の南東端、北側には溝状遺構に平行して近世に構築された杭列遺構が並ぶことから、本遺構はこれ以前に構築されたものである。

SE 2 (第34図)

SE 2は検出面で最大幅4.5m、深さ60cm、長さ6.5mを測る溝で、調査区西部の微高地東端から低地に向かって延びる。埋土はオリーブ黒色の粘土でレンズ状堆積をしていた。また、遺構内からかなり時期差のある遺物が出土しており、構築時期の特定は困難であるが、流路の出口方向に近世から近代の間に構築された杭列遺構が並ぶことから、本遺構はこれ以前に構築されたものである。



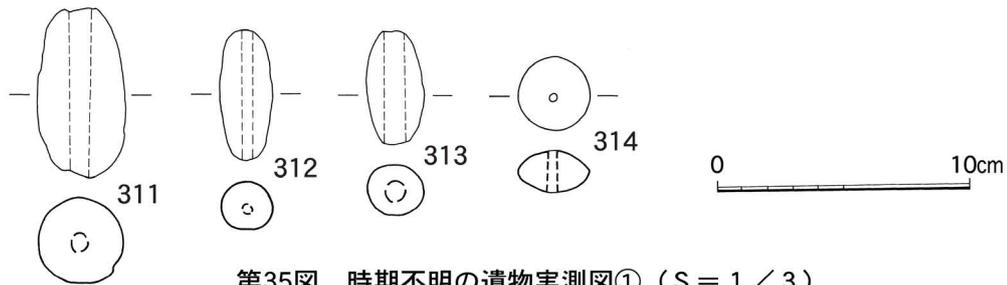
第34図 SE 1・SE 2 実測図(平面図：S = 1/200、断面図：S = 1/100)

2 時期不明の遺物

本遺構では、これまで述べてきた遺物の他に、包含層等から時期を特定しかねる遺物が出土している。図化した遺物の器種ごとの内訳は、土錘3点、紡錘車1点である。また、石器では石斧1点、磨製石器5点、スクレーパー1点、砥石10点、敲石・凹石11点、石錘1点である。石斧は縄文時代に属するものと思われるが、その他のものは時期の特定できる遺構等から出土したものではないこと、土錘や紡錘車とともに礫石器等は継続的に存続するものがあることから、時期を特定できないものとして一括してここで取り扱う。

(1) 土錘・土製紡錘車 (第35図)

311～313は土錘である。いずれも土師質で筒状をしている。311は重量が70.1gと大型のもので、胴部中央部に最大径をもつがそれほどふくらまない。312、313は中型のもので312は細身だが313はやや肉厚となる。314は紡錘車である。算盤玉状で中央に1孔、軸を通すための孔を施している。



第35図 時期不明の遺物実測図① (S = 1 / 3)

(2) 石器

石斧 (第36図)

315は打製石斧の刃部もしくは基部か。頁岩ホルンフェルスを利用石材とし、著しく風化しているが自然面を残した剥片を素材にして加工を施している。

磨製石器 (第36図)

利用石材はすべて砂岩である。316～318は細長い棒状の側面を縦長に磨っている。それぞれに磨った面の数により断面の形が変わるが先端はさらに磨られて尖る。319は方柱石材の両端を両刃に仕上げている。320は扁平な石材の一端のみを両刃に仕上げている。

スクレーパー (第36図)

321は、横長の頁岩剥片を素材とし、縁周に加工を施して弧状の刃部を形成するものである。

砥石 (第36図)

322～327は扁平な礫を利用しており、1面以上に使用痕が確認される。328は方柱状の陶石を全面にわたって使用している。329～331は有溝砥石である。断面がVまたはU字状の溝を有する。

敲石・凹石 (第37図)

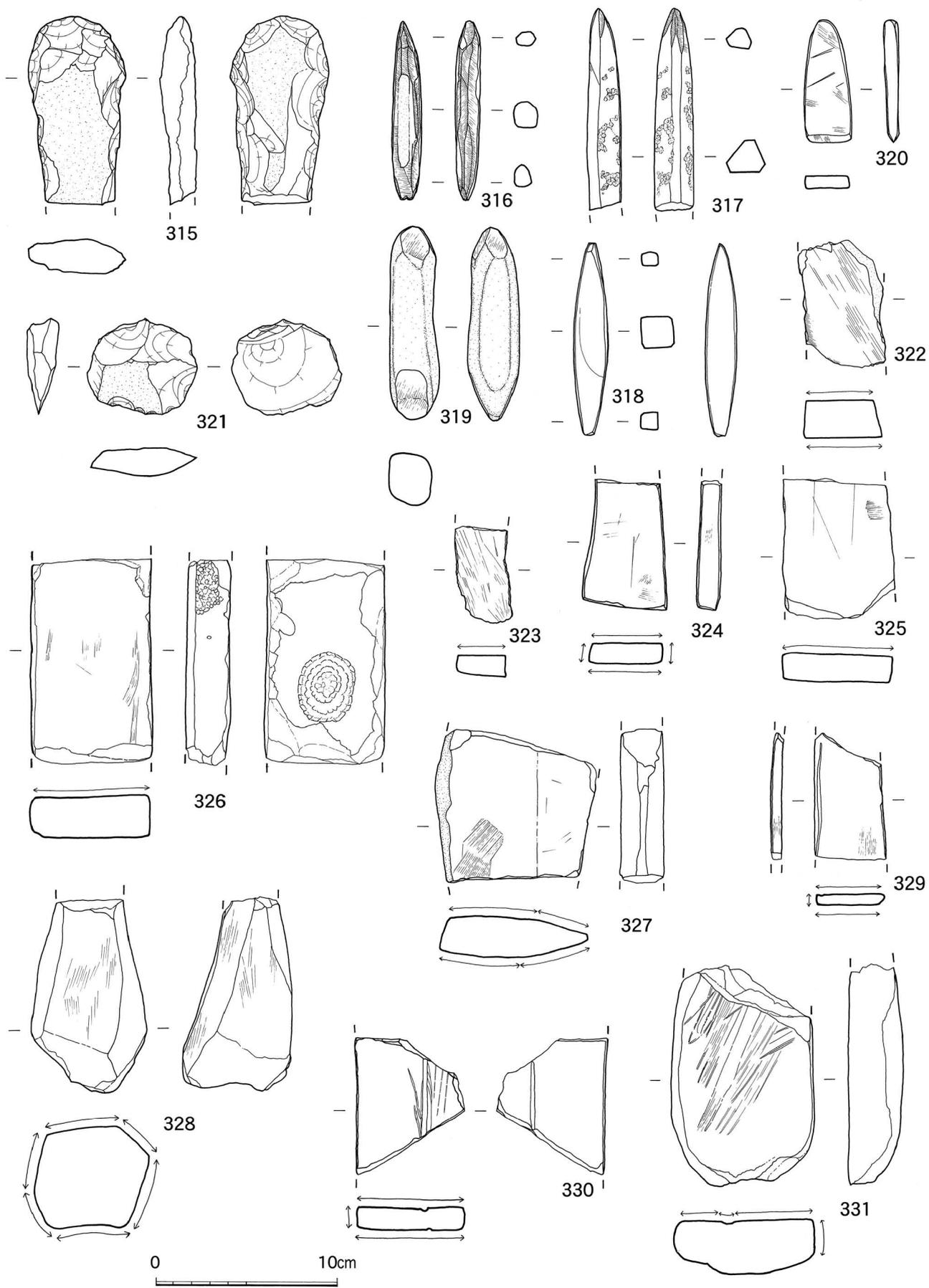
敲石・凹石Ⅰ類：敲打痕をもつもの (332～336)

敲石・凹石Ⅱ類：敲打痕と敲打による窪みをもつもの (337～341)

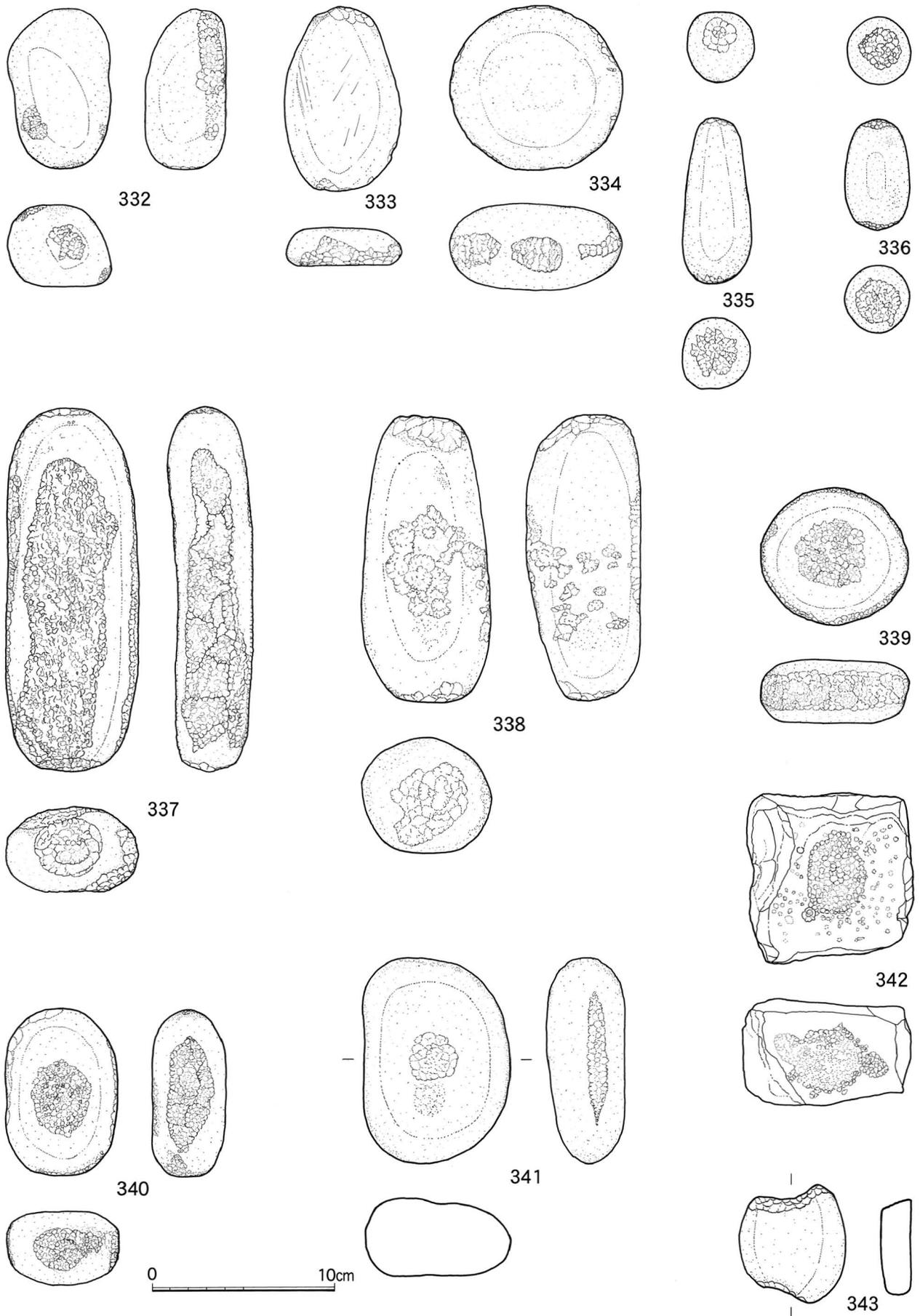
敲石・凹石Ⅲ類：敲打による窪みをもつもの (342)

石錘 (第37図)

343は扁平な礫の長軸を打撃による剥離で抉りをつくり出した、いわゆる礫石錘である。



第36図 時期不明の遺物実測図② (S = 1 / 3)



第37図 時期不明の遺物実測図③ (S = 1 / 3)

第16表 出土土錘・紡錘車計測表

遺物番号	出土場所	最大長 (cm)	最大幅 (径: cm)	最大厚 (cm)	穿孔径 (cm)	重量 (g)
311	B1	6.8	3.5	3.4	0.8	70.1
312	SH1	5.2	2.1	2.0	0.5	21.5
313	C3⑩	4.6	2.3	2.0	0.9	18.6
314	C2⑦	2.9	2.9	1.7	0.3	12.1

第17表 出土石器計測表

遺物番号	種別	出土地点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
315	打製石斧	B2	10.1	5.4	2.0	143.6	頁岩ホルンフェルス	風化
316	磨製石器	C0⑩	9.9	1.5	1.5	32.8	砂岩	
317	磨製石器	C0⑩	(11.2)	2.2	1.9	61.1	砂岩	
318	磨製石器	B2	10.7	1.8	1.8	53.1	砂岩	
319	磨製石器	C3⑩	10.7	2.8	3.0	125.7	砂岩	
320	磨製石器	C2⑬	6.9	2.7	0.9	23.0	砂岩	
321	スクレーパー	C3⑦	5.4	5.9	1.6	56.9	頁岩	風化
322	砥石	C3⑪	(7.1)	(4.8)	2.1	130.8	頁岩	
323	砥石	C2⑥	(5.4)	(3.2)	1.3	28.5	緑色頁岩	
324	砥石	SH47	(7.2)	4.7	1.3	78.0	砂岩	
325	砥石	C3⑥	(7.8)	6.2	1.6	144.9	砂岩	
326	砥石	B1	(11.4)	6.8	2.5	406.9	砂岩	
327	砥石	C3⑦	(8.6)	8.9	2.3	263.7	砂岩	
328	砥石	B17	10.8	6.4	5.6	452.0	陶岩(流紋岩質凝灰岩)	
329	砥石	C47	(7.1)	4.0	0.6	33.9	砂岩	
330	砥石	C3	(7.6)	(6.1)	1.4	88.5	砂岩	
331	砥石	SE2	(12.3)	7.9	3.1	416.5	泥岩	
332	敲石	B3⑨	8.8	5.8	4.5	339.1	砂岩	
333	敲石	C1⑥	10.1	6.4	2.2	204.9	砂岩	
334	敲石	C1⑥	9.0	9.5	4.8	601.5	砂岩	
335	敲石	C2	9.2	3.7	3.9	189.4	砂岩	
336	敲石	B2③	6.1	3.6	3.7	113.0	砂石	
337	凹石	C0⑩	19.8	7.3	4.7	1146.4	砂岩	
338	凹石	C0④	15.7	7.1	6.4	1059.8	砂岩	
339	凹石	C3⑮	7.6	8.2	3.5	333.7	砂岩	
340	凹石	C1⑨	9.1	6.3	4.1	385.3	砂岩	
341	凹石	B3E	11.2	8.0	4.3	640.3	砂岩	
342	凹石	C0⑩	9.6	9.2	5.9	721.1	砂岩	
343	石錘	C2	6.5	5.9	1.7	85.4	砂岩	

第IV章 まとめ

本宮遺跡は、弥生時代から近世・近代にかけての遺跡である。市木川の氾濫原に位置し、大量の遺物が出土した。本遺跡の遺構・遺物は、この地域の人々の生活や果たしてきた役割を知る上で大変貴重である。以下いくつかの項目について検討を加え、本宮遺跡のまとめとしたい。

第1節 遺構

1 掘立柱建物跡

本遺跡の遺構検出面に4棟の掘立柱建物跡が検出された。掘立柱建物跡の構築時期については不確定要素が大きい、規模や柱穴の埋土等が似ていること、いずれも南北軸とする主軸方向が2～7°の振れの中に収まることから同時期あるいは近い時期の構築であると考えられる。旧市木川沿いの微高地におけるこの4棟の位置関係は、穀物倉庫など重量のかかる建物に用いとされる総柱建物跡が旧市木川のとりに建ち、その背後に管理棟的な役割をもつと考えられる側柱建物跡がひかえる。また、柱穴が幾重にも重なって検出されたことは、何度も立て替えられた可能性を示唆する。これらのことは推測の範囲を超えないが、普段は穏やかな水面を見せる河川における盛んな物流と、現在まで続く氾濫との闘いなど、この地域に暮らした人々の逞しい生活を想像させる。また、掘立柱建物跡が検出されたのは微高地の縁辺部であることやSB3・4が調査区外に延びていることなどから、集落の規模はさらに拡大して展開されていた可能性がある。

2 杭列遺構

本調査中央部付近で検出した4列の杭列遺構は、SE1・2及び旧河川跡ないしはより大きな溝状遺構に付設されたものと考えられるが、遺構の構築時期の特定は困難であった。そこで生木資料をもとに加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定と樹種同定を行った。その結果、304の木杭では100±30年BP（1σの暦年代でAD1690～1730, 1810～1920年）、307の木杭では240±30年BP（同AD1650～1660年）の年代値が得られた。なお、304では放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の暦年代校正曲線が不安定なためである。また、樹種は304がスギ（スギ科）、307がシキミ（モクレン科）と同定された。いずれも遺跡周辺でよく見られる樹種である。

杭列遺構のうち、1～3号杭列遺構に使用された杭は同じ樹種のスギ材を用い、先端の加工の状況も同じであることから同時期か非常に近い時期に構築され、関連した遺構である可能性が強い。また、1～3号杭列遺構は旧河道の流れを堰き止めず、流れの弱い岸付近に打ち込まれている。そして、流路に対して直交した形をとる。検出された杭列遺構のうち最も上流側にある1号杭列遺構は、旧河道の流路に対して直交の位置から岸に傾く形で打ち込まれており、流れに対して内湾した形の二重構造をもつ。

これらの遺構がどのような役割を果たしていたかは残念ながら解明できなかったが、今後の類例を待ち、新たな展開を迎えることを期待したい。

第2節 遺物

(1) 土師器

○ 成川式土器

成川式土器は南部九州の弥生時代後期から古墳時代にかけての土器様式の総称である。成川式は非常に在地色が強く、古墳時代にいたっても弥生土器の伝統を色濃く残す土器様式である。成川式土器の編年については、中村直子により示された「中津野式→東原式→辻堂原式→笹貫式」という編年案（中村1987）が最も受け入れられており、編年に関する研究はほぼ落ち着いた状態にある。本遺跡で出土した甕Ⅰ類は東原式、甕Ⅱ類は辻堂原式、甕Ⅲ類は笹貫式に相当すると考える。成川式土器のうち特に笹貫式については、5～6世紀とするものから7～8世紀とするものまで様々な説があるが、多々良編年（多々良1981）では6世紀に位置づけており、中村は須恵器の供伴例がほとんどないことから6世紀後半（中村1987）を下限としている。

本遺跡から出土した膨大な土師器のうち、辻堂原式や笹貫式に相当する土器が非常に多く出土したことから、本遺跡付近にはこの時期に大きな集落が控えていたことが考えられる。また、隣県の始良町保養院遺跡や喜入町西船子遺跡から本遺跡出土の土器に非常によく似たものが出土していることは、当地が他地域、特に鹿児島県域との豊かな交流を行っていたことを現在に伝えている。

○ ミニチュア土器

古墳時代中・後期の祭祀遺跡ではミニチュア土器が集中して出土することがある。本遺跡では、手捏ね土器32点を含むミニチュア土器が43点出土した。奈良時代、本遺跡付近に市木神社が鎮座していたという言い伝えがあり、現在でも「本宮」という字名が残る。これらのことから、それ以前でも信仰に関わるような土地であった可能性は十分あり、水辺の祭祀が行われていたことを示唆するものかもしれない。

(2) 須恵器

本遺跡では、焼成不完全であったり著しく歪んでいたりする須恵器が数多く出土している。焼成不完全なものは12点、著しく歪んでいるものは2点図化した。一方、須恵器片が付着した土器も7点（206、222、223、258、274、287、288）出土している。特に287は甕の底部片と思われるものに、坏蓋の返りが2個体ほぼ平行に付着しているものである。これは底部片の割れ断面に自然釉がかからないことから、焼き台として焼成前の甕底部に接地していた坏蓋片が自然釉によりそのまま付着したものではないかと思われる。坏蓋の返りが破損しているのは、流通させる過程で、はつられたことに起因するものかもしれない。一方、破損した底部片上に坏蓋のをせ、坏蓋の返り部分が対象物に接面する焼き台であることも考えられたが、その場合、底部片の安定感がそれほどないことから前者の可能性の方が高いと推測される。288は長頸壺の底部付近と思われるが坏蓋もしくは坏身の口縁部が貼り付いている。しかも付着物の周辺は重量が加わったことにより窪んでいることから焼き入れの際、焼き台の坏蓋が付着し、後にはつられたと考えられる。また、206は径が8 cm程度の円形須恵器片が付着しており、その周辺は重量により窪んでいる。これは明らかに重ね焼きをした結果だと推察される。これらのことは、当時貴重品であった須恵器製品が完全品ではなくても流通していたことを示唆している。

【参考文献】

- | | | |
|-------------|------|--|
| 多々良友博 | 1981 | 『成川式土器の検討』鹿児島考古 第15号 |
| 河口貞徳 | 1981 | 『新南九州弥生式土器集成』鹿児島考古 第15号 |
| 日高次吉 | 1983 | 『宮崎県の歴史』山川出版社 |
| 鹿児島県教育委員会 | 1984 | 『外川江遺跡・横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第(30) |
| 喜入町教育委員会 | 1984 | 『西船子遺跡』鹿児島県揖宿郡喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) |
| 中村直子 | 1987 | 『成川式土器再考』鹿大考古 第6号 |
| 北九州市教育文化事業団 | 1991 | 『貫川遺跡4』北九州市埋蔵文化財発掘調査報告書第104集 |
| 鹿児島県教育委員会 | 1994 | 『保養院遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書11 |
| 中世土器研究会 | 1997 | 『概説 中世の土器・陶磁器』 |
| 日本貿易陶磁研究会 | 1998 | 『貿易陶磁研究』No.1～No.5 |
| 太宰府市教育委員会 | 2000 | 『太宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集 |
| 乗岡実 | 2000 | 『備前焼播鉢の編年について』第3回中近世備前焼研究会資料 |
| 九州近世陶磁学会 | 2000 | 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念 |
| 島根県教育委員会 | 2001 | 『西川津遺跡Ⅶ』朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第12冊 |



調査前の本宮遺跡と市木 5 号墳



市木 5 号墳上の「宮跡」碑



遺物包含層



遺物出土状況 (C-1グリット付近)

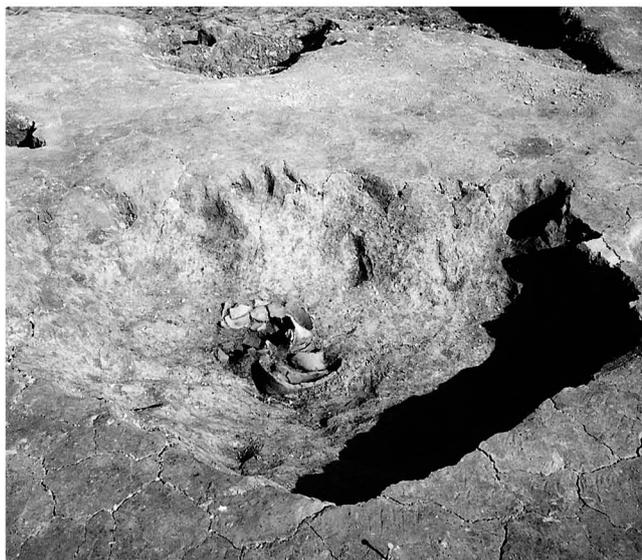


遺物出土状況 (C-1グリット付近)



遺物出土状況 (C-3グリット)

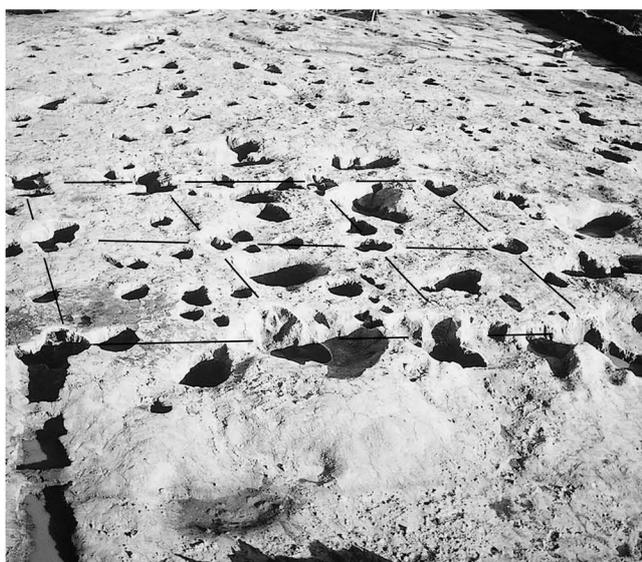
図版 2



SC 1 遺物出土状況



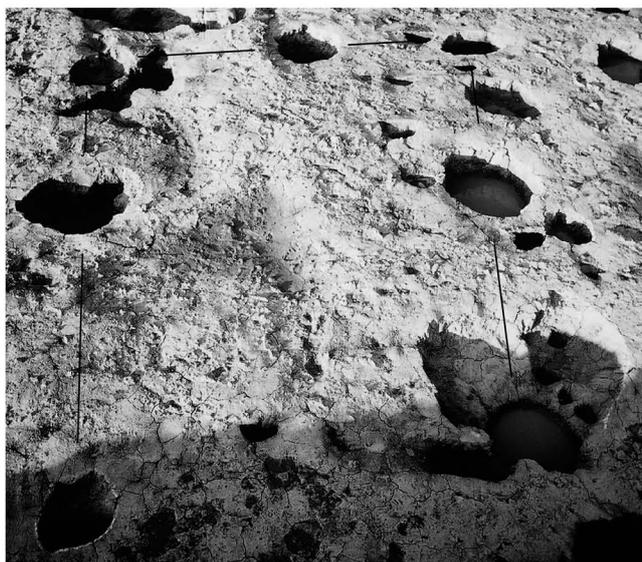
SC 1 完掘状況



SB 1



SB 2



SB 3



作業風景